

# 三島中洲

論語卷之一

學而第一

子曰學而時習之不亦說乎有  
朋自遠方來不亦樂乎人不知  
而不愠不亦君子乎

有子曰其為人也孝弟而好犯  
上者鮮矣不好犯上而好作亂  
者未之有也君子務本本立而

晚香書屋

大正十五年十月

澁澤榮一書



Chushu

近代と

Modern

其七

義利合一

是余持說然臨實際  
義進一步利退一步始  
能合一

澁澤榮一と近代漢学

三島中洲と近代 | 其七 |

渋沢栄一と近代漢学

目次

I 洪沢栄一と論語

1	洪沢栄一口話・尾立維孝筆述『論語講義』	5
2	洪沢栄一手写『論語』	5
3	三島中洲書入『四書集註』	6
4	三島中洲『論語講義』	6
5	亀井昭陽『語由述志』	7
6	安川敬一郎『撫松餘韻』	7
7	斯文会編・龍門社刊『国訳論語』	8

II 洪沢栄一と三島中洲、二松学舎

10~8	三島中洲『中洲文稿』(洪沢孺人尾高氏墓表・藍香尾高翁頌徳碑・題論語算盤図賀洪沢男古稀)	10
12・11	三島中洲『義利合一論』(自筆稿本・『東京学士会院雑誌』所収)	12
18~13	洪沢栄一書簡(三島中洲宛)	13
19	洪沢栄一書簡(三島復宛)	18
26~20	洪沢栄一書簡(山田準宛)	18
27	池田四郎次郎・尾立維孝書簡(山田準宛)	26
28	二松学舎専門学校辞令(橘純一宛、昭和3年4月)	26
29	二松学舎における洪沢栄一の講演	28
30	洪沢栄一八十歳祝賀『頌寿帖』(大正8年12月)	29

III 洪沢栄一と斯文会

31	嘉納治五郎書簡(三島中洲宛)	44
32	嘉納治五郎書簡(北村信篤宛)	44
33	牧野伸顕書簡(三島中洲宛)	45
34	服部宇之吉書簡(山田準宛)	45

IV 洪沢栄一と陽明学

35	東敬治書簡(洪沢栄一宛)	47
36	東敬治書簡(山田準宛)	48

V 洪沢栄一とその知友の漢学者たちの書

37	海保竹逕書幅・七言絶句「早春南窓弄翰」	49
38	信夫恕軒書幅・七言絶句「偶成十首之一」	49
39	阪谷朗廬ほか諸家寄合書幅	50
40	三島中洲書幅・七言律詩「己未春賀洪沢男八十」	51
41	福地源一郎書幅・七言絶句	51
42	東敬治書幅・七言絶句二首「宿長門峡二首」	52
43	山田準書幅・七言絶句「孔子聖誕二千五百年式典賦献」	52
44	芳野世経撰・洪沢栄一題額「竹内隆卿墓表」	53
45	洪沢栄一書幅・一行「馬踏春泥半是花」	53

凡例

- 一、本書に収録した資料のうち、二松学舎大学所蔵資料には、請求記号・整理番号等を略記した。個人蔵の資料には★を附した。
- 二、本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本とした。
- 三、人物の呼称は、比較的通用していると思われるものに従い、姓号・姓名の統一はしなかった。年齢表記は数え歳によった。
- 四、本書は二松学舎大学の大学資料展示室の企画展「三島中洲と近代―其七」(期間2021/5/8~6/20)の展示図録を兼ねるものである。

## 企画展開催にあたって

二松学舎大学文学部教授・大学資料展示室運営委員 町 泉寿郎

日本資本主義の父と称される実業家洪沢栄一（一八四〇～一九三二）と本学の学祖三島中洲（一八三二～一九一九）とは親交があり、洪沢は三島の歿後、本学の前身にあたる財団法人二松学舎と（旧制）二松学舎専門学校の運営にも携わった関係から、本学には洪沢に関する資料が所蔵されています。今回、「世界的危機のいま洪沢栄一を考える」をテーマに掲げて、本学において東アジア学術総合研究所主催によるシンポジウム、及び第13回東アジア文化交渉学会を開催する運びとなったので、これを記念して本学所蔵の洪沢栄一関係資料の展示会を企画いたしました。

洪沢や三島の人格形成期において、「漢学」（漢字漢文によって獲得し、また自ら漢字漢文によって表現した学術文化）は日本史上高いレベルにあり、また当時の文化において高い位置を占めました。十九世紀を通して進行した漢学から洋学へのパラダイムシフトによって漢学は解体され、新たに学術面では東洋学に脱皮し、学術面では漢文教育（言語と道徳）として浸透したと言えます。しかしながら、前代からの漢学的素養がなお残存し、一方で日本帝国主義の進展が近隣諸国への新たな関心と呼び覚ますなかで、学術と教育は全く別の道を歩んだというよりも、近代日本の歩みと歩調を合わせつつ、「近代漢学」と呼ぶうる特色あるジャンルを形成したとみることができるよう思います。

漢学者三島中洲の、豪農層から身を起こして備中松山藩儒から司法省の法曹に転じ更に東大教授を経て宮内省御用掛となった経歴は、明治十年に三島が創設した二松学舎の学校制度史上の変遷とともに、「近代漢学」の歩みの一端をよく示すものです。一方、洪沢も豪農層出身で幕臣から大蔵省官吏を経て実業家として成功し、業余にさまざまな社会事業に取り組みましたが、彼の社会事業を特徴づけているものに『論語』に代表される儒教の啓蒙普及活動があります。三島と洪沢の交流は明治十年代に遡りますが、洪沢が古稀（一九〇九年）を境に実業界の一線を退いて以降、「義利合一論」を持論とする三島との関係が急接近しました。その後の二十年あまり―日露戦争後から第一次世大戦を経て満州事変に至る時期―、洪沢は二松学舎への支援以外にも、最大級の論語コレクションとして残る論語関係文献の収集（青淵論語文庫）、論語関係書籍の公刊、湯島聖堂の存続とその管理団体としての斯文会の設立、宗教間対話の促進をめざした帰一協会への支援、陽明学会への支援など、「近代漢学」の一ページとなる特色ある活動を数多く行っています。これらの事業を概観し、また洪沢自身の言葉を見ていくと、彼の漢学への視線が極めて現実的かつ切実なものであったことを感じます。儒教の普及啓蒙は官尊民卑の打破・商工業者の地位向上を掲げ民の立場に立った公益を追及した洪沢らしい活動であったと言えます。SDGsが言われる今こそ三島や洪沢の考えを振り返ることは意味がある、格差問題が顕在化している今こそ中間層の充実を希求した洪沢の考えを知ることには意味がある、国際関係が大きく旋回しつつある今こそ百年前の「近代漢学」を回顧することには意義がある、と思います。一人でも多くの方に関心を持っていただければ幸いです。

令和三年五月一日



# I | 渋沢栄一と論語

## —徳富蘇峰の渋沢『論語』評価—

「此頃実業之世界社より『実験論語処世談』を贈り来つた、此れは云ふ迄もなく、渋沢子爵の口述を筆記したもの、論語の講義と云ふも其実は論語の章節を題目として、渋沢翁が六十年間に亘りたる、其の胸中の墨塊を吐き出したもの也。

予は此書には初見であるが、其の内容は一悉くとは申さないが略ぼ承知してゐる、そは雑誌に掲載せらるゝ毎に愛読したから。老人の談話は、塩煎餅を噛む如く、齒にも答へず、腹にもたまらぬが中々味ひがある。特に渋沢老人の如き歴史付と云はんよりも、歴史其物の談話は面白い、渋沢翁は懸値なき所が歴史だ、正札付の歴史だ。

論語の講義は必らずしも渋沢翁を待たぬ、されど其講義中の実験談に至りては何晏でも皇侃でも、朱子でも、近くは我が物徂徠でも亀井昭陽でも、到底渋沢翁には敵しまい、何となれば彼等は渋沢翁程の閱歴と経験とを持たぬからだ、此書の特色は此処にある、兎角渋沢翁は円満居士であり過ぎる、然るに此書に限り、随分思ひ切り其の所見を開陳してゐる、而して論語の講義に、伊藤・井上・大隈は勿論、大倉喜八郎・浅野総一郎・大川平三郎・山下亀三郎・野依秀一等の諸氏迄出で来るに於ては、地下の孔夫子も恐らくは面喰はざるを得まい。」  
(『国民新聞』、「修史余筆」18、渋沢翁と論語)

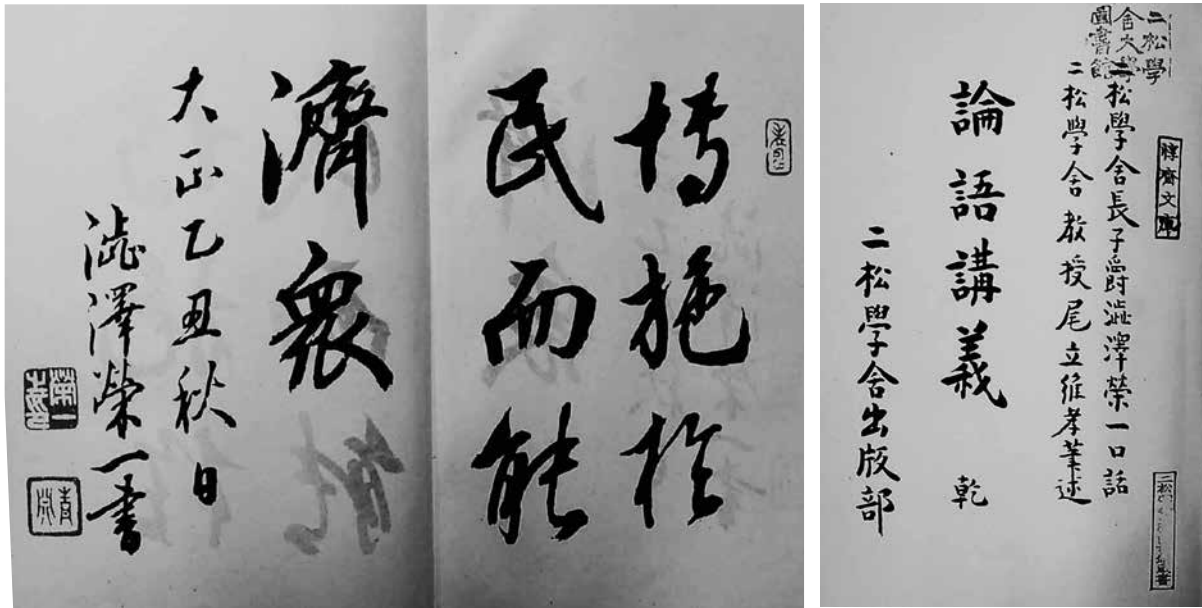
## —渋沢栄一の『論語講義』—

渋沢栄一の『論語』として最も完備したものは、大正14年(1925)に二松学舎出版部から渋沢栄一口話・尾立維孝筆述として刊行された『論語講義』である。今は手に取りやすい文庫本にもなっている。渋沢の『論語講義』は、『実験論語処世談』と題して刊行された渋沢の談話筆記をもとに、二松学舎の尾立維孝が原稿を作成した。渋沢の談話は、必ずしも原文の順によらず随意に語られており、全ての章句を網羅しているわけでもない。尾立は通常の『論語』注釈書のごとく、20巻全ての章句について順を追って「原文」「訓読」「字解」「講義」に分ち、「講義」の箇所に渋沢の談話を存分に盛り込んで編集した。その結果、渋沢の『論語講義』は、徳富蘇峰が評するように、『論語』の講義というより、『論語』講義の形式を借りて渋沢自身の幕末明治史の実見談を語るものになっており、そこに大きな特色がある。渋沢栄一という人物を知る上でも、幕末明治史の証言としても意味がある。

## —渋沢栄一と安川敬一郎—

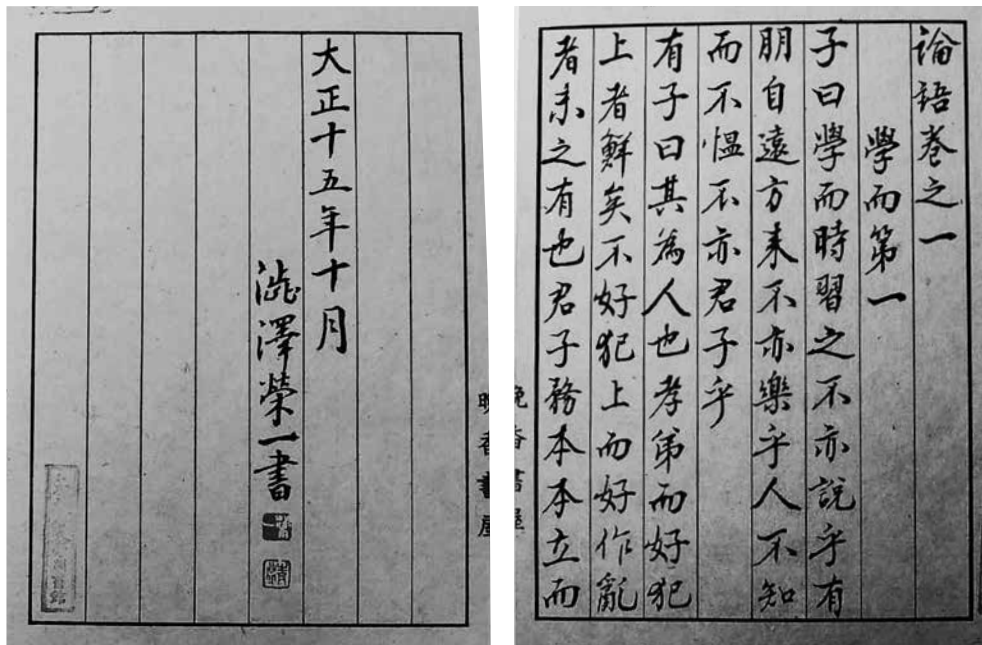
尾立維孝(1860~1927)は二松学舎を経て司法省法学校速成科を卒業した法曹で、退官後、二松学舎の理事となり渋沢の学舎運営を助けた。三島中洲に学んだ尾立が編集したためもあって、渋沢の『論語講義』は古典解釈の面では、三島中洲の『論語講義』(1917)に依拠することが多い。しかしながら、三島が参照しない文献を渋沢が引用する場合もあり、その顕著な例は亀井南冥の『論語語由』である。渋沢は亀井の学統を汲む福岡の実業家安川敬一郎を通じて『論語語由』を知った。安川敬一郎もまた「論語漫筆」と題した『論語』講義を残しており、亀井南冥・昭陽の注釈によりつつ、歴史や政治に関する私見を存分に語っている。渋沢と安川の『論語』講義は自己を語る形式の点に共通点を持ちながらも、両者の儒教感や志向の違いを反映して内容の点で異なる面も少なくないようだ。

亀井の注釈に依拠した安川に比べて、渋沢自身は注釈の扱いに関してより自由であったかもしれない。渋沢が漢学者に呼びかけて斯文会から出版した『国訳論語』は、注釈を削除し本文の訓読文だけからなっている。『国訳論語』にみる簡略化と、『論語講義』にみる経験談は、古典を生かし実践する点において交差するものであり、共に近代漢学の一端を示すものであったと言えるだろう。



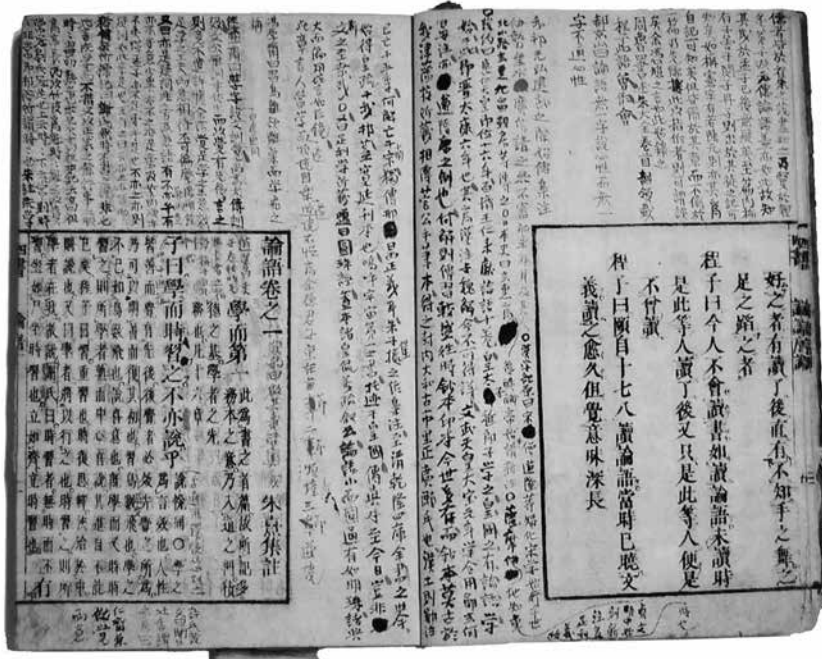
1 | 渋沢栄一口話・尾立維孝筆述『論語講義』(1925年二松学舎出版部刊、123.83-SE)

渋沢は雑誌『実業之世界』に「実験論語処世談」と題した談話筆記を大正4～13年(1915～1924)に133回に亘って連載し、同11年(1922)に単行本として刊行した。尾立維孝は三島中洲その他の注釈書を参照しつつ渋沢の談話筆記を織り交ぜながら注釈書形式の原稿に再編し、渋沢の校閲を経て本書を刊行した。「博施於民而能濟衆(博く民に施して能く衆を濟ふ)」は、渋沢が『論語講義』の巻頭に自ら揮毫した題字であり、『論語』雍也篇に見える言葉。民衆救済を語るこの言葉の中に、渋沢が『論語』の極意を見出していたことが分かる。渋沢自身が希求した商工業者の地位向上、中間層の保護育成もここから導き出されたものと言ってもよいだろう。



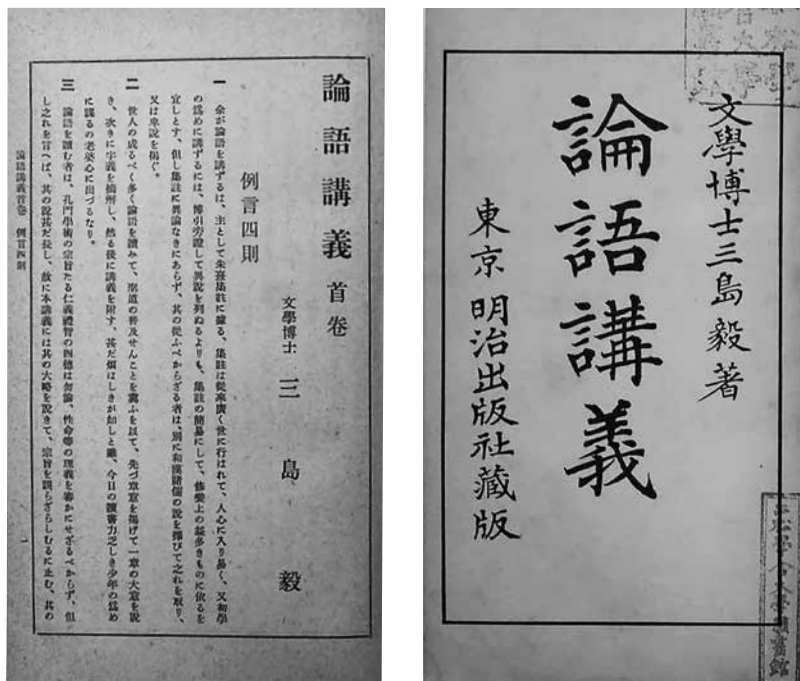
2 | 渋沢栄一手写『論語』上下2冊(大正15年(1926)10月書、昭和2年(1927)刊、123.83-R)

大正11年(1920)は孔子歿後2400年に当たり、「論語文庫」の開設を思い立った渋沢は、女婿穂積陳重に『論語』関係文献の収集を委嘱した。だがその収書は関東大震災で灰燼に帰してしまう。その後、有志者の寄贈によって「論語文庫」が再び作られ、渋沢邸内の晩香廬に収められた。これを記念して渋沢は『論語』の本文を自ら書写して、それをコロタイプ印刷に附し知友に頒布した。渋沢が本文を書写した中国古典には、他に『孝経』『大学』がある。書の手本には趙子昂を好んだ。渋沢は自著『論語と算盤』や斯文会刊『国訳論語』などの啓蒙書のほか、林泰輔『論語年譜』などの学術書の刊行や貴重書の複製も支援した。昭和2年(1927)に塩谷温(漢学者、東京帝大教授)が曲阜の孔廟に参拝した際に、渋沢は塩谷に代理参拝を依頼し、手写『論語』『孝経』『国訳論語』『論語年譜』『論語講義』等を献納している。



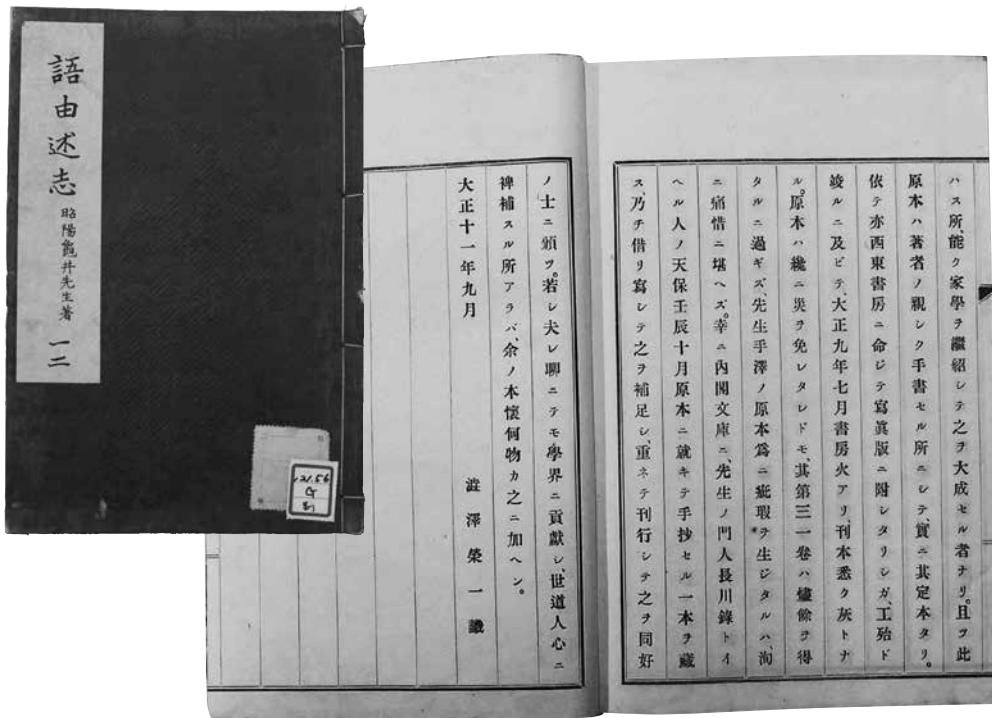
3 | 三島中洲書入『四書集註』（天保8年〈1837〉大坂河内屋喜兵衛等刊、存4冊、和装本0031）

書入れに便利なように余白を大きくとった（小本用に作られた版木を半紙本で印刷）このタイプの『四書集註』は、「小松版」と呼ばれ幕末・明治期の漢学学習者に愛用された。中洲も長年に亘って使用しており、筆跡から見てその書入れは幕末から晩年まで50年以上に及ぶ。書入れは当該本文の解釈に関連する中国・日本の各種文献からの引用であり、後年この書入れを整理して、『論語私録』などの漢文体の注釈書が編纂されている。



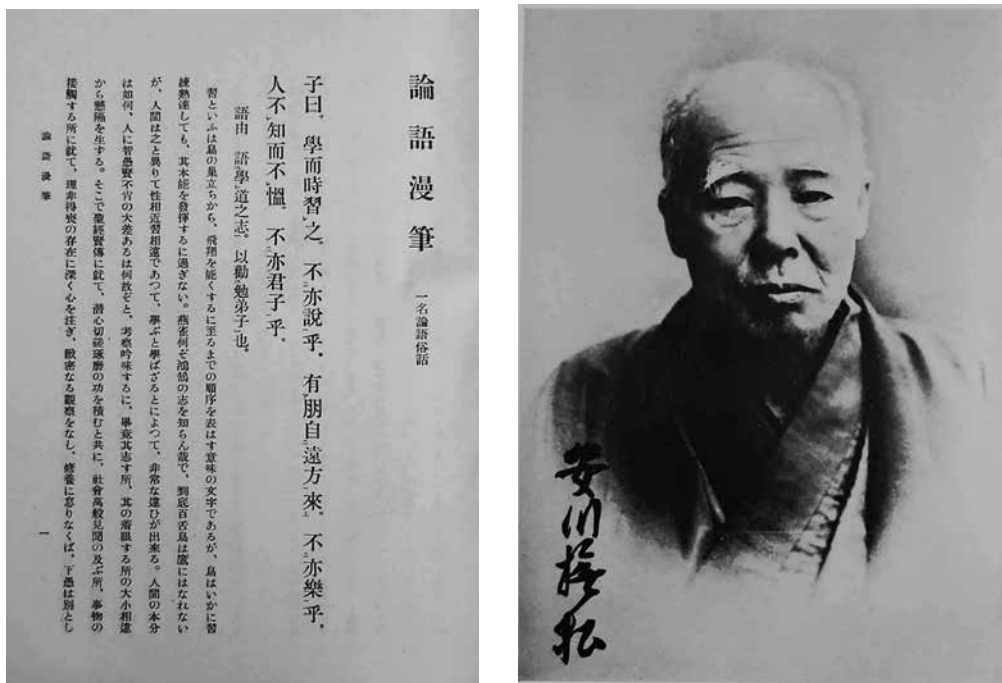
4 | 三島中洲『論語講義』（大正6年〈1917〉明治出版社刊、図書0040）

中洲の『論語』注釈には、漢文体の『論語私録』（未刊）が残されているが、『漢文註釈全書』の中の一冊として刊行された本書は、当時の一般読者にも理解しやすいように『論語』本文に続いて「章意」「摘解」「講義」に分けて和文で解説している。『論語私録』をもとに門人が原稿を作成し、中洲の校閲を経て成稿した。古典解釈としては、「簡易にして修養上の益多い」朱熹『四書集註』に依りつつ和漢古今の諸注を参照し、自説も交える。巻末に、「性命」等の重要な問題に関する補足として、中洲の講演11本を附録している。渋沢の『論語講義』では、しばしば「中洲先生の説」として、また特に中洲の説と断らずに、中洲『論語講義』の解釈を引用している。



## 5 | 亀井昭陽『語由述志』（大正11年〈1922〉西東書房刊、漢目P33上3）

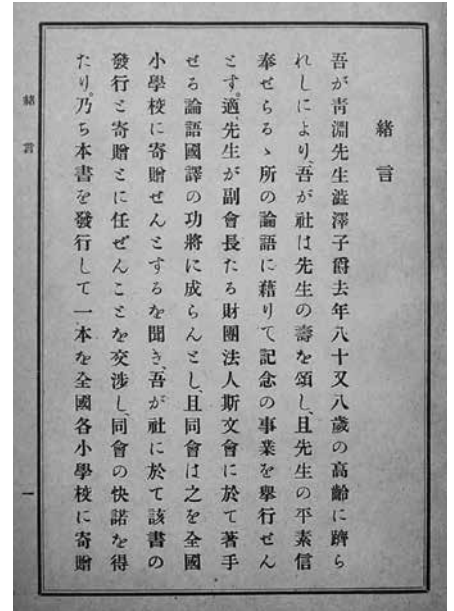
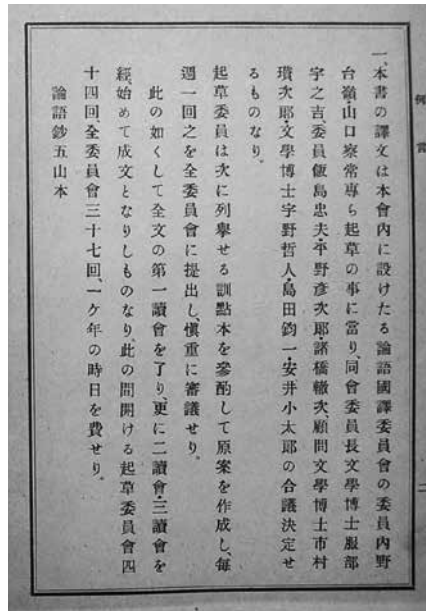
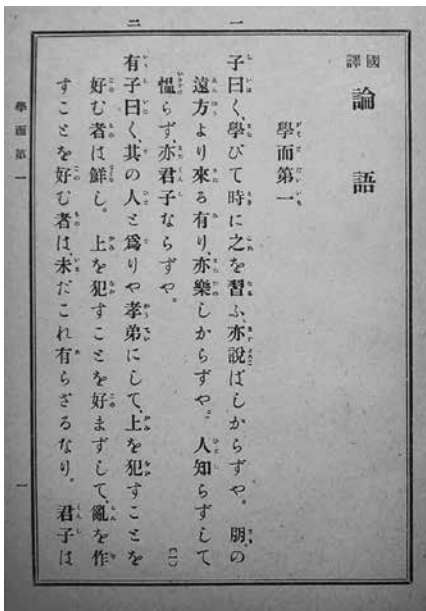
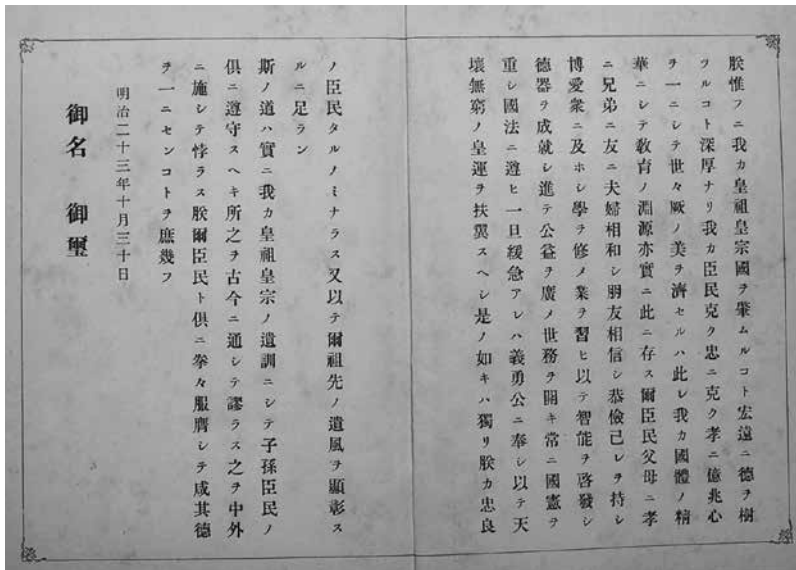
洪沢は、大正8年（1919）2月に亀井南冥『論語語由』の版本（文化3年秋月藩版、亀井昭陽書入本）を、同11年（1922）9月に亀井昭陽自筆『語由述志』を、玻璃版（コロタイプ印刷）によって複製刊行して知人に頒布した。前者の底本は実業家安川敬一郎の所蔵にかかり、後者は洪沢の所蔵するところとなった。洪沢は安川を通じて『論語語由』を知り、その価値を認めて刊行したのである。洪沢がコロタイプ印刷によって複製した『論語』には、他に南宋版『論語注疏』（宮内庁書陵部所蔵）がある。



## 6 | 安川敬一郎『撫松餘韻』（昭和10年〈1935〉松本健次郎刊、写真は『撫松餘韻』口絵より転載、289.1-YB）

安川敬一郎（1849～1934、号撫松）は安川電機の創業者。福岡藩士で亀井昭陽に儒学を学んだ徳永省易の四男に生まれ、炭鉱業で財を成した。中国との事業提携を進め、孫文とも親交。明治専門学校（現九州工業大学）設立等の社会貢献事業、『論語』への造詣など、その活動は洪沢栄一と対比できる点が少なくない。安川の「論語漫筆」（1915年起稿）は、『筑紫史談』に34回に互って連載され、亀井南冥・昭陽の解釈によって講じ、時事問題等に及ぶ。





7 『国訳論語』(昭和3年(1928)5月、斯文会編・龍門社刊、123.83-S)

本書は澁沢の米寿記念事業として、「財団法人斯文会、代表者服部宇之吉」を編訳者として、「財団法人龍門社、代表者阪谷芳郎」を発行者として刊行された。版型に2種類あり、大型本(小学校用読本に準ずる)は全国の小学校に一部ずつ寄贈され、小型本は龍門社社員に頒布された。扉に「澁沢青淵先生米寿祝賀記念」の文字を掲げ、次に見開きで教育勅語を掲載する。

次いで例言においては、国民道徳涵養のための『論語』の普及であることを明言している(「広く孔子の教義を宣揚し、堅実なる思想の涵養に資せんとするものなり」)。また、文字章句は、朱子の「集註」を基本としつつ、『論語義疏』『論語註疏』古本等によって補正する。訳文(訓読文)は従来の訓点に従い、基本的に新しい訓法を試みないと言っている。その目的や古典解釈の姿勢の点で保守的な性格を持つ一方、総ルビを施し上欄に通し番号を附すなど、本書は中国古典を初等教育に活用するための新しい試みも兼ね備えているように見える。

服部宇之吉によれば、当初、澁沢は斯文会において『論語』の新しい注釈書を編纂することを希望した。しかしそれには長い歳月を要するので、簡単な注解を加えた本文のみの国訳を作成することとなった。

本書の編纂に当たって、斯文会内に論語国訳委員会を設置し、内野台嶺・山口察常が諸本を参照して訓読文の原案を起草し、毎週一回委員会を開催してこれを審議し、一年半かけて三回通読して定稿とした。委員には服部宇之吉(委員長)・飯島忠夫・平野彦次郎・諸橋徹次、顧問に市村瓊次郎・宇野哲人・島田鈞一・安井小太郎といった当時の著名な漢学者が名を連ねている。戦前期を代表する漢学者たちが編纂に協力し、澁沢が近代的初等教育の場での普及を支援した本書は、近代漢学によって提供された『論語』のひとつの極点を示している。

## Ⅱ | 渋沢栄一と三島中洲、二松学舎

### —渋沢栄一と三島中洲—

両者が親交を深めるのは、渋沢が明治42年（1909）、70歳を期に実業界の一線から身を引いて以降のことである。渋沢の古稀を祝い、三島は「題論語算盤図賀渋沢男古稀」を撰文して贈った。これを機に渋沢は「論語と算盤」を提唱することになる。

しかし両者が相識したのはそのずっと以前にさかのぼる。三島は第八十六国立銀行（中国銀行の前身）の設立にあたり、渋沢をはじめとする中央の官界・財界から情報を収集し銀行設立の中心的役割を果たした（1877～79）。

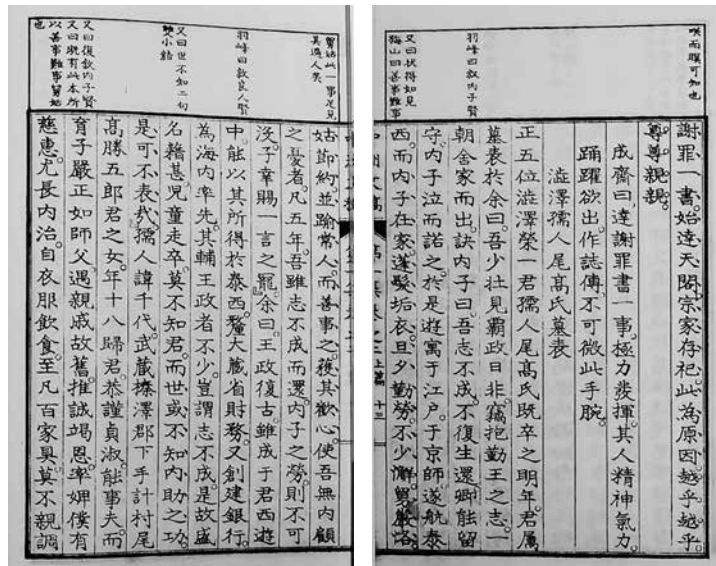
明治15年（1882）7月14日に糟糠の妻千代子を喪った渋沢は、共通の知合いである玉乃世履の紹介によって三島に墓碑文を依頼する。墓碑文の出来栄は、漢文作者としての三島の実力を渋沢に認識させるきっかけとなった。以後、渋沢は三島にしばしば撰文や添削・代筆を依頼し、三島は子息や二松学舎塾生らの就職等を渋沢に相談している。三島の『中洲文稿』初集～4集に収録されている渋沢に関連する文としては、妻千代子の墓碑文、従兄尾高惇忠の顕彰碑、「題論語算盤図賀渋沢男古稀」「移建愛蓮堂記」「祭枯松文」等があるが、書簡や日記からは三島が渋沢のために多くの文章を添削・代筆していたらしいことがうかがえる。

### —渋沢栄一と二松学舎—

明治10年（1877）創設時に「中学私塾」として出発した二松学舎は、当初、恒常的な中等教育機関の不足を背景に多くの生徒を集めた。しかし教育令の発布によって各種学校と位置付けられ、また中等教育機関が次第に整備されるに従い、漸次経営困難に陥った。同36年（1903）には有力門人を中心に二松義会という運営組織を作り、同42年（1909）には財団法人二松義会とした。渋沢の女婿であり、三島にとっては親友の子である阪谷芳郎の「他人に出資を募るには先ず自ら出資せざるべからず」との意見に従い、翌年、三島は所有する学舎敷地を財団法人二松義会に譲渡し、これを機に渋沢は二松義会の顧問に名を連ねた。これが渋沢が三島との個人的な関係を越えて、二松学舎と関係を持った最初である。同44年（1911）には二松学舎存続のために実業家を集めて義捐金を募集する会合が開かれ、東宮からは内帑金が下賜されている。大正8年（1919）に三島が亡くなった後、財団法人二松学舎に改組され、渋沢の指揮下に尾立維孝らが実務に当たる体制が作られていく。

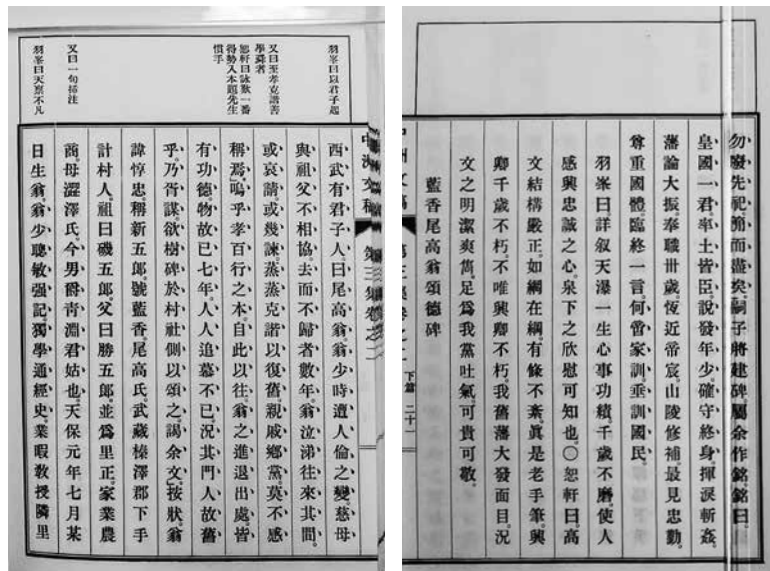
### —渋沢栄一と山田準—

三島と渋沢の關係に比べて目立たないが、三島の師にあたる儒者山田方谷の養孫でその学問的後継者といえる山田準（1867～1952、東大古典講習科出身、五高・七高教授）もまた、渋沢といくつかの接点があった。方谷・中洲の学統を汲んで陽明学を奉じた山田準は、漢文科教師として渋沢の長男篤二と四男正雄を教えたことがあり、また渋沢が資金援助した東敬治の雑誌『陽明学』に、山田準が毎号のように寄稿していることから、渋沢は山田の存在を認識するようになった。大正6年（1917）、三島の懇望によって二松学舎の第三代舎長に就任した渋沢は、二松義会の会合で山田と顔を合わせたことがきっかけとなり、大正13年（1924）に三島の三男復（東京帝大漢学科卒）が早世した後、教学の中核を担う人物として山田を招請した。渋沢舎長・山田校長のもとで、二松学舎は国語漢文科の中等教員養成のための専門学校として改組される。大正期には既に私立大学も設立されはじめていたが、渋沢は漢文教育の位置づけとして、高等教育ではなく中等教育の場をより重視したものと考えられる。



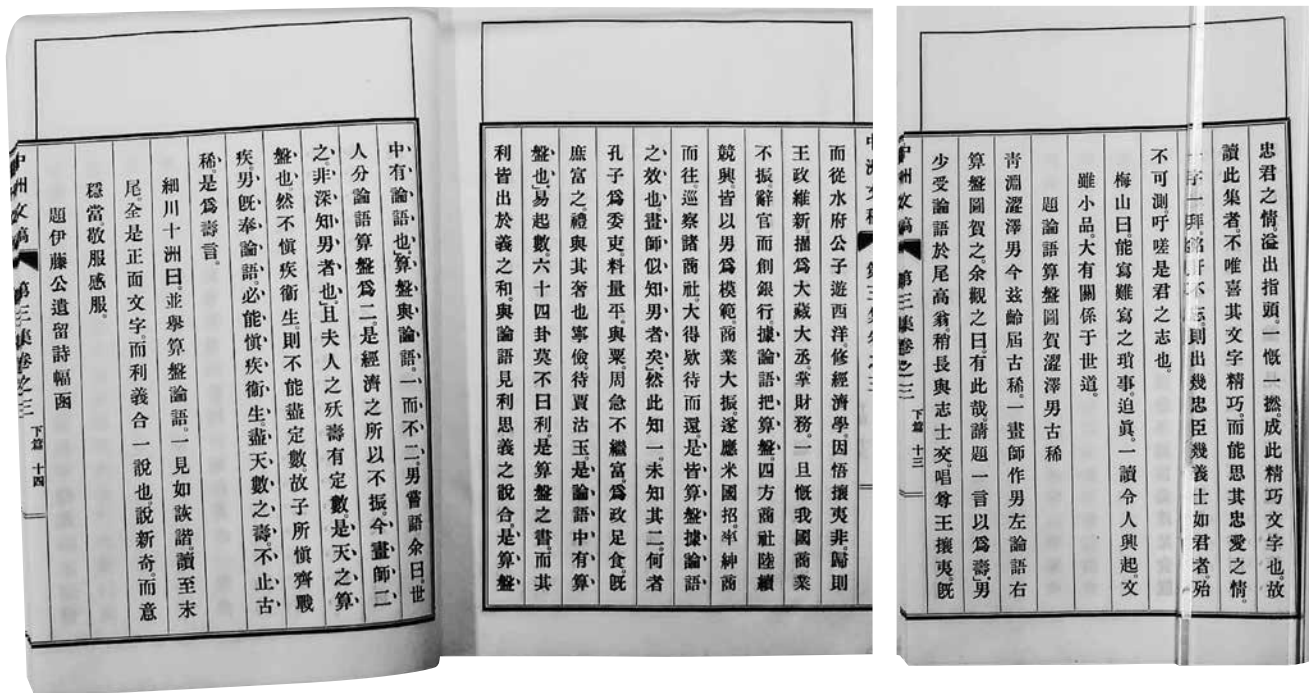
8 三島中洲撰「渋沢孺人尾高氏墓表」  
 (明治16年(1883)8月成、『中洲文稿』第1集卷2上所収、1898年吉川半七刊、090-C)

渋沢の妻千代子(1841~1882、尾高氏)は明治15年(1882)7月14日にコレラによって急逝した。渋沢は、大審院長を務めていた親友玉乃世履から紹介されて三島を知り、翌16年(1883)、三島に亡母の招魂碑(渋沢撰文)の添削と妻千代子の墓碑文の撰文を依頼する。8月中にはほぼ成稿し、11月に建碑された。撰文にあたって三島は渋沢から千代子のことを詳しく聞き取り、こういう話そのまま文になると言ったという。その言葉の通り「渋沢孺人尾高氏墓表」は、渋沢が語った言葉として尊攘運動から渡仏に至る5年間の妻の内助の功を記述し、それに応えた三島の言葉として渋沢の名声を知らぬ者はないが妻の内助の功を知る者は少ないからこれを表さねばならないと記し、墓碑文の構成としてはやや異例である。しかし渋沢は妻に対する自分の真情が巧みに表現されたこの文を高く評価し、三島の文章家としての能力に信頼を寄せた。



9 三島中洲撰「藍香尾高翁頌徳碑」  
 (明治40年(1907)7月成、『中洲文稿』第3集卷2下所収、1911年博文館刊、090-C)

尾高惇忠(1830~1901、通称新五郎、号藍香)は、渋沢にとって従兄であり、初学の師であり、妻千代子の兄でもある。この頌徳碑は郷里・手計村の鹿島神社境内に明治42年(1909)に建立され、4月18日に渋沢を迎えて除幕式が開かれた。地元有志によってこの建碑が企画されたのは同40年(1907)5月であるが、相談を受けた渋沢は尾高への思いの深さ故に、ありきたりの追従の文を望まず慎重に進めるよう求めた上でこれを承諾した。渋沢は信頼する三島にその撰文を依頼し、三島は800字に及ぶ長文を起稿し、何度かの修正を経て成稿した。三島の渋沢宛書簡によれば、生前の尾高が三島を訪ねて来た時、尾高の学問人物をよく知らなかったのが、通り一遍の挨拶で済ませてしまったが、渋沢の追悼演説や尾高の著書を見て「感服」したと述べている(明治42年? 11月21日付、『渋沢栄一伝記資料』57巻)。渋沢は除幕式において、尾高の清廉潔白で情に厚い人柄を語り、三島の碑文が「西武に君子人あり」に始まることを、「其冒頭に適當なる文字を置かれたと喜ぶ」と述べている。



10 三島中洲撰「題論語算盤圖賀澁沢男古稀」  
 (明治43年(1910)1月撰、『中洲文稿』第3集卷3所収、1911年博文館刊、090-C)

古稀を迎えた明治42年(1909)の澁沢は、日糖疑獄事件が誘因となって多くの役職を辞任した後、米国実業界からの招聘を受けて渡米実業団を組織して8月に渡米、12月に帰国した。三島は前年に澁沢邸に招かれた際、澁沢が古稀記念に贈られた書画帖『介眉帖』を見、その中の小山正太郎画「論語算盤図」に興味を惹かれ、この絵に関する文章を作って贈りたいと考えた。12月に帰朝した澁沢から渡米中の詩が送られたので、三島はこの機会を捉えて「題論語算盤図賀澁沢男古稀」を作文し、同43年(1910)1月9日に清書して澁沢に贈った。1月9日の書簡において三島は、「ちょっと諧謔に等しく聞へ候へども、実は小生年来の持論、義利合一の理、真面目のものに御坐候。拙文拙書に候へども、主旨は御玩味下さるべく候」と述べており、この文が「義利合一論」以来の持論であり、その趣旨に自信を持っていたことが窺える。「題論語算盤図賀澁沢男古稀」には、三島から澁沢に贈られた原本と、後に三島自身が『中洲文稿』第3集に収録したものがあり、文字に若干の異同がある。

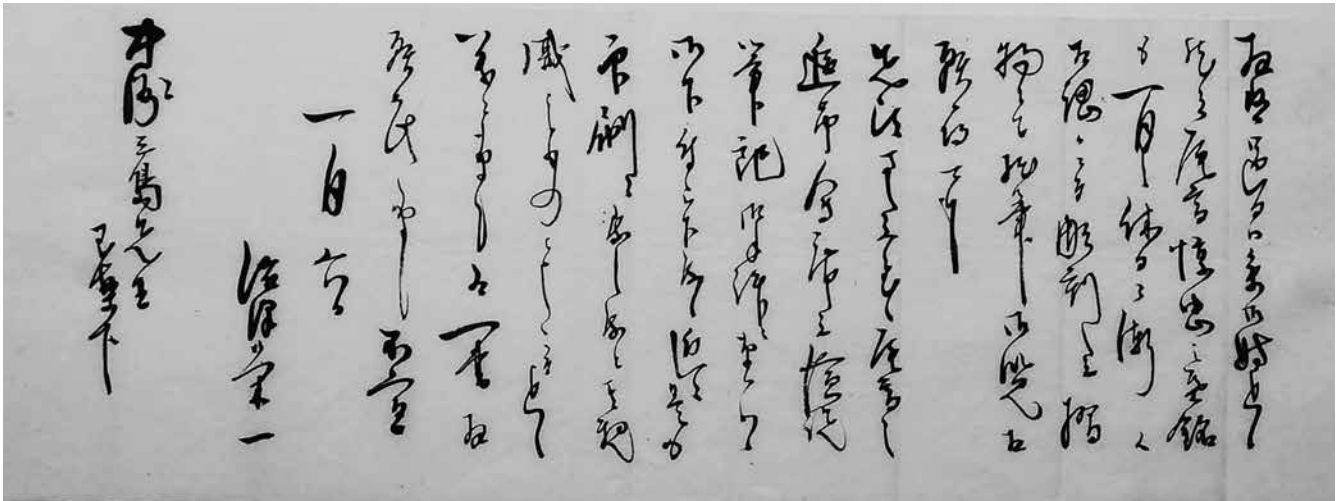


参考・小山正太郎画「論語算盤図」(澁沢史料館所蔵)  
 「論語を礎として商事を営み、算盤を執て士道を説く。非常の人、非常の事、非常の功。  
 明治四十二年一月下流、画於先楽山莊香温茶熟處。正」





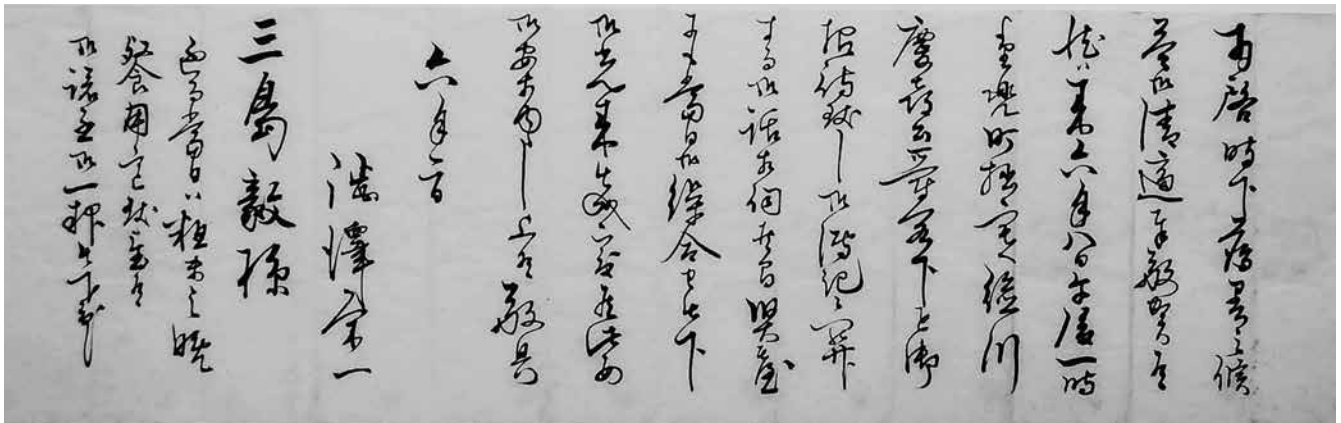




**13** | 澁澤栄一書簡 (三島中洲宛、〔明治36年(1903)〕1月6日、小野家寄贈・新取資料)

本書簡に見える澁澤栄一撰文にかかる「尾高惇忠之墓碑」は、前出の三島中洲撰「藍香尾高翁頌徳碑」とは別のもので、碑文は深谷市下手計の尾高家墓地に現存する。惇忠の死は明治34年1月2日のことであるが、澁澤がその墓碑文を撰文したのは翌35年(1902)で、同年の澁澤日記や三島書簡にこの墓碑文に関するやりとりがある。多忙な澁澤に代わって三島が撰文し、澁澤がその叙述に対して度々修正意見を述べて成稿したようだ。翌36年1月3日の澁澤日記には「尾高惇忠ノ墓碑揮毫」のことが見える。

【翻刻】 拝啓、過日ハ參、御妨申上候。然ハ尾高惇忠之墓銘も一月之休日ニ漸ク相認候ニ付、彫刻之上、摺物ニテ拙筆御覽相願度奉存候。先頃さし上置候尾高之追吊會、席上演説筆記、御手許ニ御座候ハ、御下付被下度候。近々是も印刷ニ致し度と其親戚之ものニ申候ニ付、申上候義ニ御座候。右一書拝願如此御座候。不宣。  
一月六日 澁澤栄一 中洲三島先生玉案下



**14** | 澁澤栄一書簡 (三島中洲宛、〔明治42年(1909)〕6月2日、小野家寄贈・新取資料)

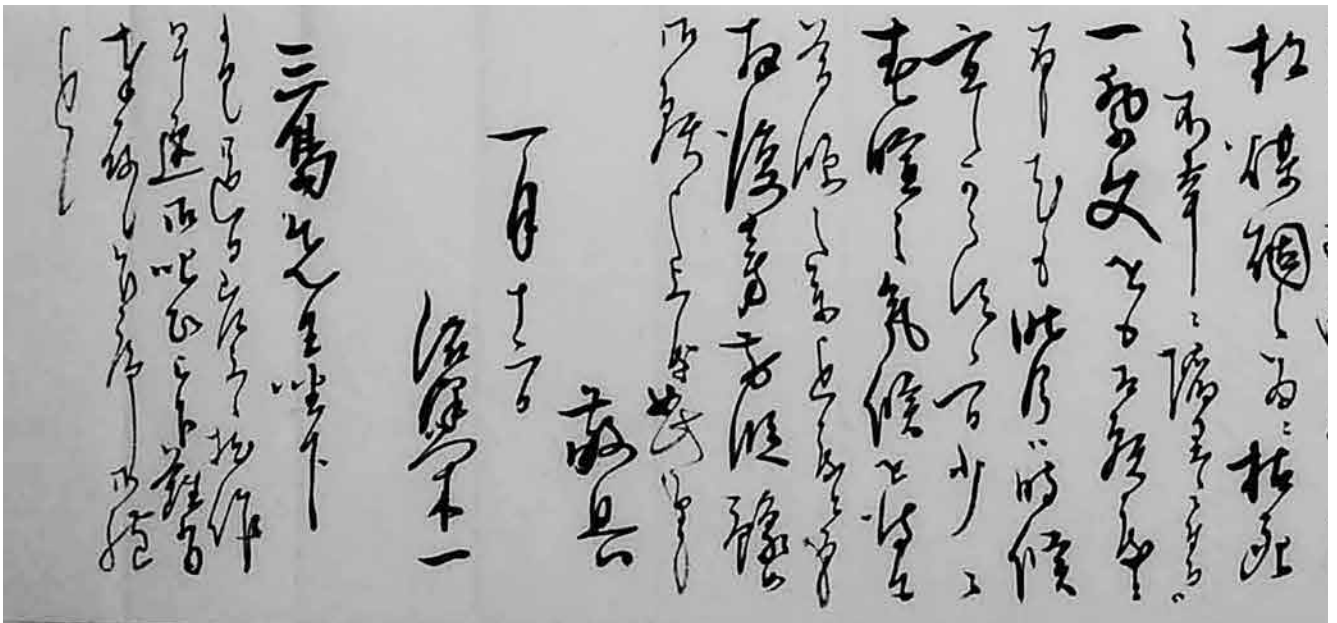
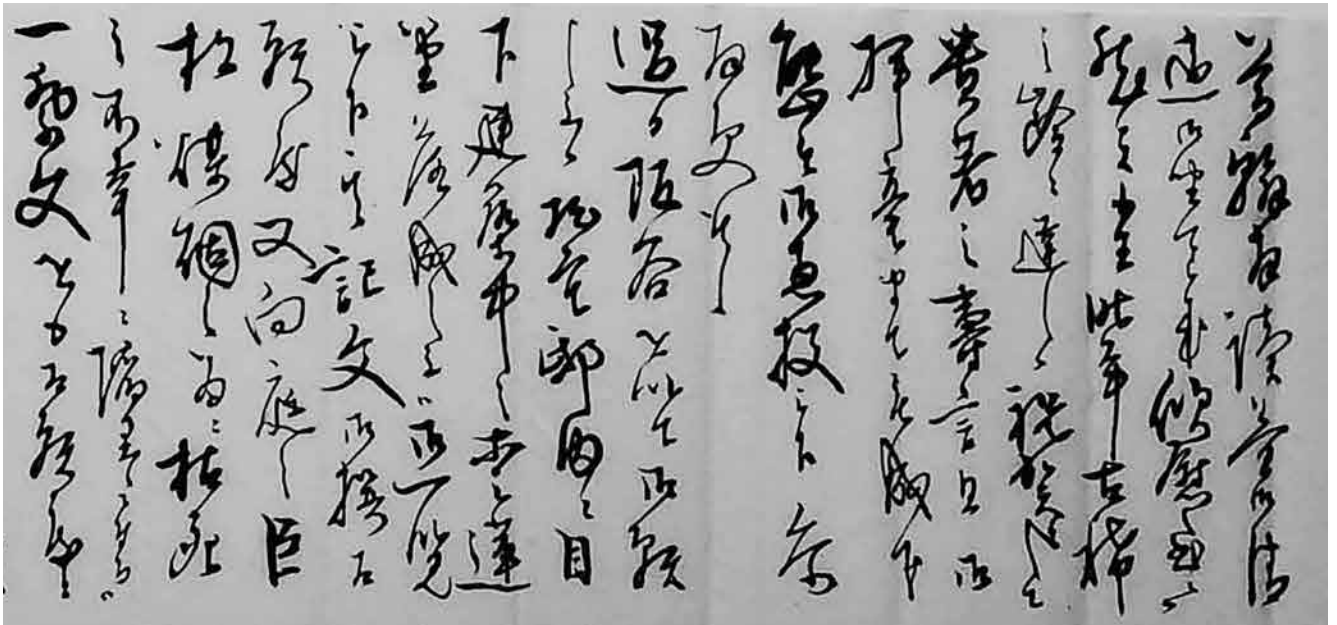
澁澤は旧主徳川慶喜の復権を願い、その伝記編纂に使命感を持った(『徳川慶喜公伝』1917年刊)。当初編纂を依頼していた福地源一郎が病没したため、澁澤はあらためて国史学者三上参次に相談して新進学者を集め、慶喜から直に経験談を聞く「昔夢会」を組織し、明治40年~大正2年(1907~13)に26回の会合を開いた。三島は幕末の老中板倉勝静の側近山田方谷の高弟であることから、澁澤が三島を昔夢会に招き、三島は計11回出席して自身の見聞を発言している。本書簡は、三島が初めて出席した第4回昔夢会(6月8日)の招待状である。昔夢会は三島が澁澤と面会する機会を増やし、翌年の「論語と算盤」の共感につながる。

【翻刻】 拝啓、時下薄暑之候、益御清適奉敬賀候。然ハ来六月八日午後一時より兜町拙宅へ徳川慶喜公爵閣下を御招待致し、御傳記ニ關する御話相伺候間、賢臺にも當日御繰合セ被下、御光来被成下度候。此段御案内申上候。敬具。

六月二日 澁澤栄一 三島毅様

逐而當日ハ粗末之晚餐用意致置候。御諾否御一報被下度候。

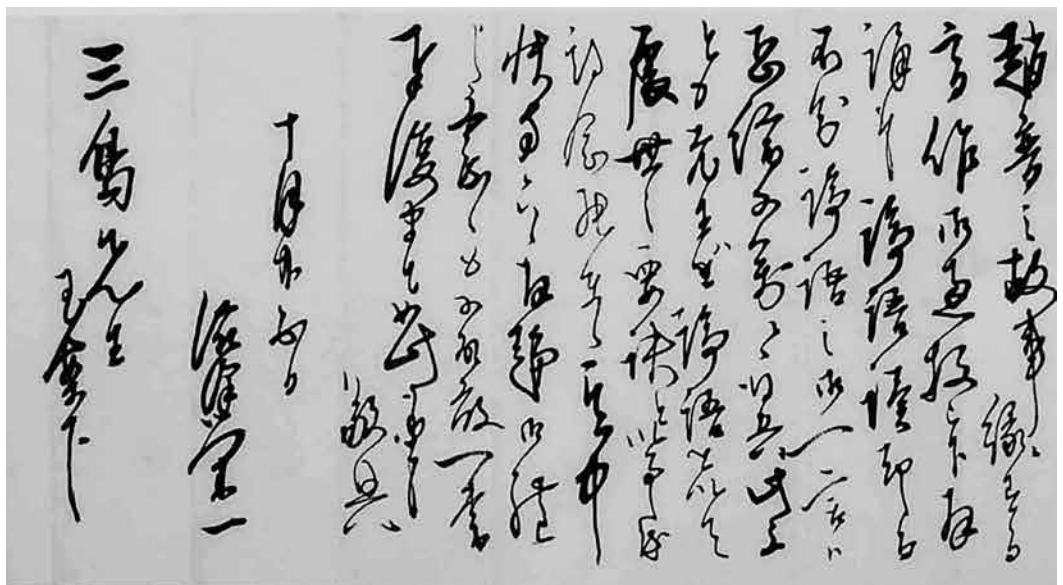
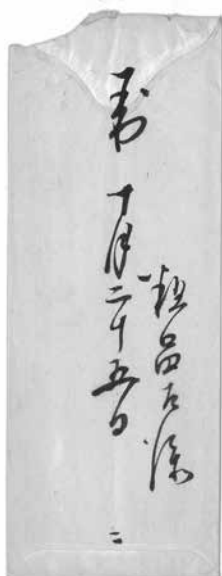
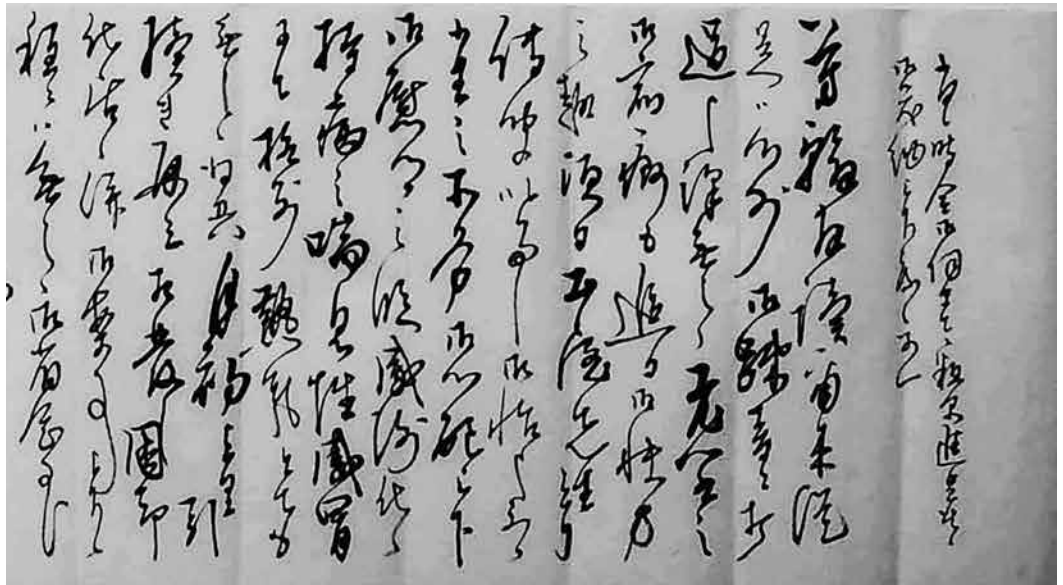
(封筒) 麴町区一番町四十九番地 三島毅様(六月八日一時) / 封 澁澤栄一「東京市日本橋區兜町貳番地 / 澁澤事務所 / 電話浪花長一五八番・一〇一三番」



### 15 澁沢栄一書簡（三島中洲宛、〔明治43年〕1月12日、小野家寄贈・新取資料）

展示品10の解説に記した通り、前年12月に米国から帰国した澁沢に宛てて、三島は「題論語算盤図賀澁沢男古稀」を撰文し、1月9日に清書して澁沢に贈った。本書簡はその返書と思われる。「貴著之壽言」は三島の古稀記念に刊行された『従心壽言』（1901年刊）のこと、「御揮毫」が「題論語算盤図賀澁沢男古稀」と推定される。澁沢からは、飛鳥山邸内に移築中の「愛蓮堂」と枯死した巨松に対する文の依頼があった。愛蓮堂は平壤から清水満之助によって移築された朝鮮の古建築。三島は同年春に澁沢邸に招かれて実見した後、二つの文を6月に起稿。澁沢の意見を入れて改稿し、11月に澁沢が清書している（ともに『中洲文稿』第4集所収）。

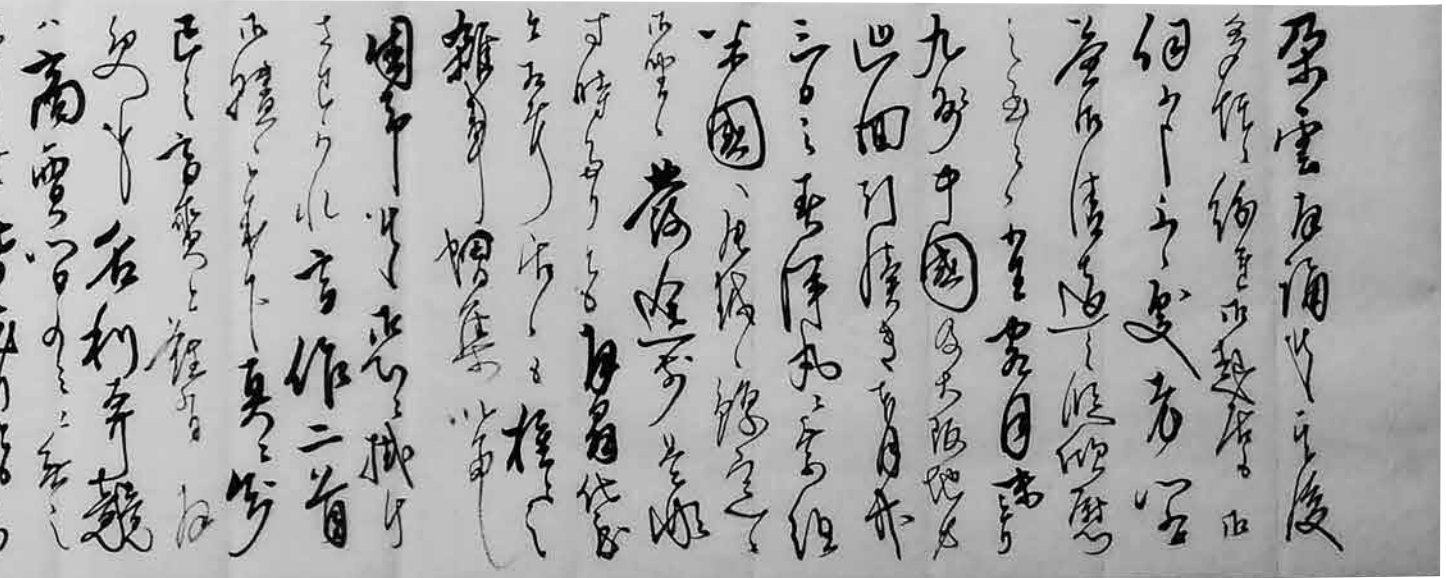
【翻刻】尊翰拝讀。益御清適御座可被成、欣慰之至ニ候。然ハ小生昨年古稀之齡ニ達シ候祝賀として、貴著之壽言、且御揮毫まで被成下、態々御惠投被下、忝拝受仕候。過日、阪谷を以て御願申上候、拙宅邸内ニ目下建築中之愛蓮堂落成之上ハ、御一覽被下、其記文御撰相願度、又向庭之巨松煤烟之為ニ枯死之不孝ニ陥リ候ニ付而ハ、一祭文をも相願度と存候。尤も昨今ハ時候宜しからず候間、少々春暄之氣候を待て尊臨之義申上度と存候。拝復旁前段豫め御願申上度如此御座候。敬具。  
一月十二日 澁沢栄一 三島先生坐下  
尚々、過日差上候拙作、早速御叱正被下、難有奉存候。乍序御禮申上候。



16 渋沢栄一書簡(三島中洲宛、〔大正5年(1916)〕10月25日、F175)

本書簡は、渋沢が「論語を以て處世之要訣といたし度」という信念を披歴している点が貴重である。本書簡は年代同定が難しいが、渋沢が支援した修養団の理事会を自邸で開いた時(大正13年6月27日、『向上』18巻7号、『渋沢栄一伝記資料』巻43所収)の記事が参考になる。この時、晩香廬の床の間には三島が渋沢に贈った次のような書幅が掛けられていたという。「曾平天下有前賢、円転如珠魯論編、活用残經治商務、東方今見老青淵。青淵渋沢男平生活用論語經理商務、吾輩読論語不知論語在所淨慙因賦此以贈。丙辰十月八十七叟中洲三島毅未定稿」。北宋・趙普の故事(渋沢は、趙普が論語の半分で太祖を補佐し半分で我が身を修めたという故事をしばしば引用する)を踏まえた詩句と「読論語不知論語」の一致から、この書幅は本書簡が書かれた時に三島が渋沢に贈ったものと推定する。三島の87歳は大正5年に当たる。書簡中に見える「土屋先生」は漢学者土屋鳳洲(1841～1926、名は弘、池田草庵・阪谷朗廬・森田節齋に学ぶ)のことで、堺県・大阪府の師範学校の教官を長く歴任したあと明治26年に上京。三島とは共通の友人も多く、二松学舎に明治40年頃から最晩年まで出講し、督学・名誉督学も勤めた。

【翻刻】 芳翰拝読。爾來從是ハ心外御疎音ニ打過申訳無之候。老閣之御宿病も追日御快方之趣。頃日、土屋先生より傳聞いたし、御怡申上候。小生之所勞御心配被下、御慰問之段、感謝仕候。持病之喘息性感冒にて、格別熱氣とても無之候得共、月初より引続き再三相發し困却仕居候。併御案事被下候程ニハ無之候。御省念可被下候。趙普之故事ニ縁する高作御患投被下、拝誦仕候。論語読却而不知論語之御一言、恐縮千萬ニ候得共、此上とも老生ハ論語を以て處世之要訣といたし度期念罷在候。其中快方候ハ、拝趨御禮申上度候も、不取敢一書奉復まで如此御座候。敬具。十月廿五日 澁澤栄一 三島先生玉案下  
尚々、時令御伺まで二粗品進呈仕候。御笑納被下度候。不一。  
(封筒) 中洲三島殿 拝復 澁澤栄一／封 十月二十五日 粗品相添

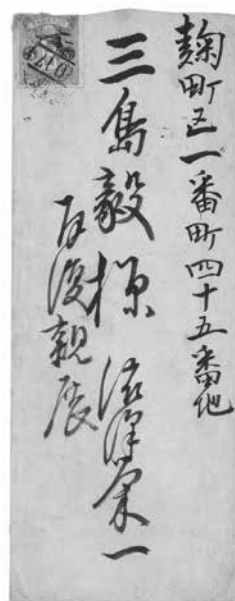


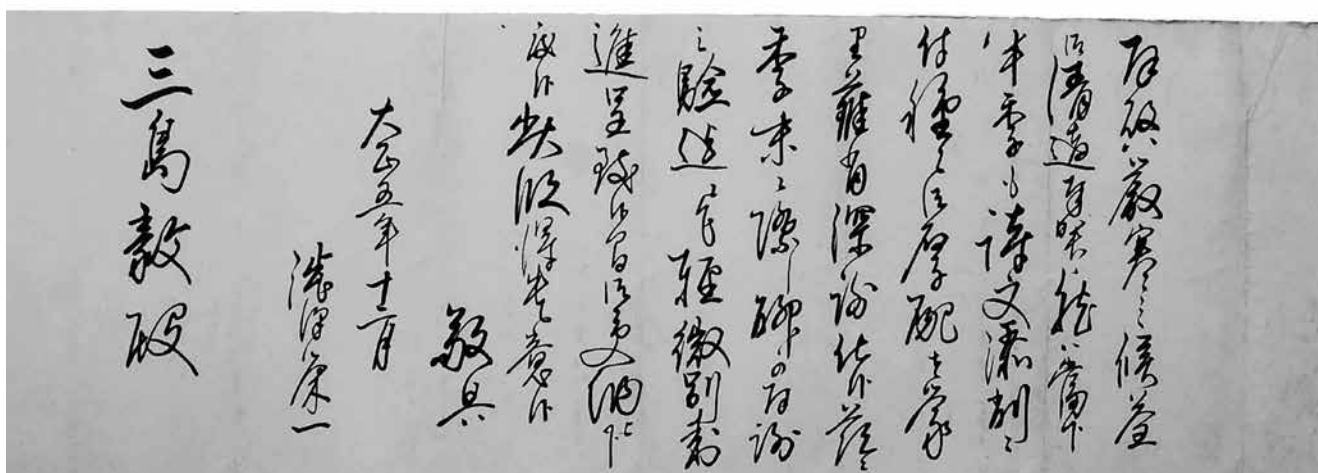
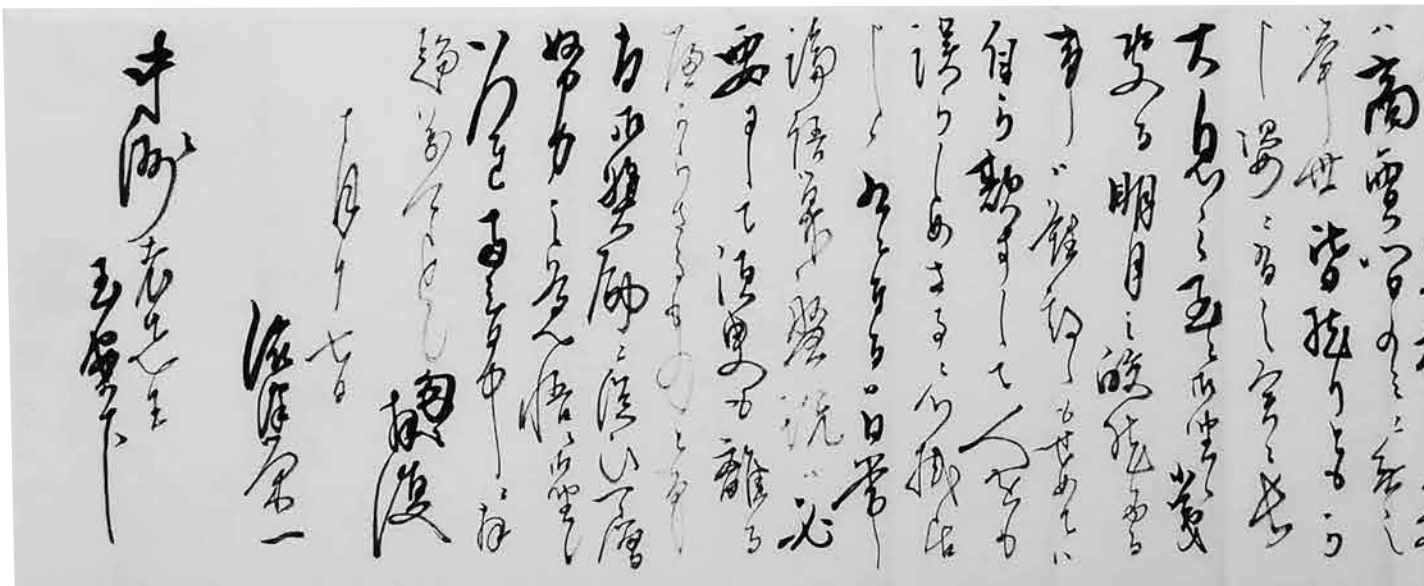
17 | 渋沢栄一書簡(三島中洲宛、大正4年(1915)10月17日、F176)

この年86歳の三島は大正天皇の宮内省御用掛・侍講として定期的に宮中で進講していたが、6月21日の参内時に転倒負傷して、宿痾の脳梗塞も再発。これを機に侍講を辞して宮中顧問官となった。渋沢は10月に渡米し、翌年1月帰国。これは渋沢の全4回の渡米のうちの3回目に当たり、サンフランシスコで開催中のパナマ太平洋万博を見学し、ワシントンDCではウッドロー・ウィルソン大統領を訪問している。本書簡は、三島が渋沢の渡米を送る詩を贈ったのに対する礼状。三島は渋沢の外遊ごとに送別や帰国祝の詩を贈っている。渋沢が「論語算盤説」に自信を深めている様子も窺える。

【翻刻】 朶雲拝誦仕候。其後多忙ニ紛れ、御起居も御伺不申上候處、老閑益御清適之段、欣慰之至ニ候。小生客月末より九州中國及大阪地方巡回、引續き本月廿三日之春洋丸ニ乗組、米國へ罷越候豫定ニ御座候。發途前、是非寸時たりとも拝眉仕度と相考居候も、種々之雜事蝟集いたし、困却仕候。御心ニ掛けさせられ、高作二首御贖被成下、真ニ知己之高賚と難有拝受仕候。名利奔競ハ商賈間のミニ無之、拳世皆然りとも可申姿ニ有之、 実ニ長大息之至ニ御座候。小儀決而明月之皎然たる事ハ難期候も、せめてハ自ら欺すして人をも誤らしめざるニ心掛居申候。右ニ付而ハ、日常、論語算盤説ハ必要にして須臾も離るへからざるものと存候。尚御奨励ニ従ひ一層努力之覚悟ニ御座候。いつれ両三日中ニ拝趨、萬可申上候。勿々拝復。 十月十七日 渋澤栄一 中洲老先生 玉案下

(封筒) 麹町区一番町四十五番地 三島毅様拝復親展 渋澤栄一/封 十月十七日





**18** | 澁澤栄一書簡 (三島中洲宛、大正5年〈1916〉12月、小野家寄贈資料)

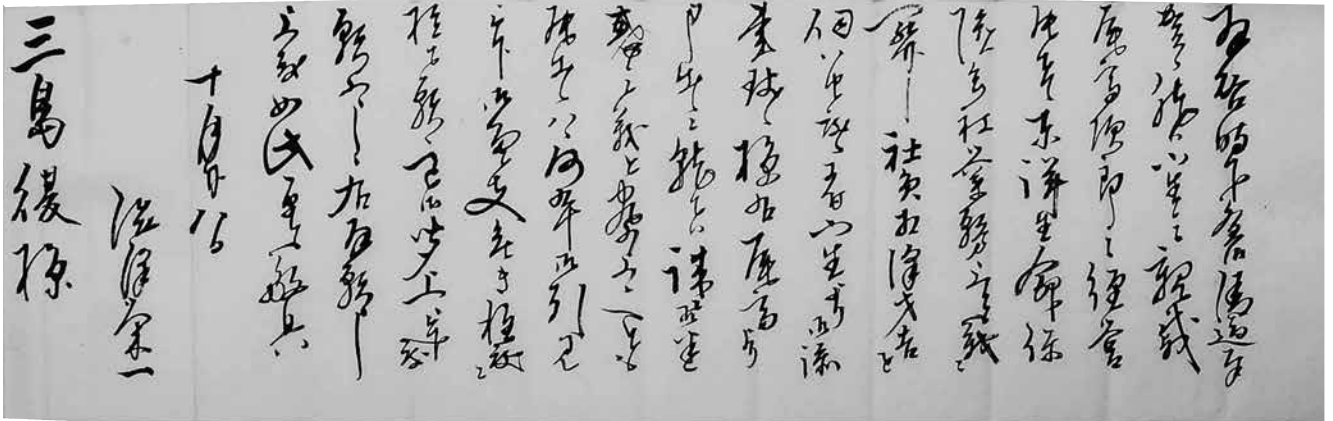
澁澤が三島に継続的に詩文の添削を依頼していたことを示す資料。その添削に対して、澁澤から三島に対して半期ごとに謝礼が送られていた。このほか、澁澤は和歌については、中村秋香や小出粂に添削を依頼していた。

【翻刻】 拝啓、嚴寒之候、益御清適奉賀候。然ハ當下半年も詩文添削ニ付種々御厚配を蒙り、難有深謝仕候。茲二季末ニ際し聊か拝謝之驗迄ニ、乍輕微別封進呈致候間、御受納被下度候。此段得貴意候。敬具。

大正五年十二月 澁澤栄一 三島毅殿

(封筒) 三島毅殿/男爵 澁澤栄一



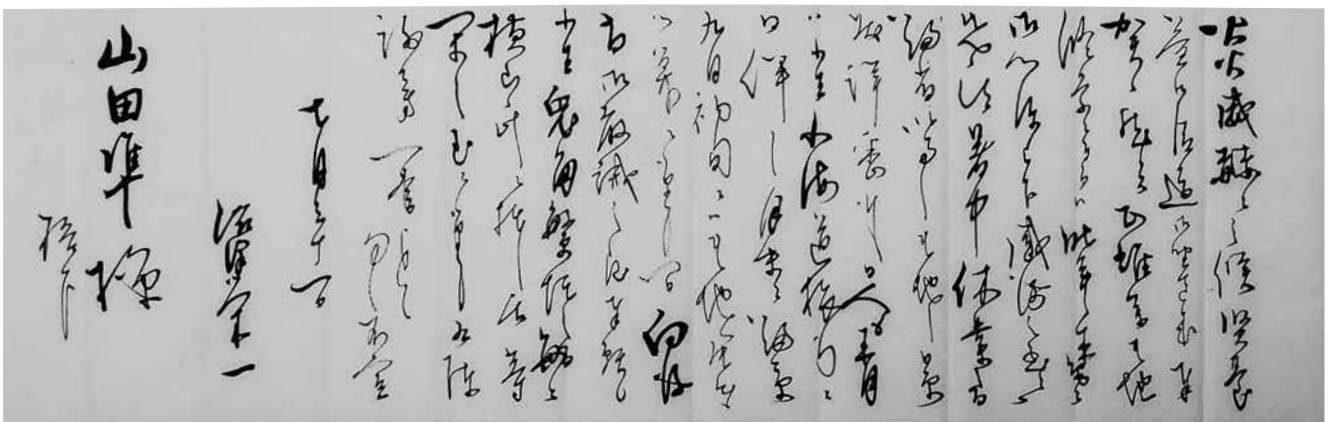


### 19 渋沢栄一書簡(三島復宛、〔大正期〕10月28日、F21-537)

三島復(1878～1924、号雷堂)は中洲の三男で、府立四中・一高を経て東京帝大文科大学漢学科(1904年卒)に学び、大学院に進み、陸象山・王陽明の研究で知られた。第二代舎長(1909～19)・学長(1919～24)として二松学舎の経営に当たり、中洲の学問的後継者として期待されたが、惜しくも早世した。書簡に見える親戚の尾高次郎(1866～1920)は尾高惇忠の次男で実業家、妻は渋沢栄一の庶子フミ。尾高次郎が社長を務める東洋生命保険会社のビジネスに関する要件で、社員相澤才吉を派遣することを伝える内容。

【翻刻】 拝啓、時下愈御清適奉賀候。然ハ小生之親戚尾高次郎之経営罷在候東洋保険会社業務上之義ニ関シ、社員相澤才吉を伺ハセ度候に付、小生より御添書致候様、右尾高より申出候ニ就てハ、誠ニ御迷惑之義と察上候へとも、罷出候ハ、何卒御引見被下、御差支無き程度ニ於て、願意御聞上被下度、願上申し候。右拝願申上度、如此御座候。敬具。

十月廿八日 澁澤栄一 三島復様



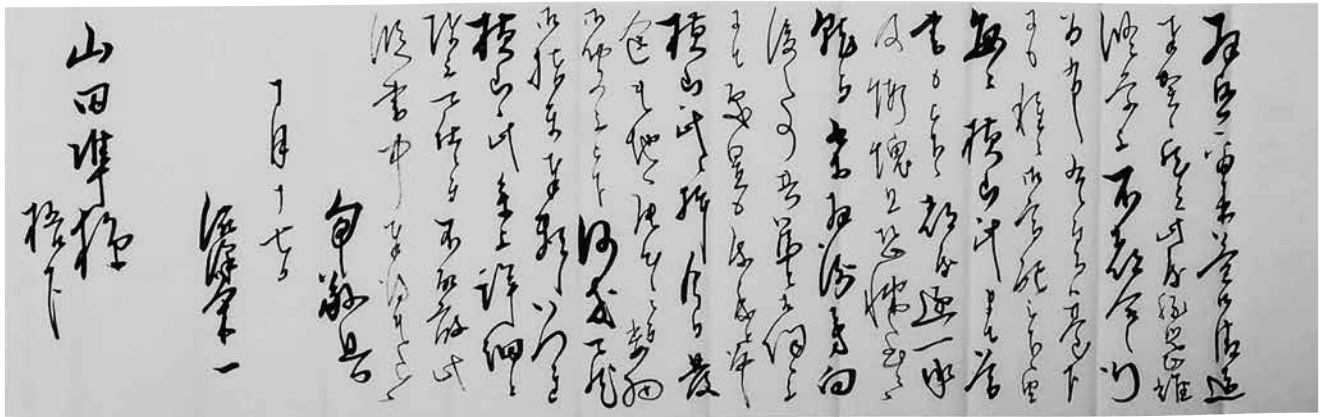
### 20 渋沢栄一書簡(山田準宛、〔明治40年(1907)〕7月31日、F21-534)

山田準(1867～1952、本姓木村、字士表、号済齋)は山田方谷の養孫にあたり、東大古典講習科を卒業後、五高・七高の教授となり漢文を講じた。渋沢の長男篤二(1872～1932)と四男正雄(1888～1942)は一時期、山田に漢文を学んだことがある。正雄は一高を経て東京帝大法科大学経済学科を卒業しているが、一高以前に七高に入学したことがあり、この時に山田とは教授と学生の関係があった。本書簡は、渋沢が正雄に対する山田の配慮に謝意を表する内容である。「横山」は渋沢家の家庭教師を務めた横山徳次郎のことで、東京高等師範研究科を卒業後、文部省図書編纂委員となり、転じて渋沢家の家庭教師となった。後に石川島造船所等の重役を務めている。

【翻刻】 炎暑赫々之候、賢臺益御清適御座被成、奉賀候。然ハ正雄義貴地修学ニ付而ハ、昨年来色々御心添被下、感謝之至ニ候。先頃暑中休業之為帰省いたし、貴地之景状詳悉仕候。同人も来月ハ小生北海道旅行ニ同伴し、月末ニ帰京、九月初旬ニハ貴地へ罷出候心算ニ御座候間、向後尚御教誡之程奉願候。小生兎角繁忙之為、毎々横山氏ニ托し居、等閑之至ニ御座候。

右陳謝旁一書申上候。勿々不宣。 七月三十一日 澁澤栄一 山田準様 梧下

(封筒) 山田準様 親展 澁澤栄一

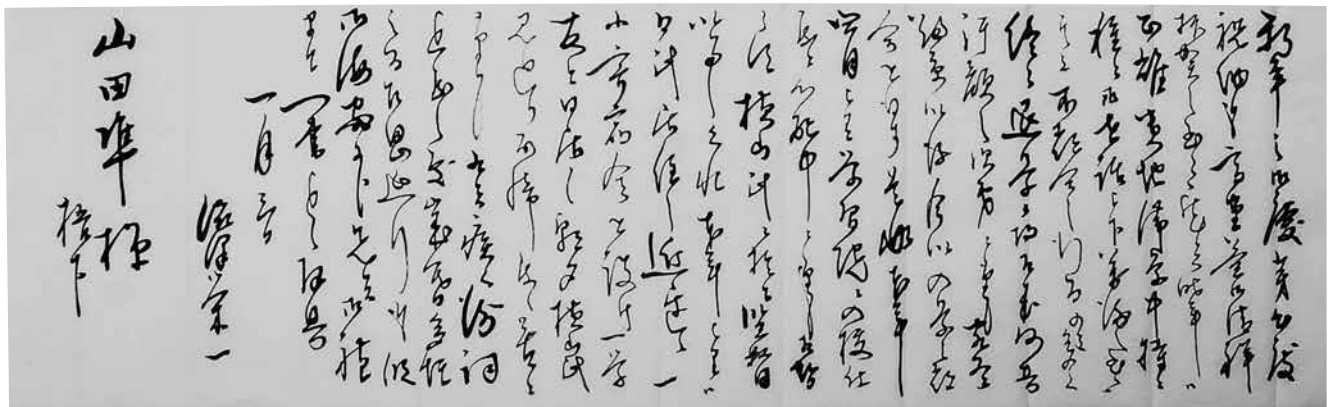


## 21 | 澁澤栄一書簡(山田準宛、〔明治40年(1907)〕10月17日、F21-535)

澁沢正雄に何らかの「不都合之行為」があったらしく、今後の対応策を検討するために、家庭教師の横山徳次郎を鹿児島に派遣したことを伝える書簡。

【翻刻】 拝啓、爾来益御清適奉賀候。然は此度豚児正雄、修学上、不都合之行為有之付而ハ、臺下にも種々御高配被下候由、毎々横山氏まで尊書も被下候都度逐一承及、慚愧且恐悚之至ニ候。就而右等拝謝旁向後之事共篤と相伺候上にて處置も致度と存候。横山氏ニ托し、今日發途、貴地へ罷出候ニ付、委細御聞上被下、何卒可然御指示奉願候。いつれ横山氏參上、詳細ニ陳上可仕ニ付、不取敢此段書中奉得貴意候。勿々敬具。 十月十七日 澁澤栄一 山田準様 梧下

(封筒) 山田準様 親展 澁澤栄一／封 十月十七日

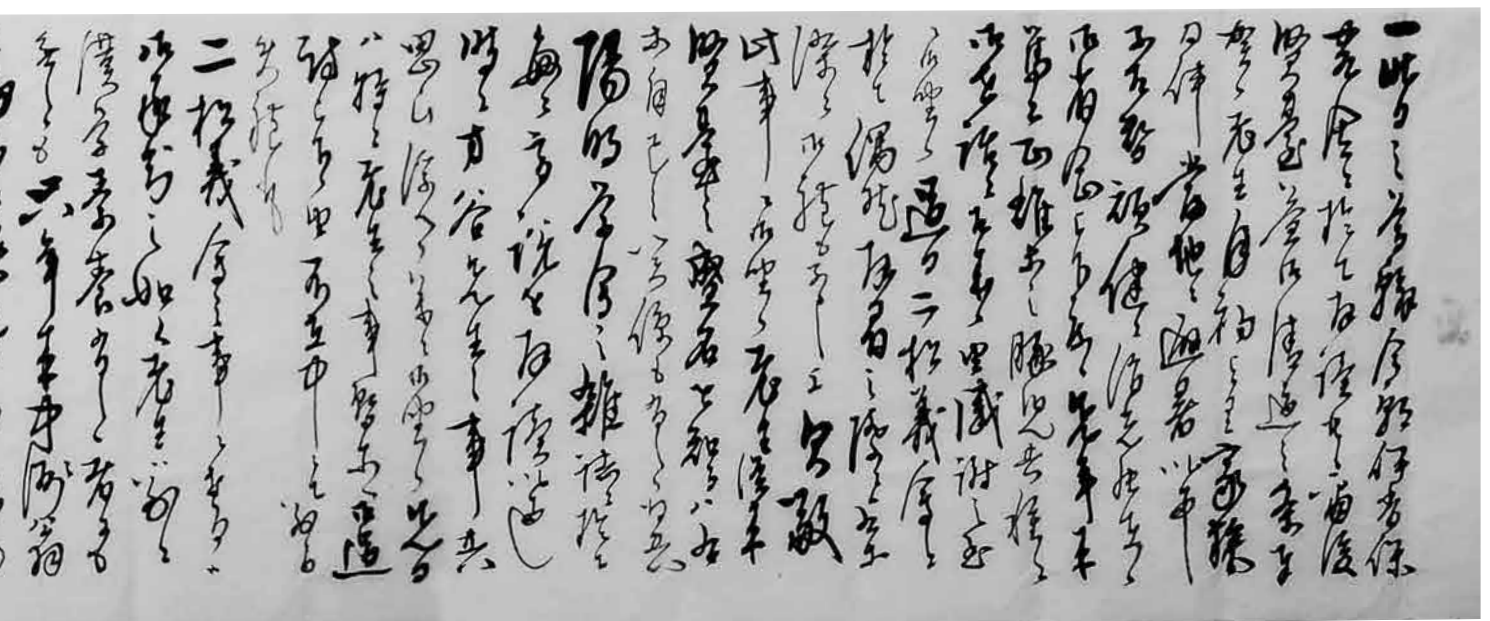


## 22 | 澁澤栄一書簡(山田準宛、明治41年(1908)1月3日、F21-535)

山田の種々の配慮も奏功せず、正雄が七高を退学になったため、澁沢は翌41年(1908)に「三男武之助・四男正雄・五男秀雄」の学習のため、横山徳次郎を監督者とし、青山南町六丁目に寄宿舎を設け、克己学寮と命名し、遠藤柳作・篠原三千郎・蘆田均・婦山教正を学友とした(『澁沢栄一伝記資料』巻29)。本書簡は、山田への謝意と共に、寄宿舎の計画を報知したもの。

【翻刻】 新年之御慶芽出度祝納仕候。高堂益御清祥拵賀之至ニ候。然は昨年ハ正雄貴地滞学中、特ニ種々御世話被下、萬謝之至ニ候。其上不都合之行為ノミ多く終ニ退学ニ相成、何共汗顔之次第ニ御座候。客冬帰京以後、今以入学之都合を得ず、是非本年四月より学習院ニ入校仕度と心配中ニ御座候。相替らす横山氏ニ於て監督いたしけれ、本年よりハ同氏居住之近邊ニ一小寄宿舎を設け一学友と同居し、朝夕横山氏見廻り取締致候筈ニ御座候。右は疾く謝詞申上度候處、歳暮多忙之為、乍思延引仕候段、御海容可被下候。先は御禮まで一書申上候。拜具。一月三日 澁澤栄一 山田準様梧下

(封筒) 鹿児島市第七高等学校 山田準様 親展 東京日本橋区兜町 澁澤栄一／緘 一月三日發

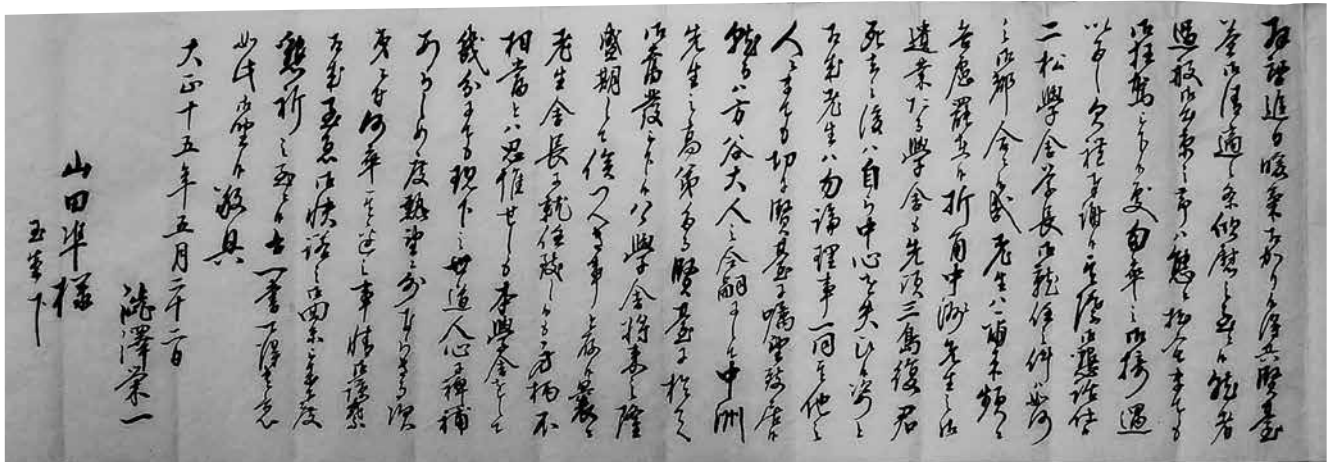


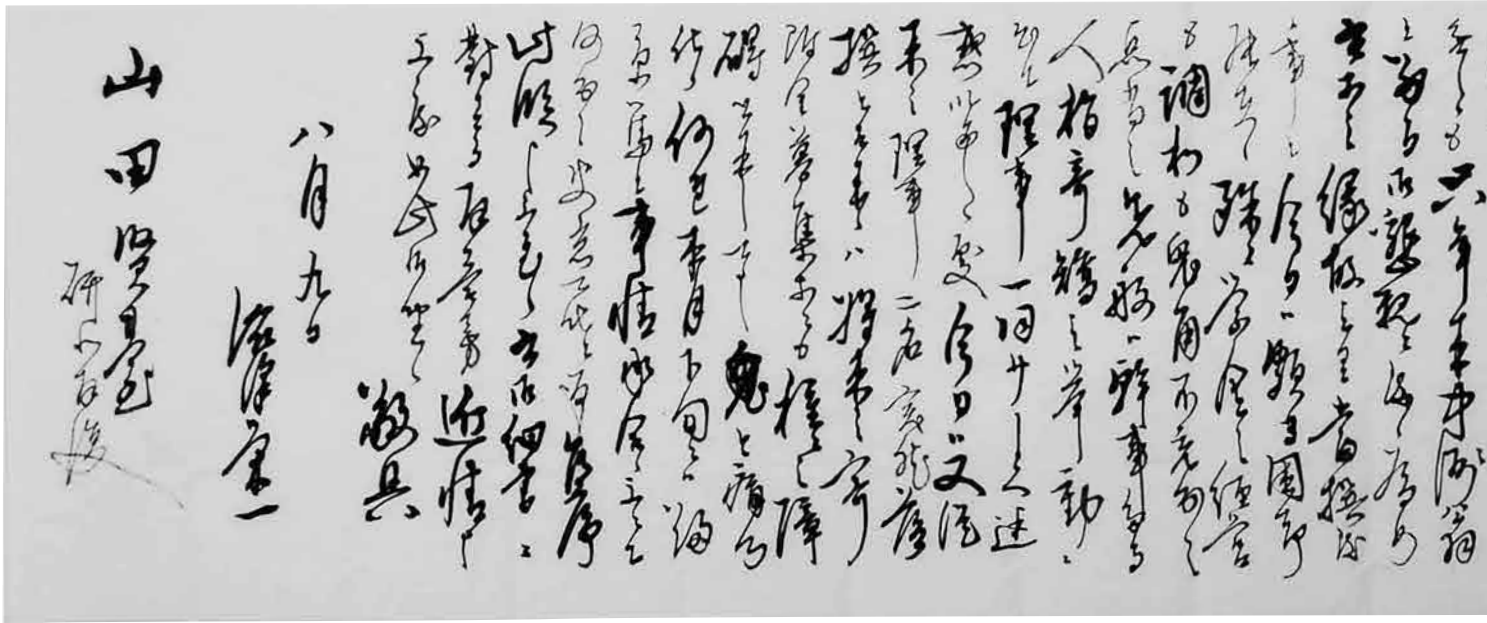
【翻刻】一昨日之尊翰、今朝伊香保客舎ニ於て拝讀仕候。爾後賢臺益御清適之条奉賀候。老生月初より家族同伴當地ニ避暑いたし、不相替頑健ニ消光罷在候。御省念被下度候。先年来、篤二・正雄等之豚兒共、種々御世話ニ相成候由、感謝之至ニ御座候。過日二松義會ニ於て偶然拝眉之際ニハ、右等染々御禮も不申上、欠缺此事ニ御座候。老生従来賢臺之盛名を知るハ、右等自己之關係も有之候得共、陽明學會之雜誌ニ於て毎々高説を拝讀いたし、時々方谷先生之事共思ひ浮へ候義ニ御座候。先日ハ特ニ老生之事務所へ御過訪被下候由、不在中ニて別而失禮仕候。

二松義會之事ニ付而ハ、御承知之如く老生ハ別ニ漢学素養有之候者にも無之候も、只年来、中洲翁と別而御懇親ニ致候為め、右等之縁故迄にて當撰致候事と、今日ハ頗る困却罷在候。殊ニ学舎之經營も調和も、兎角不充分之点有之、先般ハ幹事たる人稍奇矯之挙動ニ出て理事一同少しく迷惑いたし候處、今日ハ又従来之理事二名突然落撰と相成候ハ、将来之寄附金募集等ニも種々障碍を来し可申と痛心仕候。何れ本月下旬ニハ御帰京、篤と事情承合候上ニて、何分之決意可仕と存候。乍序此段申上置候。右御細書ニ對する拜答旁、近情申上度如此御座候。敬具。

八月九日 澁澤栄一 山田賢臺 硯北拜復

(封筒表) 東京市外代々幡町字富ヶ谷一四四七 岩瀧氏方 山田準様 貴酬親展 伊香保客舎ニテ 澁澤栄一／封 大正七年八月九日／自然名宛之御方任地御出立後ナラハ御在勤地へ御轉送被下度候也





### 23 | 澁澤栄一書簡 (山田準宛、大正7年 (1918) 8月9日、F21-535)

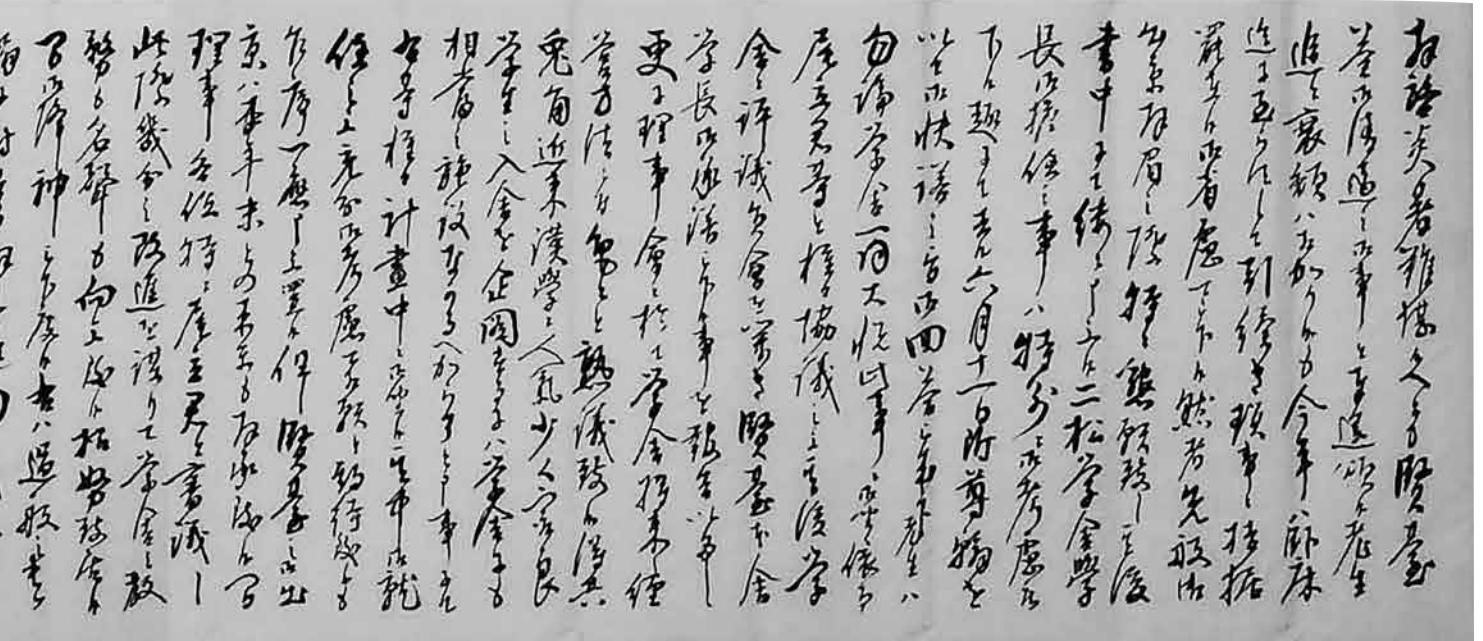
本書簡は、澁澤が二松学舎の経営の問題について山田準と意見交換した最初のもの。それまで澁澤にとって山田準は子息を教えた教師であり、また刊行費用を支援していた雑誌『陽明学』の寄稿者であったが、財団法人二松義会において邂逅し、その後、山田準から澁澤に二松義会内部の人間関係等に言及した書簡が送られたので、その返信として本書簡をしたためた。前年3月に三島からの懇請をうけて澁澤は会長理事に就任し、この年の評議員・理事の改選によって、澁澤は会長理事に再任されたが、二松義会設立以来運営に関わってきた細田謙蔵や尾崎嘉太郎が落選し、新たに尾立維孝・佐倉孫三が選任された。三島中洲は翌年5月に90歳で歿し、澁澤は二松義会を改組して新たに財団法人二松学舎を設立し、その舎長に就任する。組織の交代期に外部からその責任を負うことになった澁澤の懸念が読みとれる。

### 24 | 澁澤栄一書簡 (山田準宛、大正15年 (1926) 5月22日、書簡0340) 前頁下段

本書簡は、澁澤が山田準に二松学舎の学長就任を打診したものの。一昨年、大正13年(1924)2月1日に中洲の三男三島復が47歳で急逝したため、急遽、中洲門下で東大古典講習科出身の安井小太郎(元一高教授)を督学に、同じく児島献吉郎(元東京高師教授)を学長に戴く体制を作った。古典講習科卒業生たちは1860年代生まれの者が多く、大正期には60歳の定年を迎えたので、これら老教授を教学のトップに据えたのである。ところが、児島献吉郎は新設された京城帝大の教授として赴任することになり、この年60歳を迎えた山田準がその後任に擬せられた。大正15年(1926)は明治10年創立から50年の節目に当たっており、この機会に二松学舎は規模拡張を計画し、秋以降、専門学校の設定をめざすことになる。

【翻刻】 拝啓、追日暖氣相加り候得共、賢臺益御清適之条欣慰之至ニ候。然者過般御出京之節ハ態々拙宅までも御枉駕被下候處、匆卒之御接遇いたし欠禮奉謝候。其際御懇話仕候二松學舎学長御就任之件ハ如何之御都合ニ候哉。老生ハ爾來頻ニ苦慮罷在候。折角中洲先生之御遺業たる學舎も、先頃三島復君死去之後ハ自ら中心を失ひ候姿と相成、老生ハ勿論、理事一同其他之人々までも切に賢臺に囑望致居候。然るハ方谷大人之令嗣にして中洲先生之高弟たる賢臺に於て御奮發被下候ハ、學舎將來之隆盛期に俟つへき事と存候。曩ニ老生舎長に就任致し候も身柄不相當とハ思惟せしも、本學舎をして幾分にても現下之世道人心に裨補あらしめ度熱望ニ外ならざる次第ニ付、何卒其邊之事情御諒察相成、至急御快諾之御回示被下度、懇祈之至ニ候。右一書可得貴意如此御座候。敬具。

山田準様 玉案下 大正十五年五月二十二日 澁澤栄一



## 25 澁沢栄一書簡 (山田準宛、大正15年(1926)8月8日、F21-533)

山田準からこの年6月6日付で二松学舎の学長就任を承諾する書簡が送られた。本書簡はそれに対する返信である。「兎角近来漢学に人気少く、最良学生之入舎を企図するには、学舎にも相当の施設」が必要だという文言が当時の状況をよく伝えている。一方、先に漢学振興の国会決議がなされて、大東文化学院が創設された(1924年)。大東文化学院の設置目的が主として東洋古典の研究を養成を想定していたのに対して、澁沢らは創立50年の記念事業として、国語漢文科の中等教員養成のための二松学舎専門学校を設立することをめざすことになった。

なお、本書簡は澁沢がしばしば避暑に利用した伊香保温泉の木暮旅館から投函されており、末尾の文面から快適な環境の中で書類整理や揮毫・執筆などに時間を使ってリフレッシュしている様が窺える。

【翻刻】 拝啓、炎暑難堪候へとも、賢臺益御清適之御事と奉遙頌候。老生追々衰頹ハ加り候も、今年ハ臥床迄に至らずして、引續き瑣事ニ拮据罷在候。御省慮可被下候。然者先般御出京拜眉之際、特ニ懇願致し、其後書中にて縷々申上候二松学舎學長御擔任之事ハ、特別ニ御考慮被下候趣にて、去ル六月十一日附尊翰を以て御快諾之旨御回答被成下、老生ハ勿論、学舎一同大悦此事ニ御座候。依而尾立君等と種々協議之上、其後学舎ニ評議員會を開き、賢臺本舎学長御承諾被下候事を報告いたし、更に理事會ニ於て学舎将来之經營方法ニ付、色々熟議致候得共、兎角近来漢学ニ人氣少く、最良学生之入舎を企図するにハ、学舎にも相當之施設なかるへからすと申事にて、右等種々計畫中ニ御座候。其中御就任之上、充分御考慮可相願と期待致候も、乍序一應申上置候。但し賢臺之御出京ハ本年末との来示も拝承致候間、理事各位、特ニ尾立君と審議し、此際幾分之改進を謀りて、学舎之教務も名聲も向上致候様努致居候間、御降神被下度候。右ハ過般之貴翰に對する拝答迄、勿々如此御座候。敬具。 大正十五年八月八日 香山客舎ニ於て澁澤栄一 山田準様 拜復

乍略儀、追啓申上候ハ、客月十八日にハ御祖考山田方谷先生五十年祭典御執行ニ付、紀念品をも相添、鄭重なる御通知を忝ふいたし候も、遠隔之土地、殊ニ老衰之身體、乍思御疎音仕候。御海容被下度候。何れ御出京拜眉之際ニハ、方谷先生之國事御盡瘁之経緯詳細相伺度と期待仕候。老生本月々初より伊香保温泉に轉地仕候。是ハ疾病之為にハ無之、全然之避暑旅行にて数日之経過なるも、都門之炎熱を忘れ朝夕涼風清絶、実ニ別世界の感有之候。依て来客なき日ハ早朝より書類之整理、又ハ揮毫杯に消光し、積埋せる書債之償却に努力罷在候。乍序申添候也。

(封筒) 鹿兒島市長田町五十七 山田準様 拜復親展 上州伊香保木暮別館 澁澤栄一/緘 大正十五年八月九日



百濟神... 延敷... 贈...

大正十五年八月九日

香山客舎

誌澤栄一

敬具

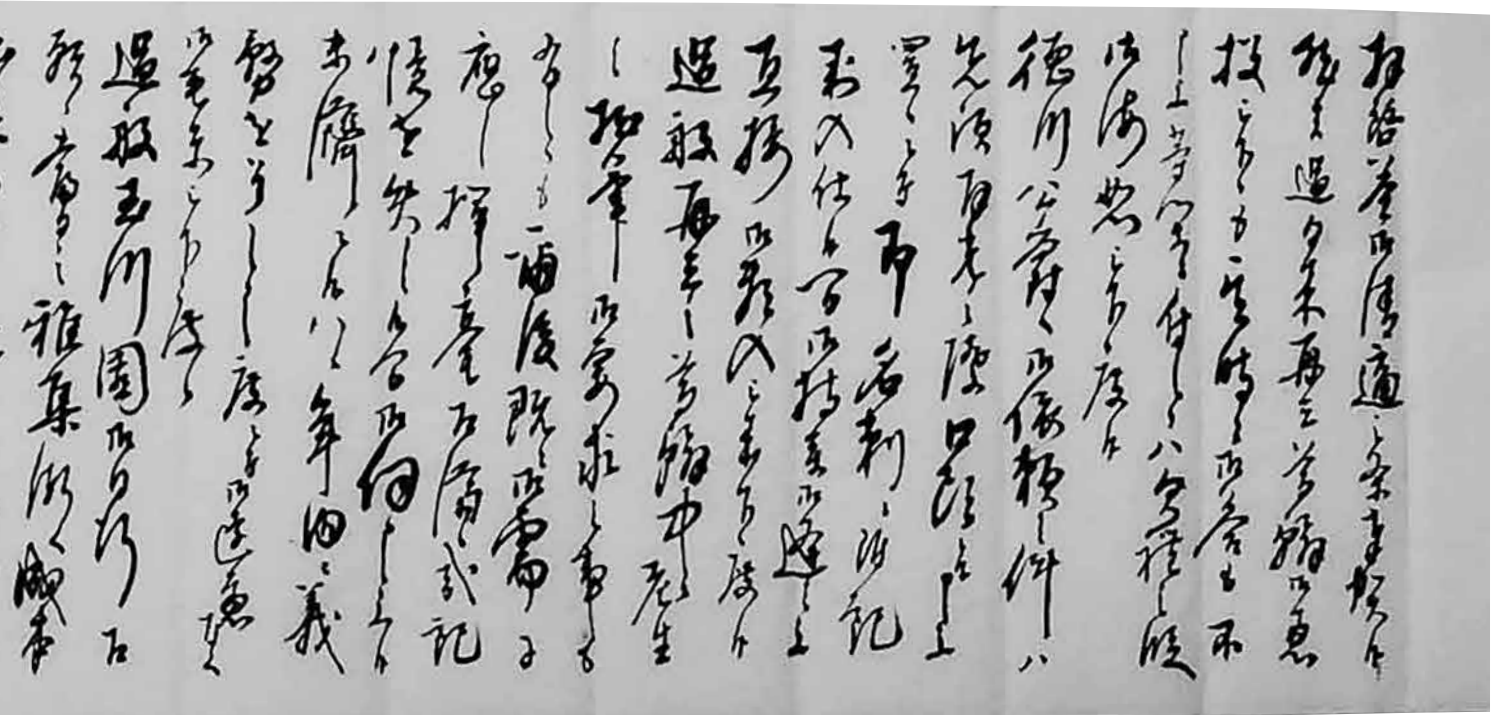
山田準様

拝復

左署儀... 山田方谷先生... 延敷... 贈...

織  
大正十五年八月九日

鹿兒島市長田山五平七  
山田準様  
誌澤栄一  
上野伊香保本善野復  
拝復親展



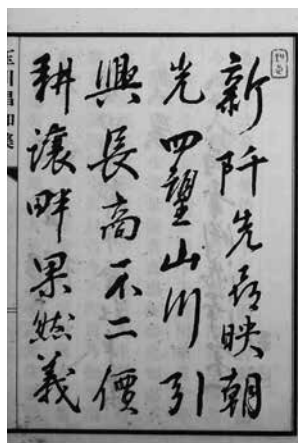
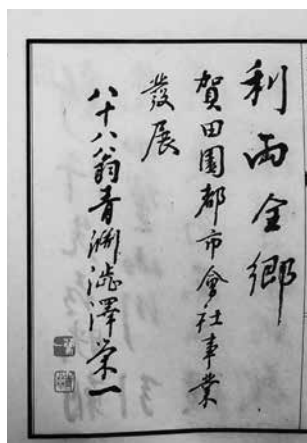
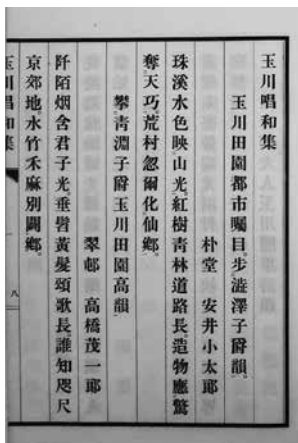
26 渋沢栄一書簡 (山田準宛、昭和2年(1927)12月28日、F21-536)

渋沢は東京近郊の田園都市構想を提唱し、大正7年(1918)に田園都市株式会社を設立して、住宅開発・鉄道敷設事業を進めた。後に鉄道部門は独立して東急電鉄の前身となった。事業関係者や地元有志が渋沢への謝意を表し、昭和2年(1927)6月30日に、分譲地近くに開設された遊園地多摩川園に渋沢を招待した。当日の写真からは、渋沢が国分三亥・山田準ら二松学舎関係者を伴って列席したこと、書簡からは当日の詩文をまとめた詩文集も編纂刊行されたことが分かる。

『玉川唱和集』は、当日の祝辞の結びに渋沢が詠んだ七言絶句「新阡先喜映朝光 四望山川引興長 商不二価耕讓畔 果然義利兩全郷」を渋沢自身が揮毫して題字に掲げ、山田準の序、佐倉孫三が漢訳した渋沢の祝辞、佐倉孫三の「陪歡迎会記」に続き、安井小太郎(二松学舎督学)以下、二松学舎関係者約30人が渋沢の詩に次韻した詩を収録している。

【翻刻】 拝啓、益御清適之条奉賀候。然は過日来再三尊翰御恵投被下候も、其時々御答も不申上、等閑二付し候ハ、欠禮之段御海恕被下度候。徳川公爵へ御依頼之件ハ、先頃拝光之際、口頭にて申上置候ニ付、即名刺ニ附記封入仕候間、御持参御逢之上、直接御頼入被成下度候。過般再三之尊翰中ニ、老生之拙筆御要求之事も有之候も、爾来既ニ御需に應じ揮毫相濟候哉、記憶を失し候間、御伺申上候。未濟ニ候ハ、年内ニ義務を了し申し度ニ付、御遠慮なく御垂示被下度候。過般、玉川園御同行相願候。當日之雅集漸く成本出来いたし、昨夕一覽仕候。賢臺之御序文にて一段之光輝を加へ候様拝見仕候。只少しく溢美之嫌無之哉と恐悚之至ニ候。学舎諸兄之御入用部数ハ、老生事務所渡邊得男へ御引合相成候而、御入用丈ケ御引取被下度候。右等爾後拝答怠慢之陳謝旁匆々如此御座候。拝具。 山田賢臺 侍史 十一月念八 澁澤栄一 尚々本年も両三日を剩すのミと相成、折角御繁忙之事と察し上候。何れ明年緩々拝光可仕奉存候。不一。

(封筒) 山田準様 親拆 澁澤栄一/封 十二月二十八日



新書刊行 雅集所 成本  
 出来りし 此子 所見也  
 野々山 西席 文士 一吸  
 之 光 彩 也 かく 振 舞 也 也  
 只 少 々 之 漢 文 之 様 年 哉  
 と 恐 懼 一 面 々 々 余 余 諸 兄  
 之 西 之 中 部 数 々 老 年 諸 兄  
 後 之 世 得 甲 乙 列 合 々 々 々 々  
 所 之 由 又 々 々 列 合 々 々 々 々  
 書 二 函 後 亦 々 々 様 々 様  
 謝 意 尚 勿 々 々 々 々 々 々 々

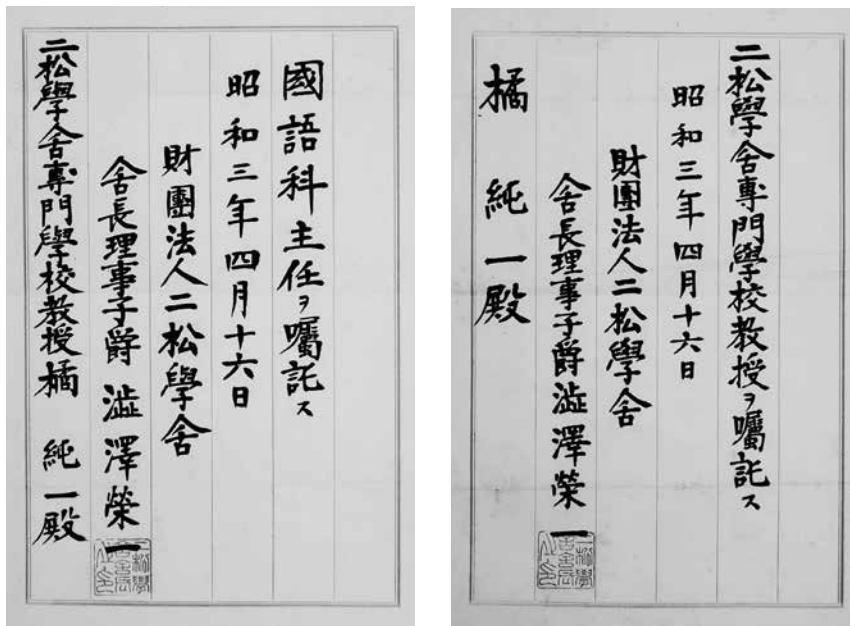
七月念八  
 山田賢是  
 後史

右 之 年 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 の 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 有 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 有 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々





27 | 池田四郎次郎・尾立維孝書簡 (山田準宛、大正15年 (1926) 11月3日)



28 | 二松学舎専門学校辞令 (橘純一宛、昭和3年 (1928) 4月、橘 (記録・系譜等) 0020・0021)

二松学舎専門学校の開校時に、渋沢舎長の名で発行された辞令。橘純一（1884～1954、東京帝大文科大学国文学卒）は、橘守部の子孫にあたり、府立五中教諭、陸軍教授を経て、二松学舎専門学校の教授・国語科主任となった。渋沢の二松学舎における肩書は、財団法人二松義会顧問（1910～1917）、財団法人二松義会会長理事（1917～1919）、財団法人二松学舎舎長理事（1919～1931）と変遷し、晩年の15年間は運営責任者の立場にあった。

## 27 池田四郎次郎・尾立維孝書簡(山田準宛、大正15年(1926)11月3日、F15-369) 前頁上段

本書簡は、二松学舎の同学である池田四郎次郎(1864～1933、号蘆洲)と尾立維孝から、学長就任を承諾して上京準備をしている鹿児島県の山田準に宛てたもの。山田準は今春上京した際に、二松学舎の進むべき方向性として、「中洲会」の活動をうまく御し、寄宿舎を維持し、機関紙を充実させるなど、教育・研究に関する内容に言及したらしい。それに対して池田と尾立は全く違う現状認識を持っていた。冒頭にまず専門学校設立に必要な資金(16万円)集めるために、先月10月7日に渋谷邸で東京都下の有力者を招待して委員を選任したことを報じ、二松学舎の永続は基本財産を積み上げられるか否かにかかっており、生徒をいくら集めてもどうなるものではないと言う。そして「中洲会」の活動についても危険視し、寄宿舎も従来からの悪弊を断つために一端閉鎖すべきだと述べている。山田準が学長として学務を背負う以上は、これまでの経緯を十分に理解して渋谷舎長と歩調を合わせる事が肝要だと、親友ならではの忌憚のない忠告をしている。

【翻刻】 拝啓、秋冷之候益々御静安奉賀候。陳ハ先月七日渋谷邸ニ都下財界ノ有力者ヲ招待シ、二松学舎維持擴張ニ付、金拾六万円募集ノ必要ナルコトヲ舎長ヨリ相談ノ結果、大倉男爵ノ發議ニ依リ委員十名選挙ノコトニ相成リ、其席ニテ渋谷・大倉両氏ニ委員指名ノコトヲ委任シ、即席ニテ佐々木勇三郎・服部金太郎・小野英太郎・田中榮八郎・大倉喜七郎・古川虎之助・有賀長文氏ヲ指名セリ。爾来、尾立理事日々奔走シ、来ル十日委員會ヲ開ク迄ニ相成リ居候。今後ノ成リ行ハ、凡ソ目鼻ノ付キタル所ニテ御報知可申候。此ニ於テ貴兄ニ申上置度ハ、當春御上京ノ節、中洲会ヲ旨ク駕御シ、又寄宿舎ヲ愛護スル等ノ御口氣有之候ガ、コレハ十分御考慮ヲ願ハザル可ラズ。中洲会ハ其發起ノコトモ理事ニ何等ノ相談ナク開設シ、爾来、二松学舎ト何等ノ関係ナキ田中舎身居士其他、黒龍会員杯ヲ中洲先生景慕ノ名義ノ下ニ引キ入レテ会員ト為シ、毎会講堂ニ於テ酒氣ヲ借り、小川運平・高橋秀臣杯モ入り豪語演説スル位ニテ少シモ中洲先生ノ意ニ叶フト認ム可キ廉ナシ。一種ノ野心ヲ挟ミ居ルコトハ、小川運平ガ尾立ニ對シ少壯者ニ讓ツテ呉レテハ何如ト申シタル一事ニテ知ルベシ。然シテ田中舎身氏ノ如キハ渋谷舎長モ大ニ嫌忌スル人物ナリ。此輩ニ学舎ヲ乗ツ取ラレル様ノ事ニテハ、我々多年ノ苦辛モ水泡ニ帰シ、中洲先生ニ申訳無之。貴兄ハ遠地ニ在テ此事情ヲ御承知ナク、卒然、谷田川氏側ノ説ヲ聞カレテ御意見ヲ極メラレタルニハ非ズヤト推察致候。御賢息様モ谷田川ト御懇意ノ御様子ナレトモ、谷田川ノ現状ハ先以テゴロ付生活ノ様子、此輩ニ松学舎ノコトニ是レマデー片ノ努力モセズ、當春以来卒然中洲会ヲ起シ候モ、因ヨリニ是ニ依頼スルニ足ラズ。

畢竟、今日、二松学舎ヲ永遠ニ維持スルハ基本財産ノ厚薄何如ニ在ルノミ。白面ノ書生何千人集リテモ何如トモスベカラズ。見ヨ、中洲門下ノ人凡ソ二万人ト号ス。然シテ門人ヨリノ寄付金、明治三十六年以来、今日迄二万円ニモ不達。今日ノ建物土地其他流通資本四万円モ大抵、大正七八年ノ交、渋谷氏ノ名声ニヨリテ尾立氏ガ募集シタルモノニ過ギズ、今回ノ十六万円募集モ其先蹤ニヨルノ外ナカル可シ。貴兄学長トシテ学務ヲ背負テ立タルノ以上ハ、此ノ消息ヲ十分ニ御呑込ミノ上、舎長ト相乖離セザル様、御分別願上度候。二松学舎ハ中洲翁ニヨツテ創立セラレ、渋谷翁ニヨツテ永遠ニ維持セラル、モノト為ス外ナシ。単ニ多数ノ書生ヲ相手ニ経畫シ難ク候。中洲会雑誌編輯ノコトモ今日ハ先ヅ必要ナキコトト存候。是迄、学友会誌ヲ出シタルモ、損失ノミニテ終ニ廃刊シ、今ハ二松学報トシテ財團法人ノ報告機関ト為セルニ過ギズ。此上ニ雑誌ヲ発行スルモ其資本ナカルベシ。財團法人ヨリハ投資スルノ餘地無之候。実ハ先般來本文ノ事申シ上度存居候ハ共、書面ニテハ兎角カド立チ候間、御來舎ヲ待テ思ヒ一日延ビニ延ビテ居リシガ、年末ニハ例年ノ通り尾立帰国、貴兄御入京ノ頃ハ不在ニ相成候間、思ヒ切リテ此ノ書ヲ認メ申候。事状ノ徹底ヲ期スル為ニ、御懇意ノ間柄、忌憚ナク露骨ノコト認メ申候間、何卒御一読ノ上御火中被下、他ニ相漏レザル様御含ミ置可被下候。

寄宿舎モ現在ノ生徒ハ先年来ノ悪習慣アリ、一掃スル必要アリ。因テ寄宿舎ハ一時閉鎖致シ、更ニ時機ヲ見テ新学生ヲ募集シ、新規約ノ下ニ御監督相願度、右并セテ御承知置被下度候。現在ノ学生即チ寄宿生ハ、二松学舎ノ講義ヲ聴クモノ一人モ無之、宛然下宿屋ノ有リ様ナリ。新学長ハ新学生ヲ御監督相願ノ様ニ不致レバ、到底現在ノ寄宿生ハ存續ノ見込ハ無之候。然シ右ノ儀モ目下極々秘密ニ致シ居候事故、御他言ハ御無用ニ候。 山田準殿 大正十五年十一月三日 理事池田四郎次郎 全 尾立維孝

(封筒) 鹿児島市長田町五十七 山田準殿/緘 十一月初三 東京市麹町区一番町 二松学舎 尾立維孝 池田四郎次郎



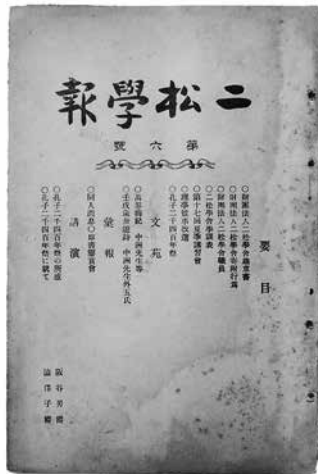
の之信乎或は孔子は徒らに右を向ひ其勢や右に拘泥して物の進歩に害ありと云ふ説あれども是は未だ當時の事情を究めざる説なりと云はざるべからず三代政治の歴史昭々として目前に開るを見るに道んで其時代を治明して之を今代に引當て立説し自分も行ひ人にも教へんとするは必要の事情ならざるべからず徒らに右を向ふにあらざる也

抑々力を以て世を治めんとするも必要なるなり若し道徳を以て世を治むるに非ざれば世を治むる道を譲り譲るを捨は中人と人の争ひ起らば則ち裁判官もいらず中絶事もいらず又刑罰も不用となり之を以て力を以て人を制し國を治むるも徳を以て民を教へ世を治むるの二道右に在りて今日に及べり孔子は徳を以て治國の大本とす此説流行すれば之に反對する異説の生ずるも亦已を獲ざる所也老子の處無爲莊子の齊人不知大欲不爭術を所られば道徳不修の説是なり先刻論評子爵の御話中に子爵は先頃より種田男爵及故林博士に話して孔子の論語の古來印本文は寫本となりたるものを集め居らるゝが其種田氏に數

百に及び其中には英佛語其他の外國語のものあり殊に近代日本にて流行のものは其種類頗る多きを歴かたりと亦以て孔子未だ死せず二千四百年後の今日如何に其説が世界中に尊崇せらるゝかを見て孔子の道大にして其徳の高き事を感じて餘りあり其二千四百年祭の如きは東方には居らるが後にも斯様の機會を捕へて人の記憶を醒にせられんことを切む

孔子二千四百年祭に就て  
 子曰 論 澤 栄 一 演 説  
 尾 立 維 孝 筆 録

今日は先づ孔子二千四百年の祭典を當學舎に於て執行せらるる誠に結構の事なり先は當に孔子の道に就てたる論語を尊ぶの形も八十三歳の今日まで處世の師と仰げり孔子の高徳のきこはれ今更老生の資格を持たず支那語及及び我國國語の間に二千四百年祭の行はるゝを見ても如何に孔子を敬仰する人の衆きかを知るべき也老生は當に孔子の道を體して世に獻するも學問に至ては幼年の頃四書五



29 二松学舎における渋沢栄一の講演「孔子二千四百年祭に就て」(大正11年〈1922〉10月8日)  
 右は二松学舎舎長時代の渋沢栄一肖像(大正14年〈1925〉9月撮影、86歳、渋沢史料館所蔵)

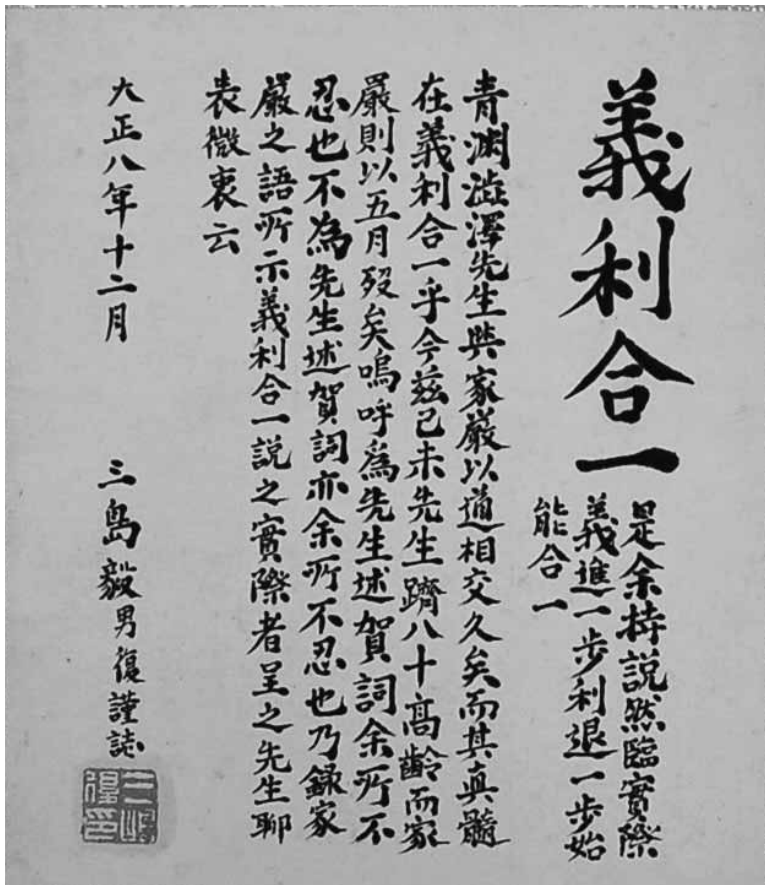
晩年の渋沢は、財団法人斯文会設立(1918年)、中等教育における漢文科存続(1923年)、湯島聖堂再建(1923～31年)など儒教倫理の普及啓蒙に尽力しており、二松学舎の経営もその中のひとつである。以上見てきたように、渋沢の二松学舎へのかかわり方は長年に互って運営の責任者を務めており、一私学に対する支援としては格別に手厚いものであった。前掲の池田四郎次郎・尾立維孝書簡にある、「二松学舎ハ中洲翁ニヨツテ創立セラレ、渋澤翁ニヨツテ永遠ニ維持セラル、モノト為ス外ナシ」という言葉は関係者の偽らざる実感であったが、渋沢は既に高齢であり、この体制は永続するものではなく、その歿後は金子堅太郎舎長(1932～42)、国分三亥理事長(1932～47)の体制に移り、戦争の時代に入っていく。

- 渋沢が三島中洲について言及した講演・談話、および二松学舎において行った講演には以下のものがある。
- 祝辞「道徳と経済の漢学に俟つ大なる所以」大正5年(1916)4月30日(『二松学舎四十年記念二松義会恩賜奉戴式雅集纂録』大正5年〈1916〉7月刊)
  - 「祝寿の辞」大正6年(1917)6月3日(『中洲先生寿筵纂録』大正6年〈1917〉12月刊)
  - 「故三島中洲先生の靈前に於て」大正8年(1919)5月15日(『龍門雑誌』382号、大正9年〈1920〉3月刊)
  - 「二松学舎開堂式来賓に対する挨拶」大正8年(1919)12月14日(尾立維孝代読、『二松学報』1号、大正9年〈1920〉9月)
  - 「孔子二千四百年祭に就て」大正11年(1922)10月8日(『二松学報』6号、大正11年〈1922〉12月)
  - 「講話」昭和3年(1928)12月5日(『二松』2号、昭和4年〈1929〉7月)
  - 「本舎創立記念及池田教授四十年感謝式講話」昭和5年(1930)3月(『二松』3号、昭和5年〈1930〉3月)

渋沢が昭和6年(1931)11月11日に亡くなった後、二松学舎では12月1日に追悼式が挙行された。『二松』7号(昭和6年〈1931〉12月所収)は「青淵先生追悼号」となった。主なものとしては以下のような文章が掲載されている。

- 池田四郎次郎「祭故二松学舎長青淵渋沢子爵文」
- 牟岐喆雄(生徒代表)「祭文」
- 国分三亥「追悼之辞」
- 渋沢敬三「謝辞」
- 山田準「青淵翁の信念 論語と算盤」

(以上の諸文は、いずれも『渋沢栄一伝記資料』第45巻に所収)



◀ 30-48 | 三島復雷堂「義利合一」

30 | 洪沢栄一八十歳祝賀『頌壽帖』  
(大正8年(1919)12月、折本・折帖0023)

大正8年(1919)は三島中洲が90歳、洪沢栄一が80歳を迎えるので、これを記念してこの年5・6月頃に賀宴を開くことが計画されていた。しかしこれを待たず、5月12日に三島は歿した。8月には寄付行為を改正して財団法人二松義会を改め新たに財団法人二松学舎を発足し、洪沢が(第3代)舎長・理事に就任した。また8月から校舎の改築工事に着工し、12月14日に新講堂において開堂式を挙行した。前年には改築計画を知った大正天皇から五千元のご下賜があったので、これを「恩賜講堂」と称し、洪沢による額が掲げられた。

本資料は、二松学舎関係者が洪沢の80歳を祝って、開堂式当日に洪沢に贈るために作成した書画帖。『二松学報』2号に活字化されている。

参考



『二松学報』1号(大正9年(1920)9月刊)口絵の洪沢栄一揮毫「恩賜講堂」扁額

奉賀



青淵洪澤男八十壽序

今茲己未三月十四日我財団法人二松学舎長男青淵洪澤先生方八十懸弧之辰同人相謀獻壽觴先生天資穎悟夙就尾高氏受經又通講武後入海保氏塾結交海内志士時幕府未造外患日甚於是慨然有救世之志糾合同志事不侔適京師偶辱一橋公知遇隨水府公子遊歐涉遠則幕府既廢王宮中興任大藏大丞上大臣詔公有可獻替



既而有所思挂冠創立合本制度開富國之基遂賜榮爵凡民間事業莫不執事晝夜驅車席不遑暖先生之於世可謂勤且勞矣唐子西古碑銘曰筆以墨銳而動故短命唯鈍而靜故永本今先生以玉銳至動之故能躋八帙之壽域其故何也蓋先生少時經以養其神劍以鍛其體溫溫時艱融洽固然是以壽世庶物游及俾之銳中者鈍動中有靜或觀戈于未涉或采風于高城又問賦詩著書意氣湛空夫源之深者又流之遠

根之厚者又枝愈繁先生之深也吾師中洲夫子稱其經術理財一致作論詰算盤說賜之又欽又學有根柢有青淵水來自西泠之句先生哉知己長我学舎鼎力斡旋四方翕然贊之校舍新築夫子泉下之甚可知也亦謂我学舎之有兩先生譽猶二老松對峙呈瑞與舍名相合今也先生魏然猶存底蘊稚松真可喜也經曰富潤屋德潤身先生飛鳥之山壯為東都之名園是富之潤屋若欽童顏黑髮鬢錄不衰且之德之潤身若欽嘆乎世道日

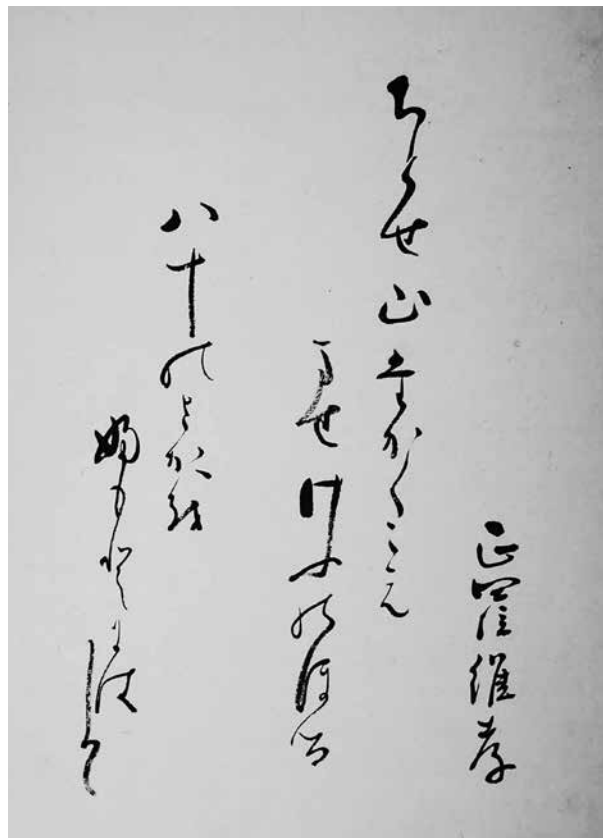
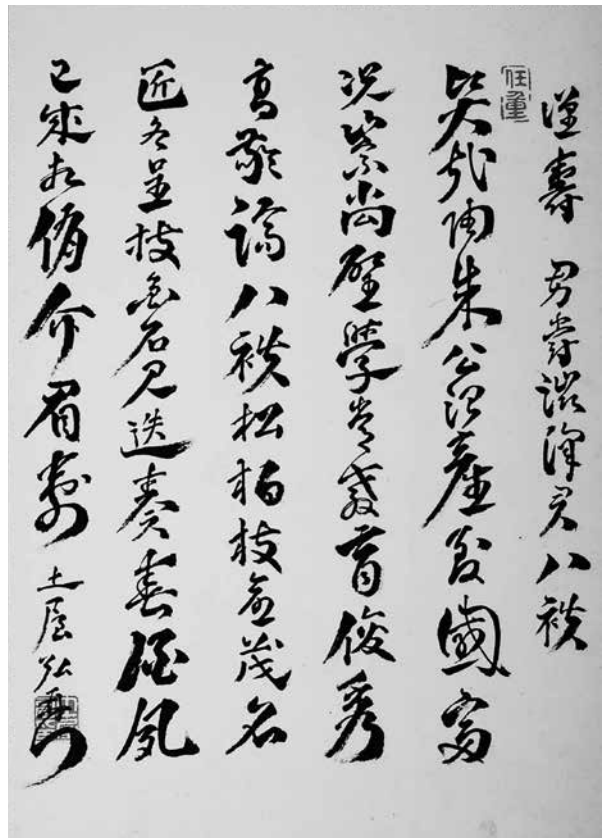
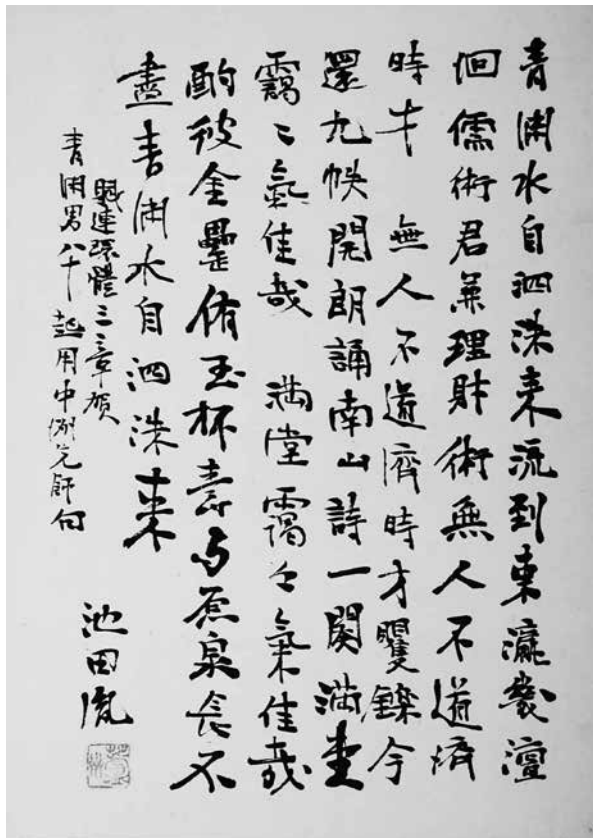
荒人心月隘者此所有碩德若人仗吾徒展力於斯文堂獨為我学舎加之乎哉

二松学舎理事



佐倉孫三謹啟



30-01 | 佐倉孫三達山「奉賀青淵洪澤男八十壽序」





- 30-02 (右) | 土屋弘鳳洲「謹壽男爵澱沢君八袂」
- 30-03 (左) | 池田胤蘆洲「賦連環體三章賀青洲男八十、起用中洲先師句」
- 30-04 (右) | 尾立維孝「(和歌)」
- 30-05 (左) | 菊池晋「延年益壽図(老松)」

正家公庭騰力老愈優不喜望  
 亦愈同學自由志欲早生  
 終身志以學治居左牙  
 外崎  
 澁沢先生七絶  
 外崎覺拙居  



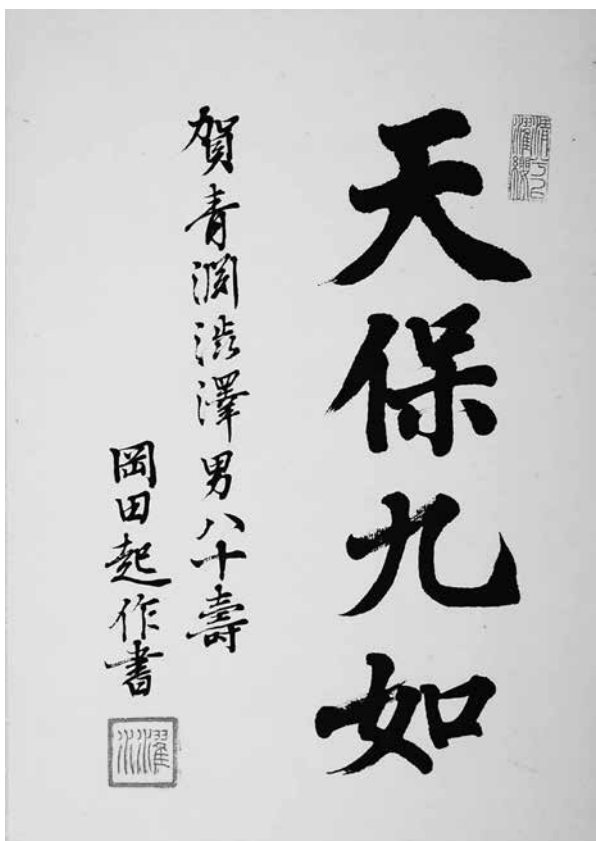
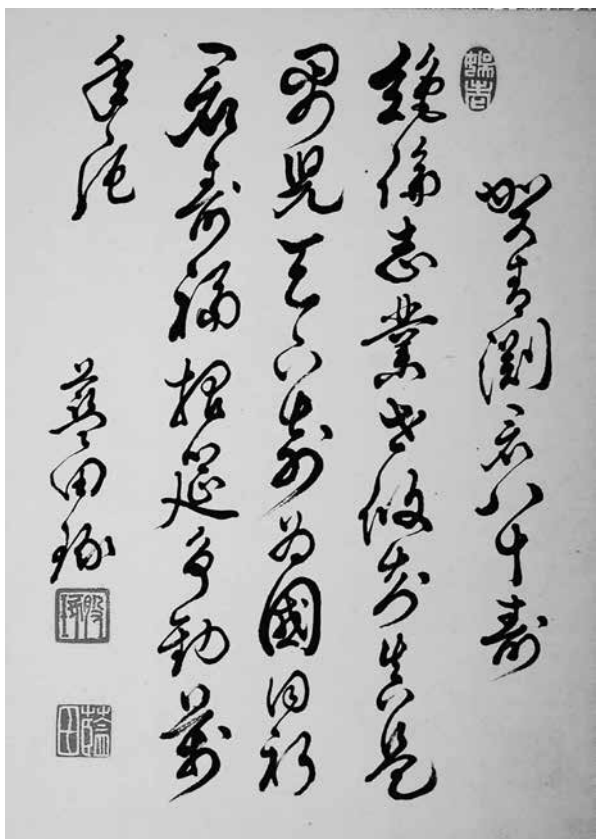
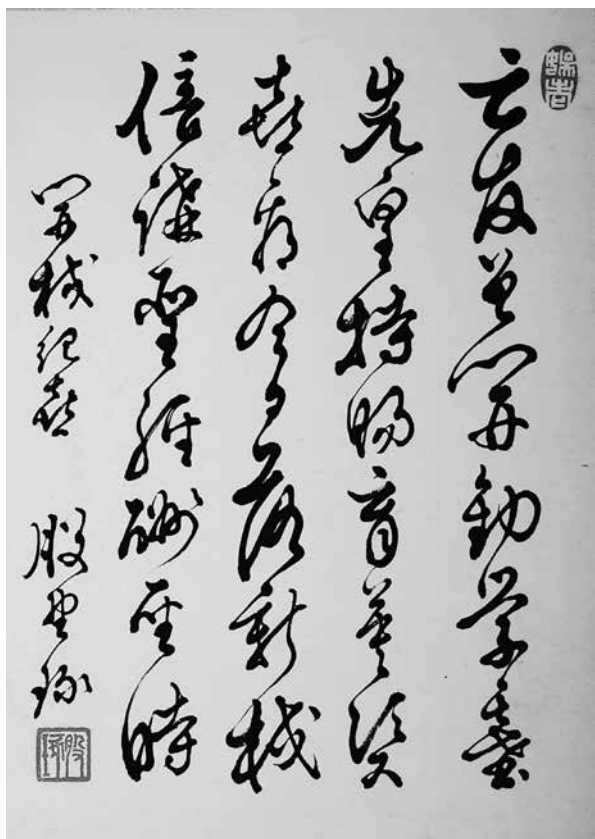
舍長青湖男爵以陶朱之富樂寂原之道平生  
 耽讀論語行己愛身一依之為準園是以與中  
 洲先師交契尤深二松義會創建男爵之力實  
 居多去歲有齋築講堂之議男爵首捐幾千金又  
 德通知友亡歲連八芳餘金報工於某月某日至十一  
 月告成乃舉開堂式並祝男爵八十遐齡燕辭以為  
 頌  
 高島日升雲錦車市塵迷沒意安舒一生風格  
 天邊鶴半部尊諱帳裏書錢穀夙知係家國錫  
 銖又恐擾鄉閭聊將餘力資吾輩喜見新堂頌九如  
 大正丁未十一月  
 安井小太郎拜

五福在家門身兼三  
 達尊何方致斯茂魯  
 論養其根  
 壽滋澤男八秩  
 林直方

奉壽二松學舎長澁澤男八十  
 二松樹下賀杯傳正是丹楓黃菊天趙普經  
 綸唯一部東方康壽幾千年興費已見振  
 頹道足食又聞圖墾田但恨雲山途杳々無由  
 今日上華筵  
 大正己未十有一月中澣  
 前豐  
 萱村間野遺秉  



- 30-06 (右上) | 安井小太郎朴堂「…乃舉開堂式、並祝男爵八十遐齡、燕辭以為頌 (七律)」
- 30-07 (左上) | 外崎覺拙居「呈澁沢先生 (七絶)」
- 30-08 (右下) | 間野遺秉萱村「奉壽二松学舎長澁沢男八十」
- 30-09 (左下) | 林直方南村「壽澁沢男八秩 (五絶)」

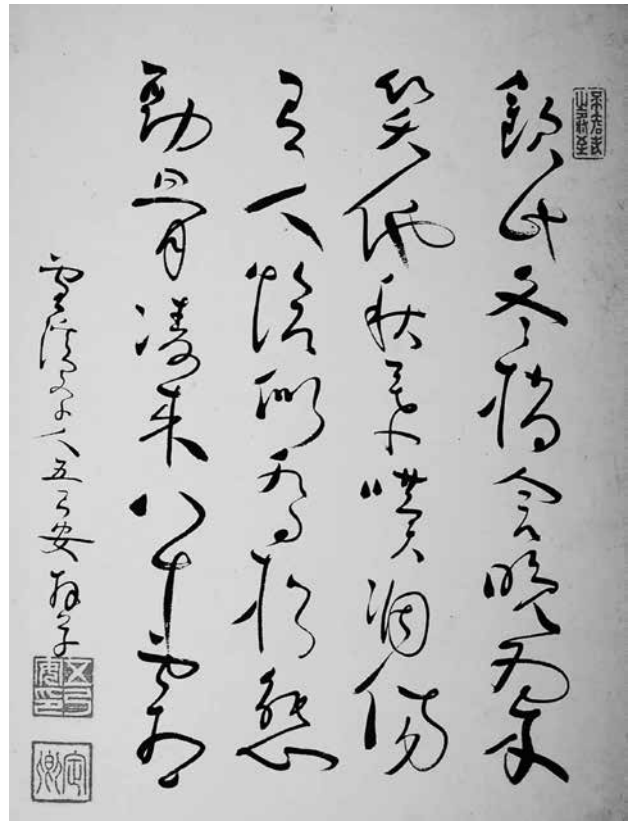
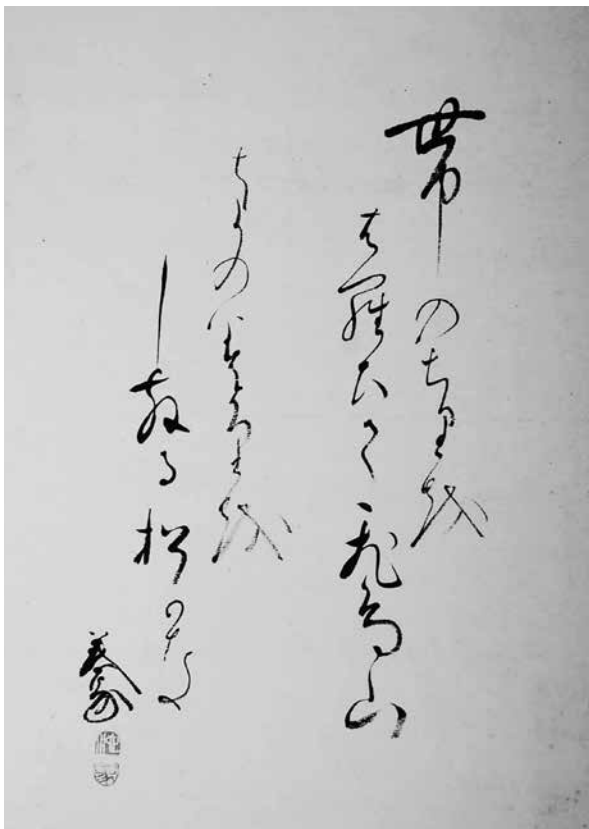
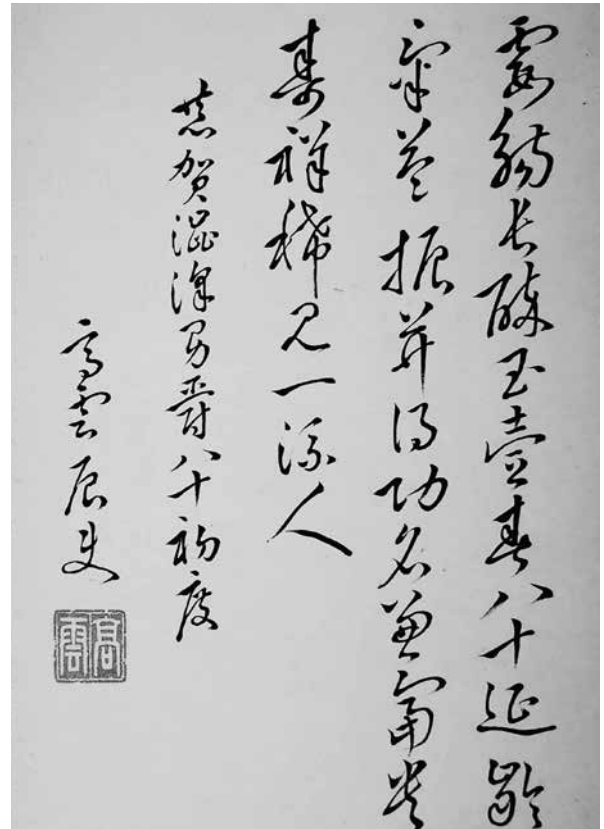
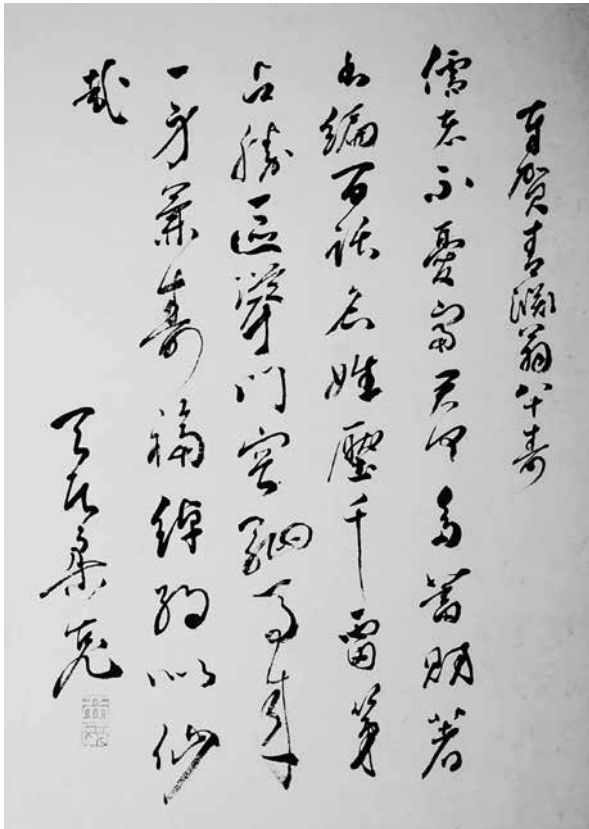




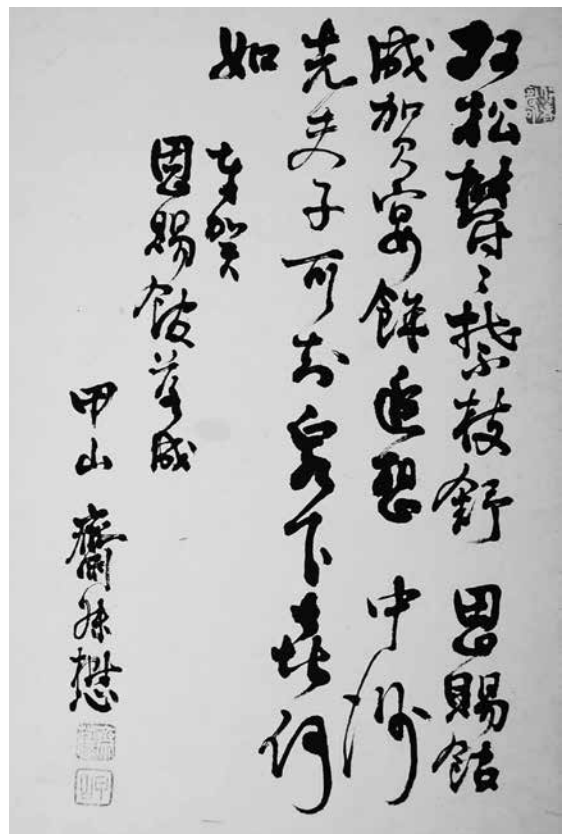
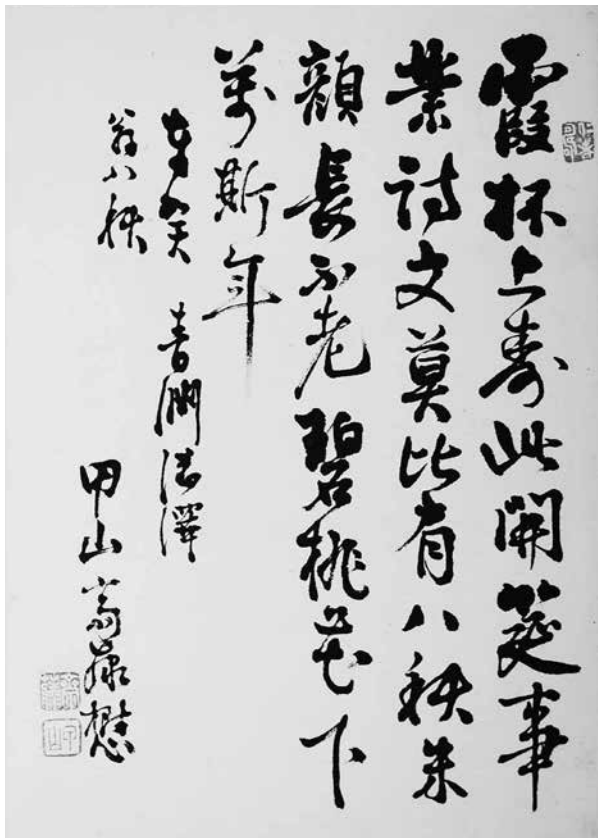
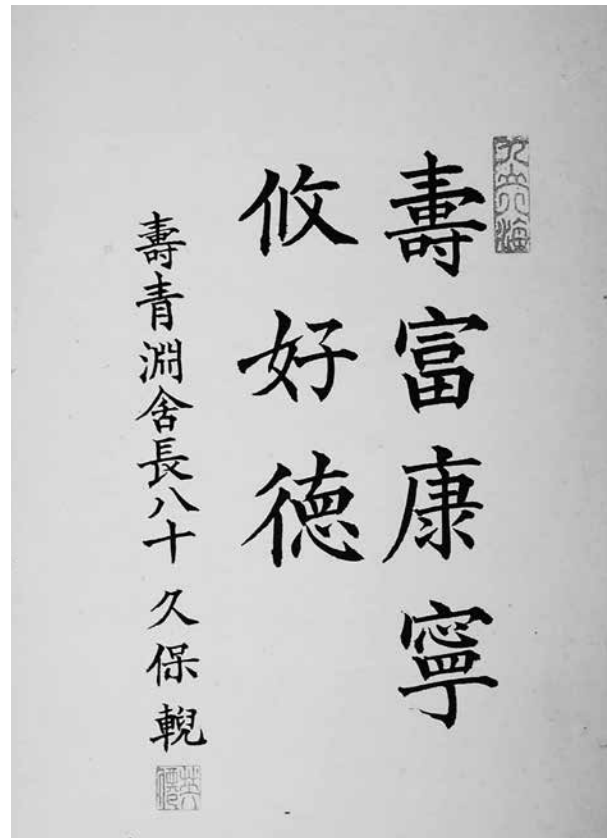
30-10 (右上)(左上) | 股野琢藍田「賀青淵君八十壽 (七絶)」 「開校紀喜 (七絶)」

30-11 (右下) | 岡田起作濯水「天保九如」

30-12 (左下) | 永芳「(梅林高士讀書圖)」



- 30-13 (右上) | 高雲辰夫「恭賀渋沢男爵八十初度(七絶)」
- 30-14 (左上) | 木内柔克天民「奉賀青淵翁八十寿(五律)」
- 30-15 (右下) | 五弓安二郎雪溪「(七絶)」
- 30-16 (左下) | 池辺義象「(和歌)」



30-17 (右上) | 久保觀「寿富康寧攸好德」

30-18 (左上)(右下) | 齋藤懋甲山「奉賀青淵法澤翁八秩(七絶)」 「奉賀恩賜館落成(七絶)」

30-19 (左下) | 雨漏庵哲堂「(老寿図)」

才談卓然遙絶羣雅橫議事一言分  
 漁书塾裡文專謀干業場中武自勤  
 昨補將軍舉美俊今修材務持嘉尚  
 曾拋冠冕日躬商業八秩昔業是  
 積勳

横田松泉

壽福如君此所為况新  
 名聲寰宇存不改經  
 德無儒術富業國中  
 祝魯論

奉賀青淵澁沢先生八十  
 鹿川宮内黙藏上

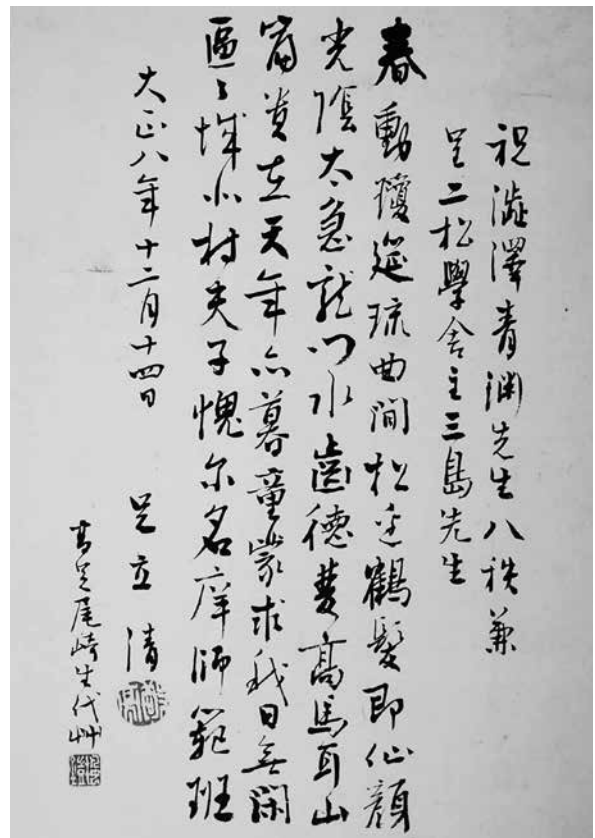
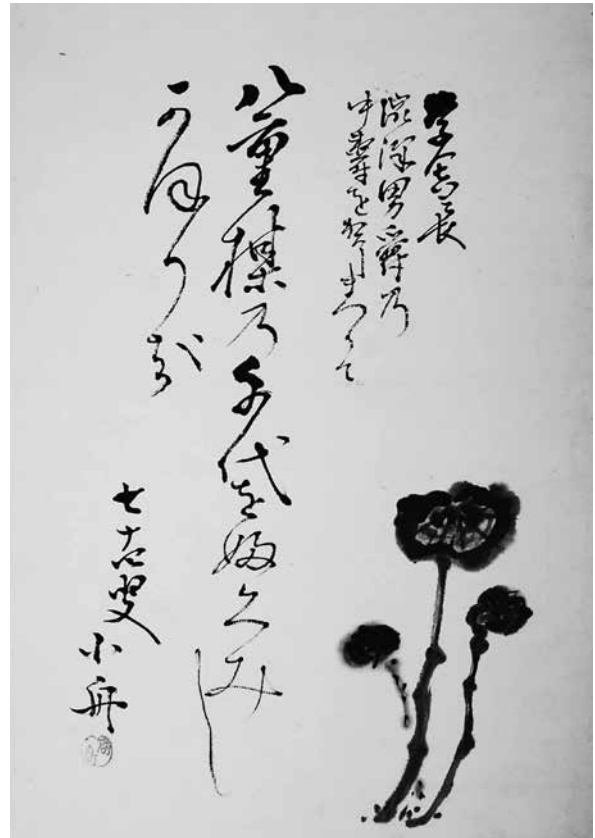
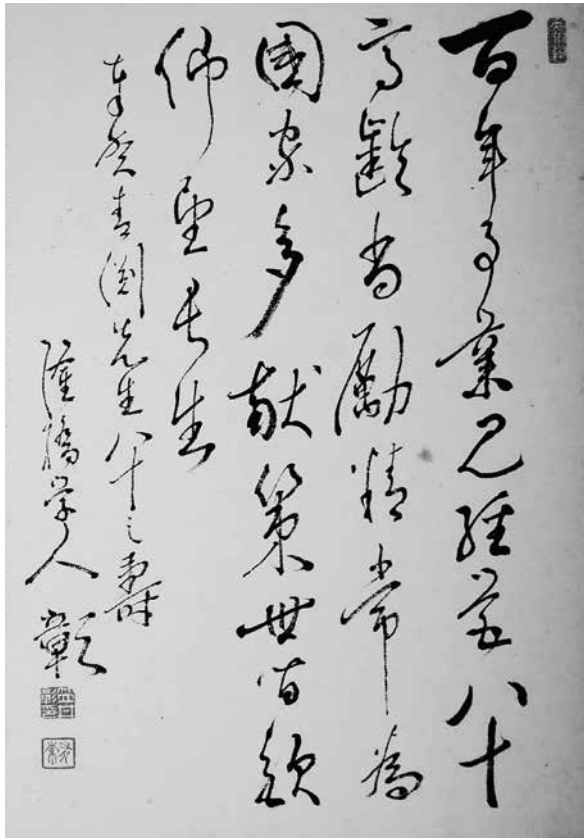
聲名得于如玉人平生業  
 老素於春如頭白之吟可切  
 可見母之報國志其英華吐  
 青霜後激古松塔翠雲中  
 新語云仁者壽乃壽  
 到子新必有壽

桃谷勢多章之

八十年來事瀆民勞心情  
 憫人羣精詳之致君王宜行  
 誼無忘取將軍若英治經終好興  
 德音英陶冶武兼文天將五  
 福為陽報夢域登臨不息勤

那智佐典惇齋  
 壽二松学舎長澁沢男八秩次先師韻

- 30-20 (右) | 宮内黙藏鹿川「奉賀青淵澁沢先生八十(七絶)」
- 30-21 (左) | 横田松泉「賀澁沢男八秩寿(七律)」
- 30-22 (右) | 那智佐典惇齋「寿二松学舎長澁沢男八秩次先師韻(七律)」
- 30-23 (左) | 勢多章之桃谷「(七律)」



- 30-24 (右上) | 高島小舟「学舎長洪沢男爵の中寿を賀しまつりて(俳句)」
- 30-25 (左上) | 笠井彰隆橋「奉賀青淵先生八十之寿(七絶)」
- 30-26 (右下) | 足立清敬亮「祝澁澤青淵先生八秩、兼呈二松学舎主三島先生(七律)」
- 30-27 (左下) | 渡邊完紫洋「(椿水仙図)」



賓朋多聚萬年 厄掃多來祥煙  
 繞籥帷皆位其高山所以心胸之  
 大海無涯老於學多何益也富  
 不若財多財施之福新人以道  
 奉之者唯來友與期願  
 清士廉八十壽言 清拜

謹賀男爵澁澤翁八帙  
 高德如翁本始倫強踰半古  
 強來仁可知長壽之攸錫  
 松榮滿庭不老人  
 西水速水紋  
 文正八己未年初冬

理財修德一身該天錫遐齡  
 八袞開仁者樂山萬年壽  
 長生福自 聖經來 頌  
 青淵澁澤男爵眉壽恭呈併乞  
 高教 二松舊學吹野信履

島門學術主經綸經綸本與理財循澤翁事業存  
 理財理財益可濟斯民二家之道畧相同二家之交宜其  
 親二松創學卅二年濟才成才七千人二松結會十七歲  
 學財豐足教可陳九重皆嘉教學績萬圓黃金恩  
 賜新泰山頽兮北斗墜跨白鶴兮騎麒麟韓門  
 弟子多才俊奉規續成不倦仁澤翁主會監學  
 計財本益殖學業伸今茲大正己未冬學宮修造  
 真以輪澤翁八十老益壯乃慶若成賀誕辰心表  
 餘哀雖未愈祝學且欣二慶因學業隆賴澤翁壽  
 也頌南山頌大椿 大正歲在己未臘月十五 二松學  
 舍土功告成二松義會長澁澤先生壽躋八十會員相率  
 開宴落其成且獻壽觴乃賦此以寄慶 久保雅友

- 30-28 (右) | 清士廉「澁沢男八十寿言 (七律)」
- 30-29 (左) | 速水紋西水「謹賀男爵澁沢翁八帙 (七絶)」
- 30-30 (右) | 吹野信履「頌青淵澁沢男爵眉寿恭呈 (七絶)」
- 30-31 (左) | 久保雅友檜谷「…會員相率開宴落其成且獻壽觴、乃賦此以寄慶 (七古)」

青淵先生八秩賀詞

八秩紅顏爽颯姿 雙龍腰繫想當時  
 觀光超海智囊實 殖貨理財英範垂  
 北斗望兼松學舍 南山壽獻菊花卮  
 麟經能誦古名將 一部魯論相對宜

法正

大正己未十二月

松田定久 舟山 拜草

青淵大人八十の賀に

安二

夜多にや代も  
 うらやま 若く  
 みつと 澤も  
 ね、ね、ね

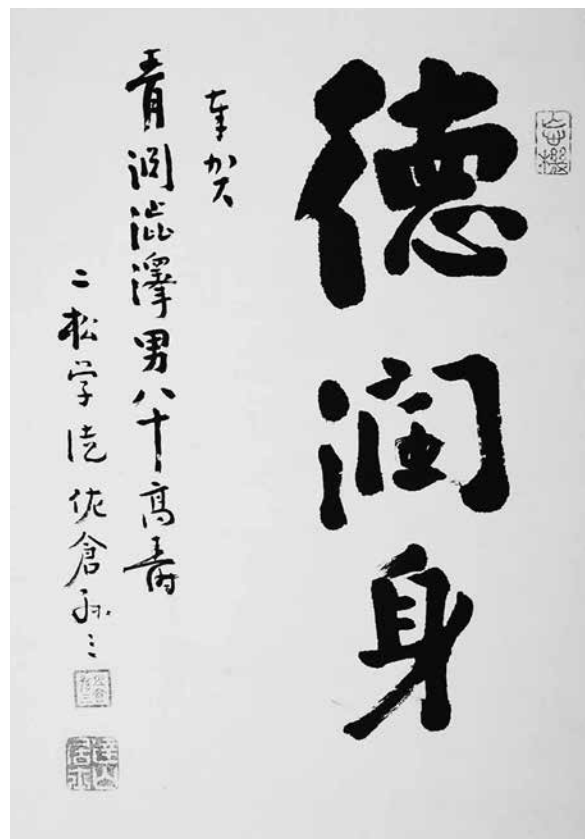
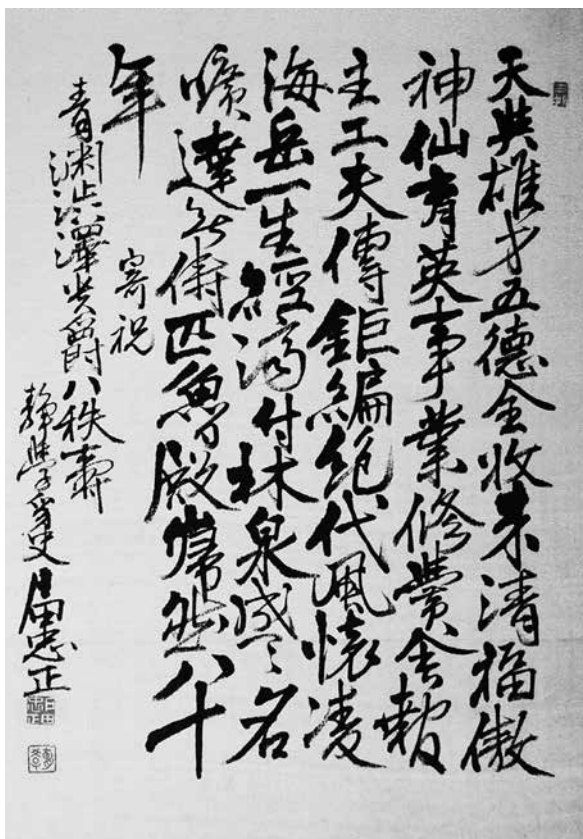
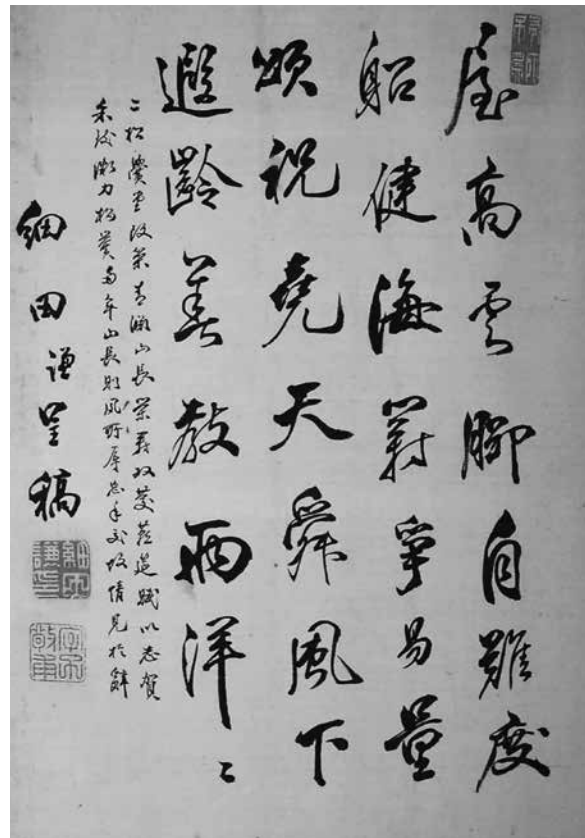
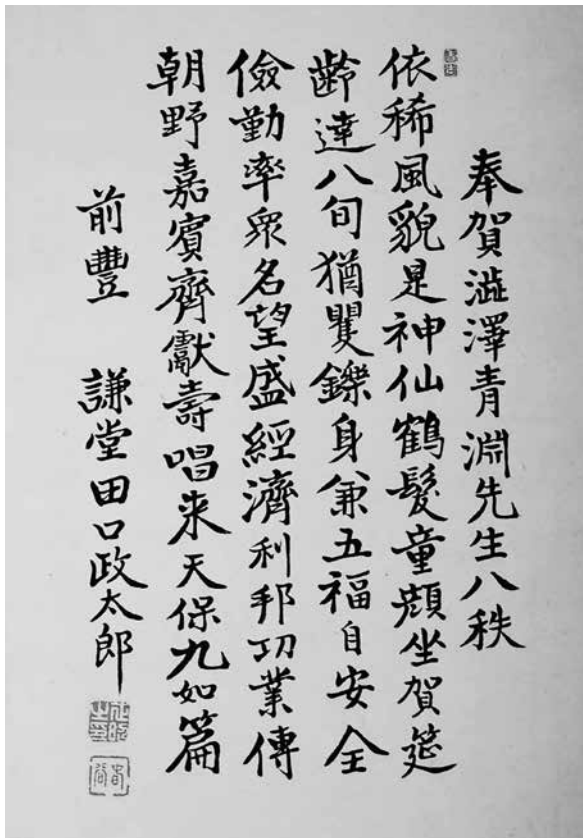


賀澁澤男八十壽

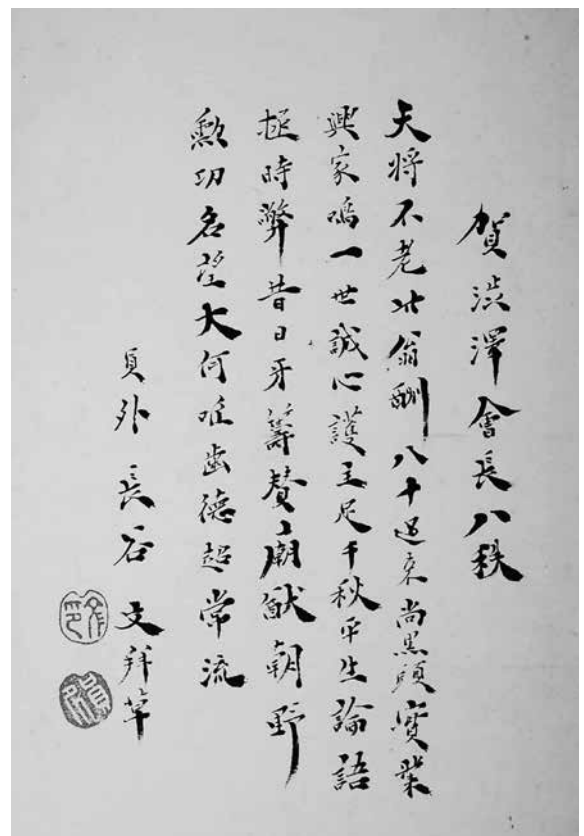
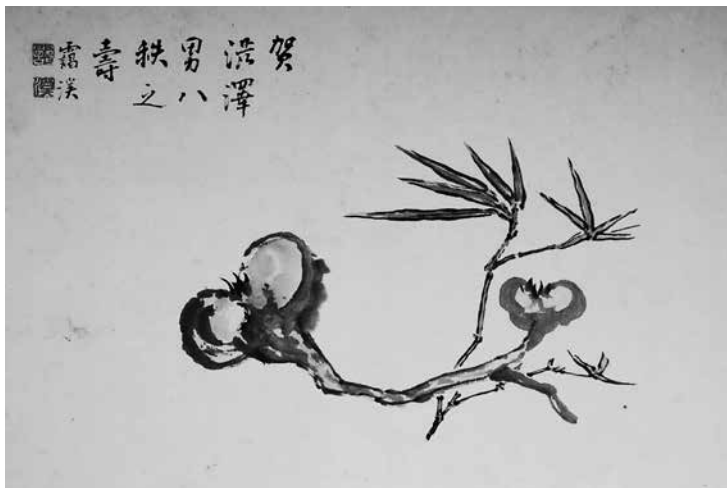
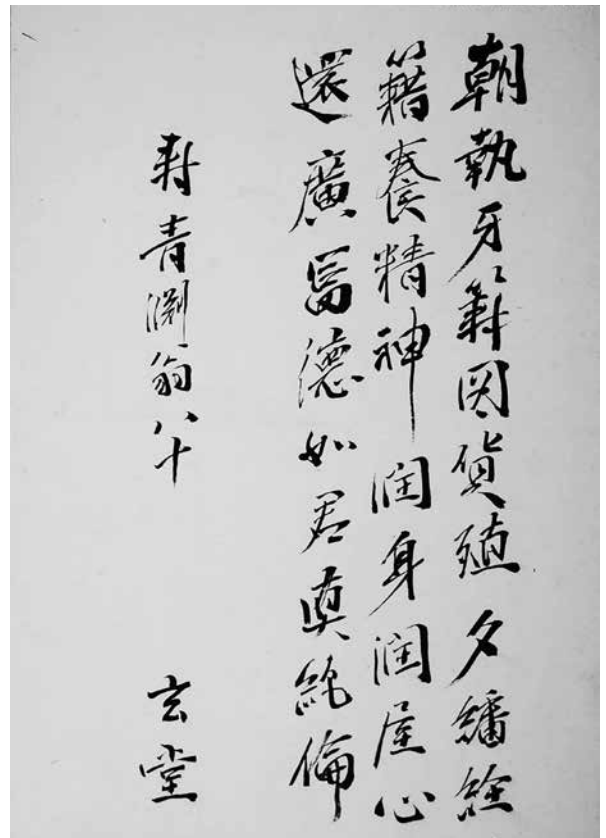
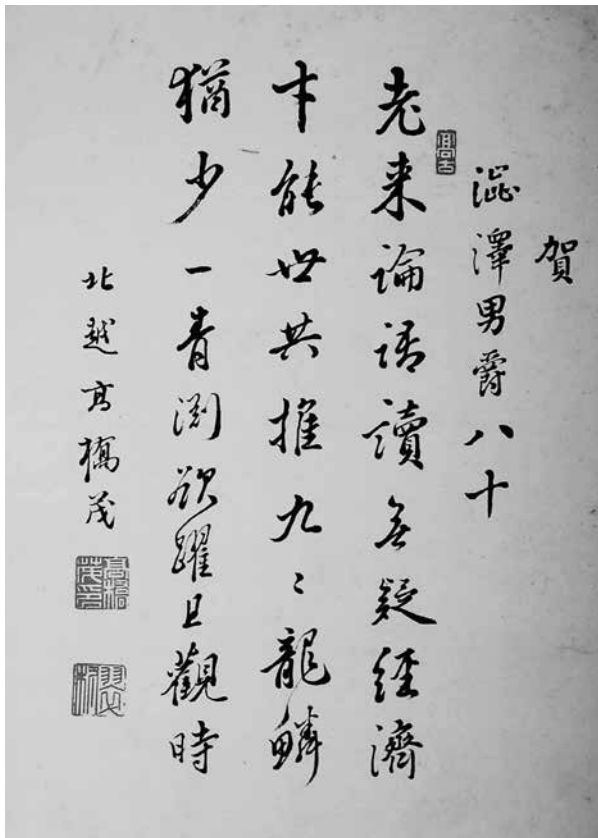
青松鬱爵々五雲光  
 天保九如萬壽觴  
 綠髮朱顏長不老  
 滿堂賀客表慈祥

姉崎岩藏

- 30-32 (右上) | 五弓安二郎「青淵大人八十の賀に(和歌)」
- 30-33 (左上) | 松田定久舟山「青淵先生八秩賀詞(七律)」
- 30-34 (右下) | 姉崎岩藏「賀澁沢男八十寿(七絶)」
- 30-35 (左下) | 小竹逸人田知「謹奉祝青淵澁沢先生八十高寿(七絶、寿老人図)」



- 30-36 (右) | 細田謙蔵劍堂「二松學堂改築青淵山長榮壽双慶燕筵賦以志賀(七絶)」
- 30-37 (左) | 田口政太郎謙堂「奉賀澁沢青淵先生八秩(七律)」
- 30-38 (右) | 佐倉孫三達山「德潤身」
- 30-39 (左) | 戸田忠正静学「寄祝青淵澁沢貴爵八秩寿(七律)」



- 30-40 (右上) | 玄堂「壽青淵翁八十 (七絶)」
- 30-41 (左上) | 高橋茂一郎翠村「賀澁沢男爵八十 (七絶)」
- 30-42 (右下) | 長谷文員外「賀澁沢會長八秩 (七律)」
- 30-43 (左下) | 靄溪「(靈芝図)」

樂山兼樂水養壽羽觴浮富克陶  
 朱積德同沫泗流靈芝遠徑秀仙  
 菊爽階桐洗髓金樽酒雲温  
 八十秋  
 壽  
 青淵澁沢男爵八十  
 擬陰三宅武彦

舊壇莫相忘 遐齡獨自幼  
 憂時老如壯 濟世實而儒  
 新築舍加美 先師道不孤  
 圓珠經一卷 正是德之符  
 二松學舎新築方成 壽舎長  
 澁沢男八秩  
 蒼余生山田準

澁沢榮一閣下か齡八十路を重ね給ひしを祝し参らするに  
 八十路下重ね給ひしを祝し参らするに  
 新築の舎はめでたき事なり  
 秋葉の赤きうけし壽の字  
 豊かにさす人も 健に  
 三宅武彦 千壺田畑大蔵  
 謹啓

壽原安業乃舊舎仰之  
 八極地上俾初登畫第  
 則壽曾若高車尊治民  
 編胃懷前乃宜之才何  
 滴似浮采奕園 聖訓道  
 尤至量新築以十年  
 次静学君祝  
 澁沢男八秩 謹啓

- 30-44 (右上) | 山田準濟齋「二松学舎新築方成、寿舎長澁沢男八秩 (五律)」
- 30-45 (左上) | 三宅武彦擬陰「寿青淵澁沢男爵八十 (五律)」
- 30-46 (右下) | 西川光菊畦「次静学君祝澁沢男八秩韻 (七律)」
- 30-47 (左下) | 田畑大蔵千壺「澁沢栄一閣下か齡八十路を重ね給ひしを祝し参らするに (和歌三首)」



### Ⅲ | 渋沢栄一と斯文会

#### 一 斯文学会と斯文会、湯島聖堂と渋沢栄一

桂園時代から原内閣時代の内政政策の過程で、近世以来の村落共同体は解体されて近代国家のための共同体に再編され、共同体の単位である人々の意識も村落共同体の構成員から国民国家の構成員のそれへと、国民の内面世界の組織化が進行した。この内面世界の組織化に当たっては、神道や儒教のような伝統的価値観が利用されたが、それは伝統文化・伝統思想の単なる復興ではなく、日露戦後の内政外交問題に対応した内政充実策として、天皇制国家を支える国家主義的価値観を形成するものであり、その実現のための組織づくりが進められた。

斯文学会は明治13年（1880）に昌平黌出身の漢学者等が中核となって創設され、和漢学による教育組織「斯文黌」を設けて卒業生を送り出し、文部省による学校制度整備にともない正規の教育機関としての位置づけを失いつつも、明治末期まで神田錦町の所有地で聴講者を集めて漢籍の講義を継続した。この斯文学会は湯島聖堂とは直接関係がない。

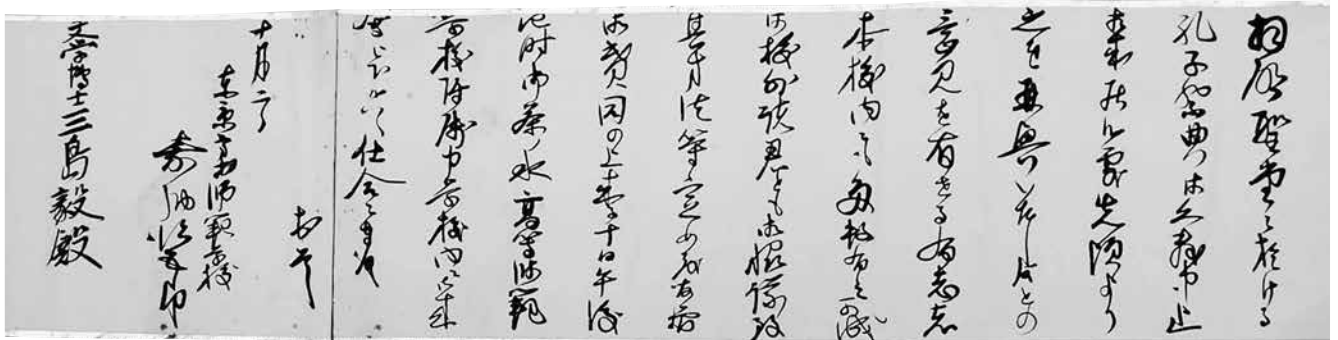
幕府直轄学校の中核をなした湯島聖堂は、明治維新後、明治新政府に接収されて、昌平学校、大学校、大学と名称を変更しつつ和漢学の教育研究と学務行政を兼ねる組織としてしばらく存続し、明治4年（1871）に廃止されて文部省が創設された。講堂・学寮は東京師範学校（後の東京高等師範学校）となり、聖堂は博覧会場や東京書籍館となった後、東京高等師範学校附属の東京教育博物館となっていた。渋沢は湯島聖堂を「物置同然」にしておく文部省の対応を不満とし、斯文学会に湯島聖堂を管理させる案がたてられたが、なかなか実現に至らなかった。

その後、明治39年（1906）に東京高等師範学校の教職員の中から湯島聖堂における孔子祭（釈奠）の復活を求める声上がり、翌年（1907）に孔子祭典会が組織されて、4月28日にその第1回が開催された。渋沢は三島とともに創設時から評議員に選出されて参加している。

その後、大正7年（1918）に、斯文学会、研経会（1899設立）、孔子祭典会、東亜学術研究会（1909設立）、漢文学会（1910設立）などの漢文教育や東洋古典学の関連諸団体を統合して、新たに斯文会が設立された。渋沢は斯文会の副会長に推挙され、関東大震災で焼失した湯島聖堂の復興に尽力した功績は大きい。

多くの事業に関わった渋沢だが、そこには渋沢なりの判断基準があったように見える。国家的視野に立った公益性の高い施設のほかに、郷里など地縁のある施設、旧幕臣として徳川家所縁の寺社など個人的に縁故のある施設への支援が目立つ。湯島聖堂は徳川家所縁の施設という点で、東照宮・増上寺・寛永寺等と共通する性格を持つからこそ、渋沢はその支援に取り組んだのである。

服部宇之吉によれば、1918年に斯文会が設立される以前、斯文学会が所有する資金を東京帝国大学文科大学に寄附して新たに儒学科を設置する構想があったが、渋沢らの反対によって実現しなかったという。渋沢の反対理由は定かではないが、湯島聖堂の管理団体として想定していた民間団体の資金を帝大の学科増設に使うのは筋が違ふと考えたであろう。また、漢学振興の場として帝大ではなく、民間団体を選択し、広く国民全体に浸透することを望んだものと考えられる。

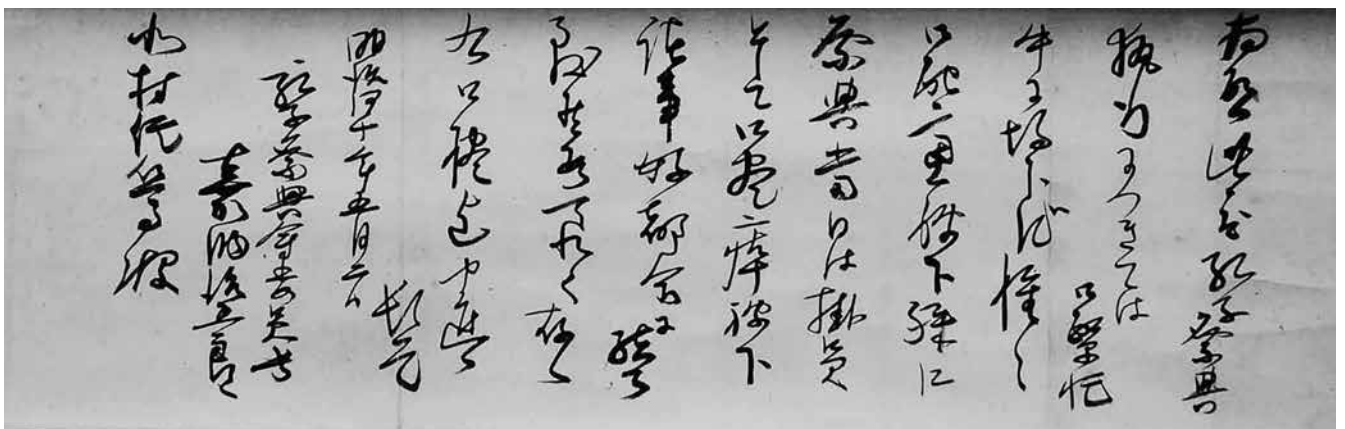


### 31 | 嘉納治五郎書簡(三島中洲宛、明治39年〈1906〉10月2日、書簡0089)

本書簡は、東京高等師範学校長の嘉納治五郎から三島中洲に宛てた、湯島聖堂における孔子祭典再興に関する協議会への参加を要請する内容。明治39年(1906)10月10日の会合は最初の協議会であった。渋沢は同10月17日に「聖堂保存」に関する協議のために自ら嘉納治五郎を訪問し、10月19日にも学士会における孔子祭典復興の評議会に出席。翌年(1907)1月には評議員と委員を選任し、渋沢は三島らとともに評議員に加わっている。渋沢は第1回から孔子祭典会に参加し、第2回(1908年4月26日)には「実業界より見たる孔夫子」、第10回(1916年4月)には「実業家の孔子観」を講演している。その後、財団法人斯文会(1918年)では渋沢は副会長となったので、しばしば講演を行っている。なお、嘉納は明治11年(1878)に二松学舎に入塾したことがある。

【翻刻】 拝啓、聖堂ニ於ける孔子祭典は久敷中止相成居候處、先頃より之を再興いたし度との意見を有せる有志者、本校内ニも多数有之、可成は校外諸君とも御協議致、其方法等定め度存候間、御賛成の上、来る十日午後四時、御茶ノ水高等師範学校附属中学校内ニ御来駕被下候ハ、仕合ニ奉存候。頓首。

十月二日 東京高等師範学校 嘉納治五郎 文学博士 三島毅殿

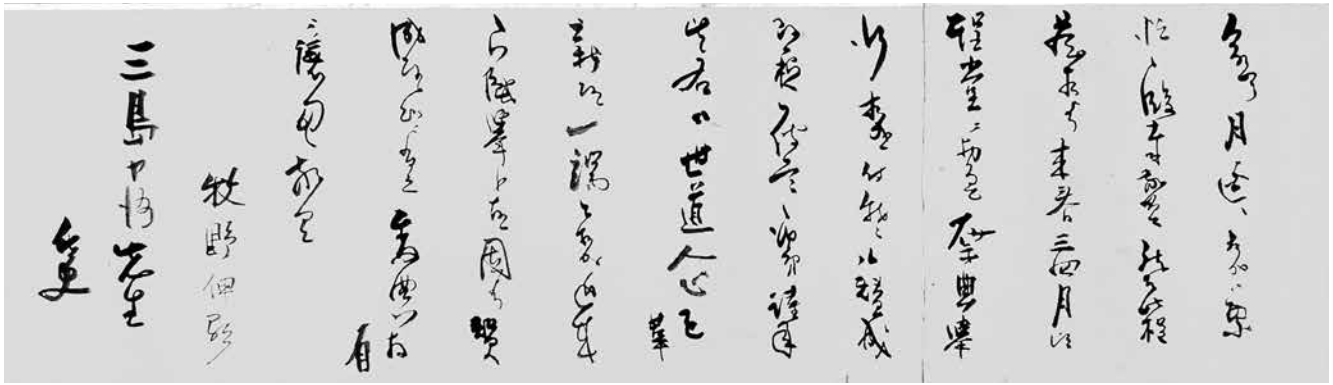


### 32 | 嘉納治五郎書簡(北村信篤宛、明治40年〈1907〉5月2日、斯文会旧蔵資料、斯文0211)

本書簡は、嘉納治五郎が第1回孔子祭典会において係員として働いた北村信篤に宛てた礼状。『渋沢栄一伝記資料』には、湯島聖堂に関して次の記事がある。「旧聖堂維持法ニ就テ青淵先生斡旋シ、其管轄ガ従来文部省所属デアツタノデ、東京市ニ移管セラレバク交渉ス」。現在も「史跡湯島聖堂」の所轄は文化庁と東京都となっており、渋沢が湯島聖堂の維持管理についてどのように関わったのか、その一端が窺える。

【翻刻】 拝啓、此度孔子祭典執行につきては、御繁忙中に拘らず、種々御配慮被下、殊に祭典當日は掛員として御尺瘁被下、諸事好都合に結了致候段、忝く存候。右御禮迄申進候。頓首。

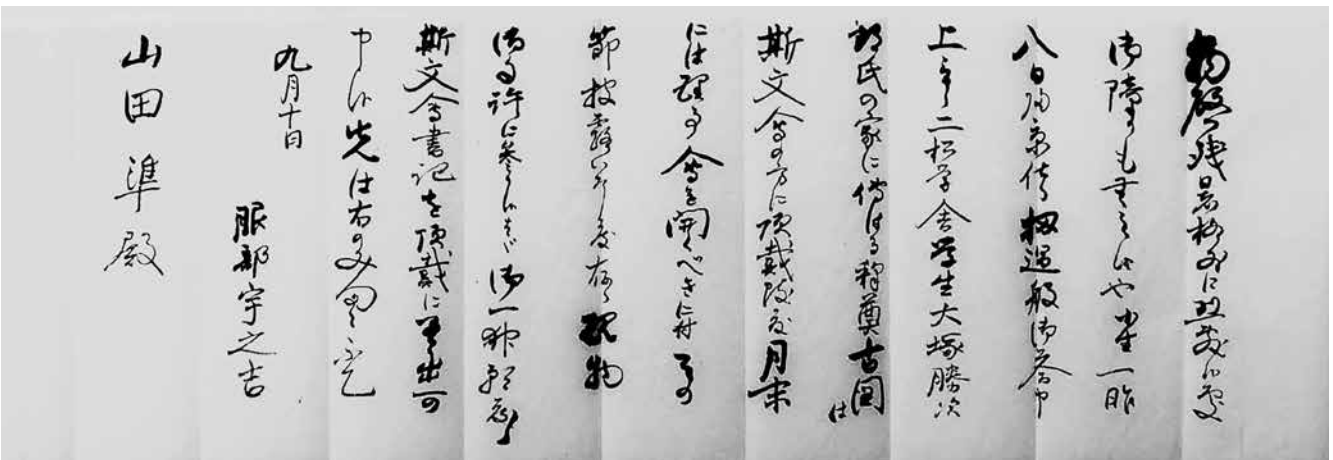
明治四十年五月二日 孔子祭典会委員長 嘉納治五郎 北村信篤殿



33 牧野伸顕書簡(三島中洲宛、[明治39年<1906>12月]、書簡0156)

牧野伸顕(1861~1949)は大久保利通の二男で、米国留学から帰朝後、東京大学文学部和漢文学科に入学し、在学中に三島中洲にも学び、中退して外務官僚となった。この年、第一次西園寺公望内閣が発足し、入閣した蔵相阪谷芳郎、文相牧野伸顕、逓信相山縣伊三郎は嘗て教えを受けた旧誼を謝して10月4日に三島中洲を星岡茶寮に招宴した。本書簡から、嘉納治五郎から孔子祭復興について相談を受けた三島が牧野にも賛成するよう働きかけたことが分かる。牧野は第1回孔子祭典会から評議員を務めている。渋沢と牧野の関係については、渋沢が文部次官時代の牧野を訪ねて湯島聖堂の取扱いを改善するよう申入れ、その結果、斯文学会に管理を任せるという案が浮上ったことがあった。この時は実現しなかったが、渋沢と牧野の間で湯島聖堂について以前から交渉があったことが分かる。渋沢と牧野は大正期に入ると、日米関係など国際問題に関する交流が増えていく。

【翻刻】 愈々月迫ニ相成、御繁忙之段奉敬賀候。然は此程、蔵相より来春三四月頃、聖堂ニおゐて祭典举行相成候付、我ニも賛成致候様、御伝言之次第、謹承仕候。右ハ世道人心を革新致候一端と相成、近来之御盛挙ト存候。因より賛成致候心ニ有之、委曲ハ拝眉ニ讓、勿々敬具。 牧野伸顕 三島中洲先生侍史



34 服部宇之吉書簡(山田準宛、昭和3年<1928>9月10日、F657)

本書簡は、服部宇之吉(1867~1939、元東京帝大支那哲教授)から山田準(二松学舎専門学校長)に対して、二松学舎生徒の大塚勝次郎の家に伝わる釈奠古図を斯文会でもらい受けたいというもの。釈奠は明治初年以來40年間途絶えていたため、その詳細を知る者がなくなっていた。服部宇之吉は渋沢が支援した「婦一協会」にも参加し、渋沢の儒教振興活動と関係の深い人物である。しかしながら、斯文学会の資産を東京帝大に寄付し儒学科を新設するという服部が関与した案に、渋沢が反対したことも知られている。

【翻刻】 拝啓、残暑格別に烈敷候処、御障りも無之候也。小生一昨八日帰京仕候。扱過般御答申上置候、二松学舎学生大塚勝次郎氏の家に伝はる釈奠古図は、斯文会の方に頂戴致度、月末には理事会を開くべきに付、その節に披露いたし度存候。現物御手許に参り候はゞ、御一報願度候。斯文会初期を頂戴に差出可申候。先は右のみ、勿々不乙。 九月十日 服部宇之吉 山田準殿

## IV | 渋沢栄一と陽明学

「義利合一」「道德経済合一」を主張した渋沢は、つねに宋学・朱子学の「義利峻別」を批判したから、渋沢の言葉のなかで朱子学は肯定的な文脈で語られることは殆どない。これに対して、「事実と理論とが一致」せねばならないという実業家としての信念から、陽明学についてはその「知行合一」の考えに関心を寄せていた。

渋沢が長年にわたって支援した活動に、東敬治（1860～1935、岩国の人、号正堂、東澤瀉の嗣子）の陽明学会がある。東は、明治30年代から大正期にかけて興隆した陽明学による社会啓蒙活動の、東京における中心人物と目され、王陽明の学問を振興し世道人心を扶植するために王学会を設立して、公開の演説会や伝習録講話などを開催した。運動組織として明善学社を創立し、明治39年（1906）に月刊機関誌『王学雑誌』を発刊した。明治41年（1908）には機関誌を『陽明学』と改称し、また洗心洞の流れを汲む大坂陽明学会との合同に成功し、これに呼応して山田準が鹿児島陽明学会を設立するなど、次第に運動は全国的な盛り上がりを見せる。

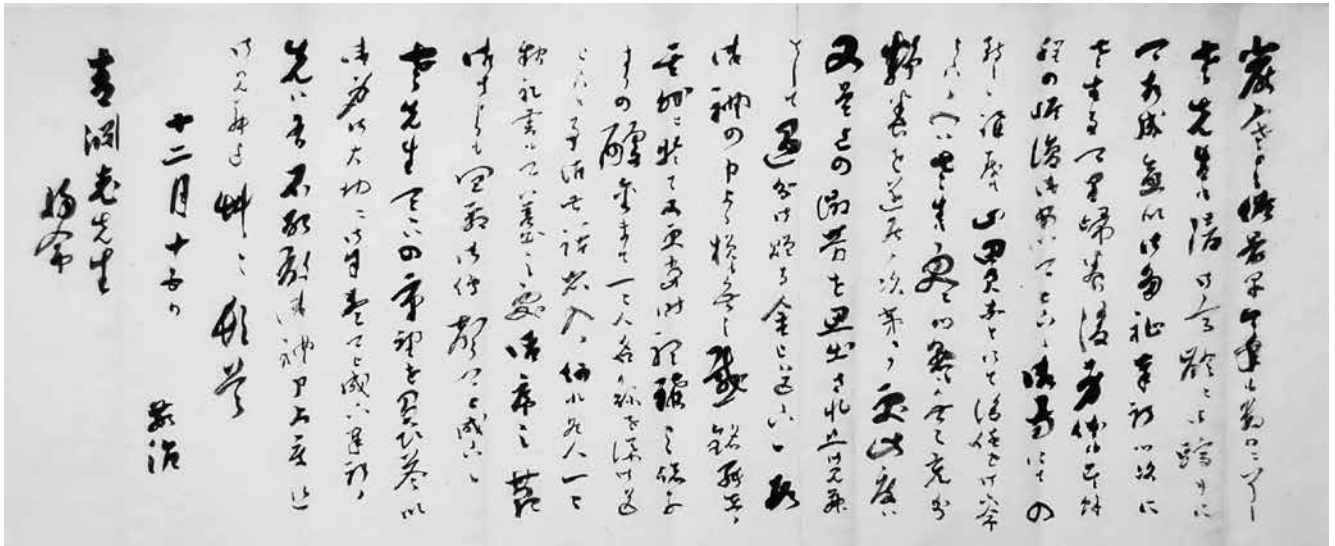
渋沢は、東が明治41年4・5月に名望家に醸金を呼びかけて組織強化を図った時に、すぐにこれに呼応している。具体的な活動としては、①学舎を設け後進を教育すること、②陽明学に関する書籍の収集保存を図り有益な著作を刊行すること、③月例会、年大会を開くことを掲げており、実際に寄宿舎を備えた学塾を開いて地方からの上京学生を寄宿させている。

ところが、大正9年（1920）頃になると、大坂陽明学会では一部が左傾化して活動が分裂し、また物価高騰の影響をうけて東京の東も機関誌発行さえ困難な状況に陥っていた。この状況に対して、渋沢は更なる支援を行っている。翌10年（1921）3月13日に飛鳥山の渋沢邸において春季大懇親会を開催し、また東に対して『陽明先生全書』の会読を提案している。これを受けて、東は月例講演会を開催し、また第2・4土曜に兜町の渋沢事務所において『陽明先生全書』の会読を行うこととなった。

渋沢は大正10年（1921）3月13日の陽明学会懇親会の席上、次のように語っている。「斯様な地味な学説は、決して目下欧米より伝来する突飛なる新説のやうに、青年客気の人々が珍重することでないのは時勢の然らしむる処でございますから、一般の流行は望みませぬけれども、併し左様な新奇の説のみに依つて、斯る真摯質実なる学説が段々世の中を引退くやうになることは、吾々が大に注意して其挽回に努むるのが、即ち正道を重んずる御同様の務めであらうと思ひます。」

渋沢は、「地味な学説」が流行することがないのは時勢で仕方がないとしながらも、彼自身は社会主義などの時流の新説になびくことなく、じつくりと腰を据えて共に地味な講読をしたいと東に呼びかけた。東はこれに応じて、昭和3年（1928）に山田準を後継者として勇退するまで、陽明学の講義・講話を継続した。渋沢から東の後を託された山田は、新たに「陽明会」を発足し、『伝習録』の講読を継続していった。

渋沢の陽明学への関心と陽明学会への支援は、上述のような「地味」なものであり、時流に便乗・迎合するようなものではなかった。



### 35 東敬治書簡 (渋沢栄一宛、昭和3年(1928)12月15日、F685)

病気がちとなった69歳の東は、20年余り続けた陽明学会の活動に終止符をうって帰郷した。渋沢は渋沢自身の分以外に、陽明学会の聴講者から醸金して見舞金を贈った。陽明学会の活動については、後任として山田準に委託してほしいと述べている。

【翻刻】 厳寒之候、最早今年も数日に了候。老先生も倍御高齢に御躰りに可相成、愈以御多祉奉祈候。次に老生事、郷里帰養後、身体も已に餘程の恢復、御安心可被下候。御方にての致し候講義も、山田君などにて後任を御下命被下候へば、老生も更に心懸も無之、充分静養を遂居候次第に候処、此度は又是迄の微勞を思出され、且御見舞として過分御贈与金被送下候段、御礼の申上候様も無之、感銘罷在候。其外に於て又更當時聴講之諸子よりの醸金まで、一々人名録を添御送被下候事、御世話恐入候。何れ各人一々報礼書も可差出之処、御序之節、御方よりも宜敷御伝声可被成下候。老先生天下の重望を負ひ、益以御身御大切に御自愛可被成下奉祈候。先は右不取敢御礼申上度、且御見舞迄艸々頓首。 青淵老先生 将命 十二月十五日 敬

(封筒) 東京麹町区永楽町二ノ一仲二十八号館 渋沢栄一様御執事/封 十二月十五日 山口県熊毛郡平生町 東敬治 昭和参年十二月拾八日





来書拝見、渋沢翁御薨去、御同哭之至申迄も無之候。就ては陽明会代表として御見舞被下候事、適當之御計らひ難有奉存候。老生は今回は御重患と拝察仕候より、彼是三回も參邸仕候處、毎度種々事情により臨終の告別申上候事不相成候事は、乍遺憾致方無御座候。此上は告別式の時と存居候處、斎場当日如何、事情未明に付、今日參邸告別にいたしおき申候間、乍憚り文も貴公にて御成稿御供被成下候得ば仕合に奉存候。今日に於て、さして彼は長文申上候必用も有之間敷、事實を申せば明治四十一年陽明学会創立以来、已に翁の御關係を得、評議員中に御加入被下、雑誌発行殆ど三十年、其間陽明学会の一部事業として陽明全書講演會、即今日の陽明會は翁の御發起とも可申、發會式、翁の御邸にて挙行もなしたる次第に御座候。先は是迄事をも申す外無之、其他為道為國御尽力御功績申迄も無之事かと存候。今日急に構文之餘裕も無之、因て陽明會代表として貴公簡單なる一文御供被下候事は被願間敷候哉。御願申上候。猶追悼會の事も最可然と存候。是亦一に貴公の御世話御願申上候。 山田濟斎大兄 十一月十二日 敬治

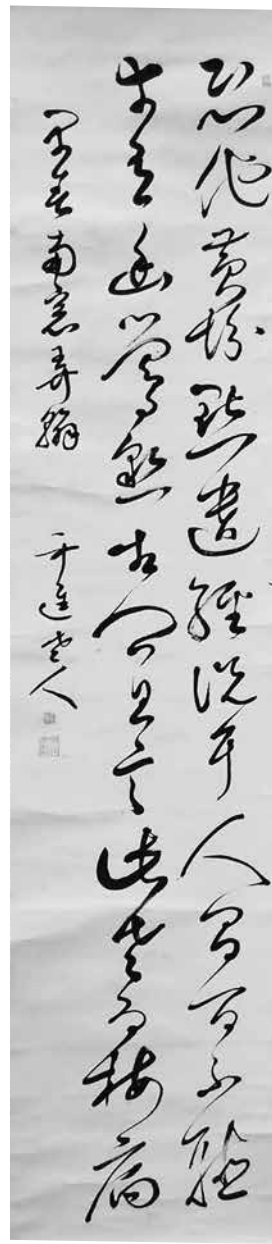
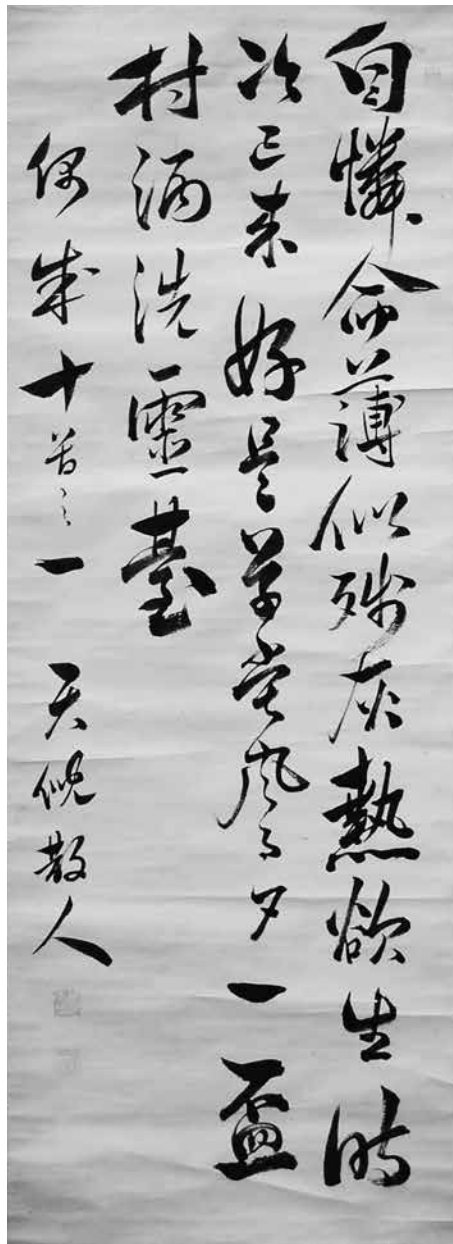
陽明會中：御加入と新法發行と  
 三十餘年陽明會の一部分事業として  
 陽明全書講演會等の陽明會の  
 御功績と御關係の御邸にて  
 御見舞被下候事、先は是迄事をも申す外無之、其他為道為國御尽力御功績申迄も無之事かと存候。今日急に構文之餘裕も無之、因て陽明會代表として貴公簡單なる一文御供被下候事は被願間敷候哉。御願申上候。猶追悼會の事も最可然と存候。是亦一に貴公の御世話御願申上候。 山田濟斎大兄 十一月十二日 敬治

### 36 | 東敬治書簡(山田準宛〔昭和六年(1931)〕11月12日、F683)

渋沢は昭和6年(1931)11月11日に92歳で歿した。東は翌12日渋沢邸に出向いて個人的に告別したので、正規の告別式における弔文の作成を山田準に委ねると言い、渋沢の援助によって長年継続してきた陽明学会の活動を回顧している。

**【翻刻】** 来書拝見、渋沢翁御薨去、御同哭之至申迄も無之候。就ては陽明会代表として御見舞被下候事、適當之御計らひ難有奉存候。老生は今回は御重患と拝察仕候より、彼是三回も參邸仕候處、毎度種々事情により臨終の告別申上候事不相成候事は、乍遺憾致方無御座候。此上は告別式の時と存居候處、斎場当日如何、事情未明に付、今日參邸告別にいたしおき申候間、乍憚り文も貴公にて御成稿御供被成下候得ば仕合に奉存候。今日に於て、さして彼は長文申上候必用も有之間敷、事實を申せば明治四十一年陽明学会創立以来、已に翁の御關係を得、評議員中に御加入被下、雑誌発行殆ど三十年、其間陽明学会の一部事業として陽明全書講演會、即今日の陽明會は翁の御發起とも可申、發會式、翁の御邸にて挙行もなしたる次第に御座候。先は是迄事をも申す外無之、其他為道為國御尽力御功績申迄も無之事かと存候。今日急に構文之餘裕も無之、因て陽明會代表として貴公簡單なる一文御供被下候事は被願間敷候哉。御願申上候。猶追悼會の事も最可然と存候。是亦一に貴公の御世話御願申上候。 山田濟斎大兄 十一月十二日 敬治

## V | 渋沢栄一とその知友の漢学者たちの書



### ★37 (右) | 海保竹逕書幅・七言絶句「早春南窓弄翰」

渋沢は文久元年（1861）に江戸に出て、儒者海保漁村の伝経廬に学んだ。漁村は高名な考証学者だが、渋沢が入塾した頃は既に高齢で、嗣子の竹逕（1824～1872、名は元起）が「若先生」と呼ばれて代講していた。渋沢は学力を認められ塾頭を務めていたが、ある時夜遊びを咎められて竹逕から破門されかけたという逸話も残る。

【翻刻】恐他黄垆點遺經 洗耳人間百不聽 幸有幽鶯懇相問 且言此老為梅扁 早春南窓弄翰 竹逕老人

### ★38 (左) | 信夫恕軒書幅・七言絶句「偶成十首之一」

信夫恕軒（1835～1910、名は榮、別号天倪）は漢学者で、海保塾時代の渋沢の同門。初期の東京大学文学部で漢文を講じ、その学生であった三宅雪嶺は信夫が「然諾」という語の説明する際に「この語は今の世では新門辰五郎か渋沢栄一に当て嵌まる」と言ったと回想している。

【翻刻】自憐命薄似殘灰 熱欲生時冷已來 好是草堂風雨夕 一盃村酒洗靈臺 偶成十首之一 天倪散人

39 阪谷朗廬ほか諸家寄合書幅  
(1864~68年頃、掛軸・卷子0281)

仲田某の求めに応じて、儒者・文人が書画を寄せ書きした一幅。備中・備後の人物が多いが、土佐藩士も混じり、幕末西国の儒者・文人のネットワークを感じさせる。

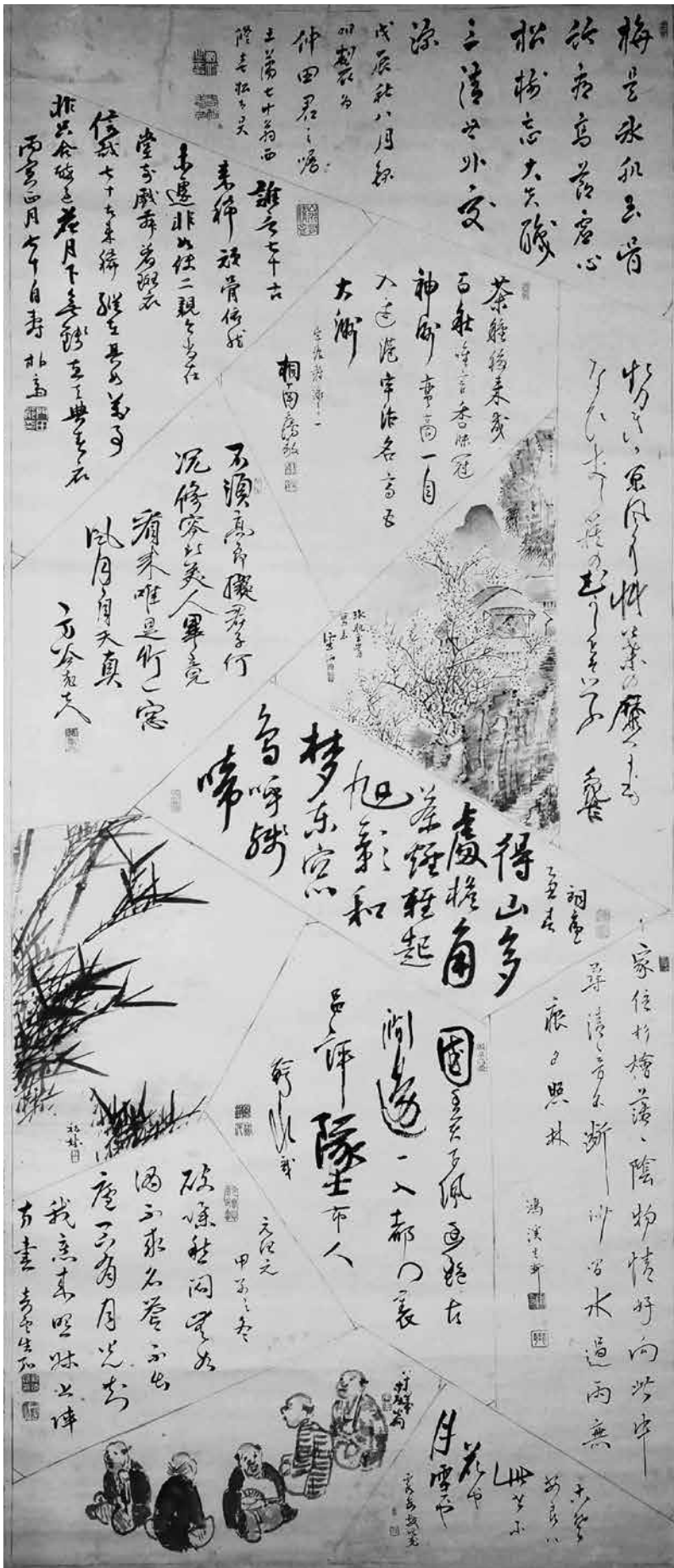
過激な尊攘運動に身を投じ、京都に出奔した渋沢は、一橋家の用人平岡四郎の知遇を得て、一橋家に仕えることになった。渋沢が備中井原の一橋領で募兵することになった時、井原・興讓館に学を講じる儒者阪谷朗廬と知合った。後年、渋沢は朗廬の二男で官僚となった芳郎に次女琴子を嫁がせている。興讓館高等学校には、渋沢が揮毫した額を掲げた門が残っている。

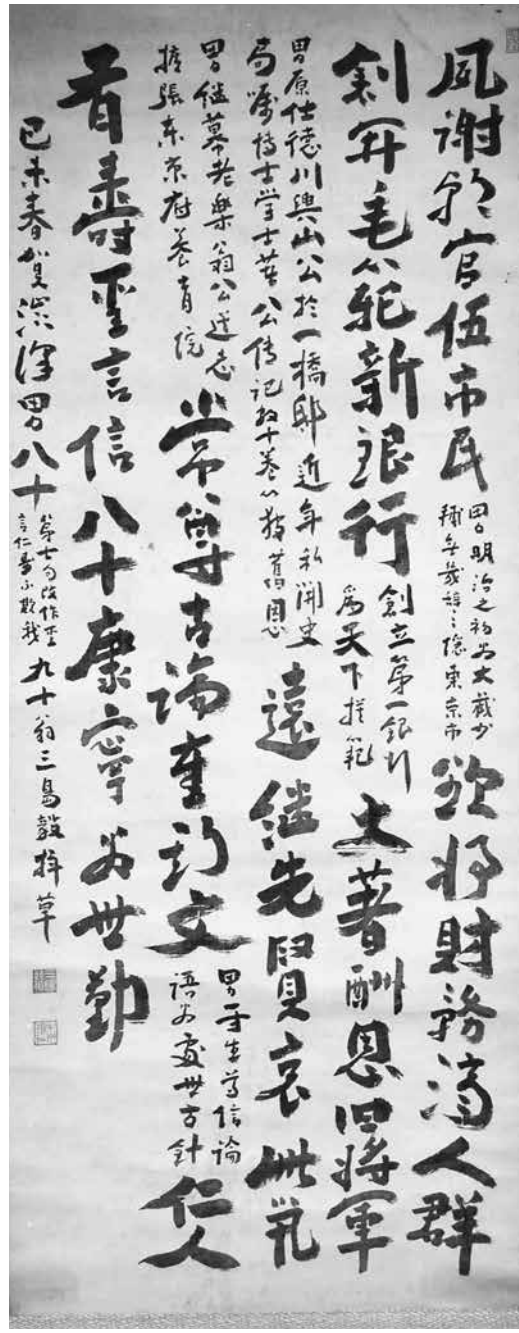
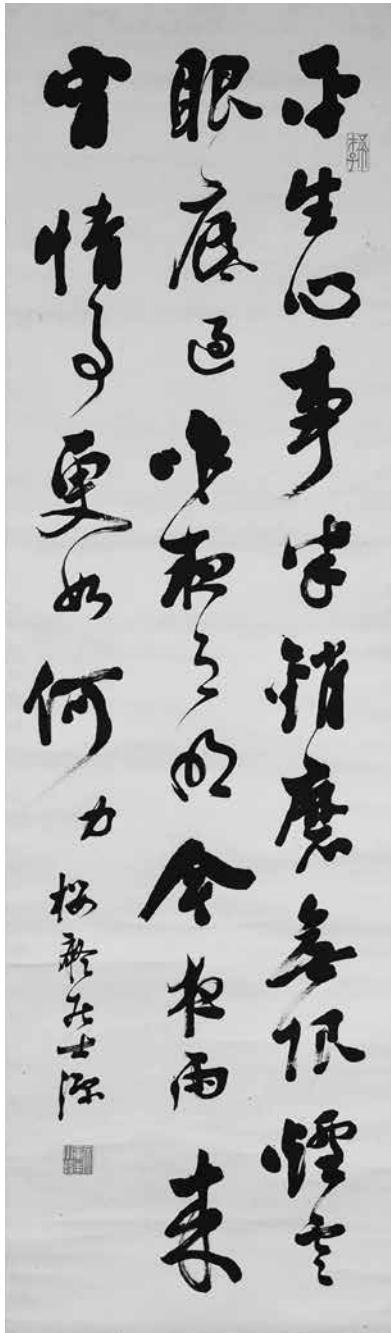
阪谷朗廬が乙酉春（慶應元年〈1865〉）に揮毫している五言絶句は次の通り。

啼鳥呼残夢  
東窓旭影和  
茶煙輕起処  
檐角得山多

揮毫者

- 01 西春松（土佐浪士）
- 02 門田朴斎（備後福山藩儒）
- 03 亀谷
- 04 三島中洲（備中松山藩儒）
- 05 山田方谷（備中松山藩儒）
- 06 三好雲仙（庭瀬文人）
- 07 阪谷朗廬（井原儒者）
- 08 松林
- 09 進鴻溪（備中松山藩儒）
- 10 江木鰐水（備後福山藩儒）
- 11 新浪奇雲
- 12 霞岳
- 13 麦翁





40 (右) | 三島中洲書幅・七言律詩「己未春賀澁沢男八十」(大正8年(1919)、掛軸・卷子0147)

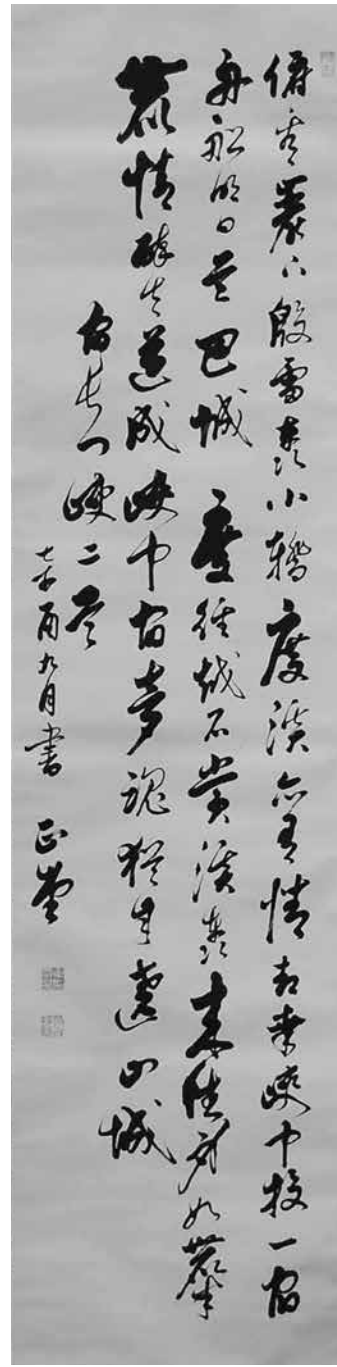
大正8年(1919)は三島中洲の没した年である。この書は、同年新春に澁沢栄一の八十歳を賀して贈った詩幅。三島は澁沢について、その金融財政とともに徳川慶喜伝や漢学振興の功績を讃えている。那智佐典によれば、この書は澁沢に贈るために揮毫したが、墨が薄かったので気に入らず、書き直して澁沢家に贈った。最初に書いた方は那智が三島から頂戴し、昭和6年(1931)澁沢の追悼式に当たって装丁したものである。

【翻刻】風謝朝官伍市民、欲將財務濟人群、創開垂範新銀行、大著酬恩旧將軍、遠繼先賢哀此榮、常尊古論重斯文、仁人有壽聖言、信、八十康寧為世勤、己未春賀澁沢男八十、九十翁三島毅拜草 (\*細字の自注は省略に従う)

★41 (左) | 福地源一郎書幅・七言絶句

福地源一郎(1841~1906、号桜癡)は儒医福地苟庵の子として長崎生まれ、江戸に遊学し、文久・慶應の幕府遣欧使節に通訳として随行。澁沢とは明治元年に帰朝した頃から交流があり、国立銀行条例制定の際にも協力した。澁沢は福地の東京日日新聞創設を支援し、『徳川慶喜公伝』執筆を委嘱するなど、親交があった。

【翻刻】平生心事半銷磨 無限煙雲眼底過 昨夜月明今夜雨 來宵情事更如何 力 桜癡居士源



★42 (右) 東敬治書幅・七言絶句二首「宿長門峡二首」(辛酉〈大正10年1921〉9月)

東敬治(1860～1935、号正堂)は父澤瀉の学を継承した陽明学者として知られるが、傍ら詩書画に堪能であった。本書幅は、大正10年(1921)9月に郷里山口に帰省した時の作で、東敬治62歳の書。この年は渋沢が陽明学会の維持のために発議した賛助会が発足した年である。陽明学会はこれによって何とか命脈を保ち、月次講演会と『陽明先生全書』会読に着手する。

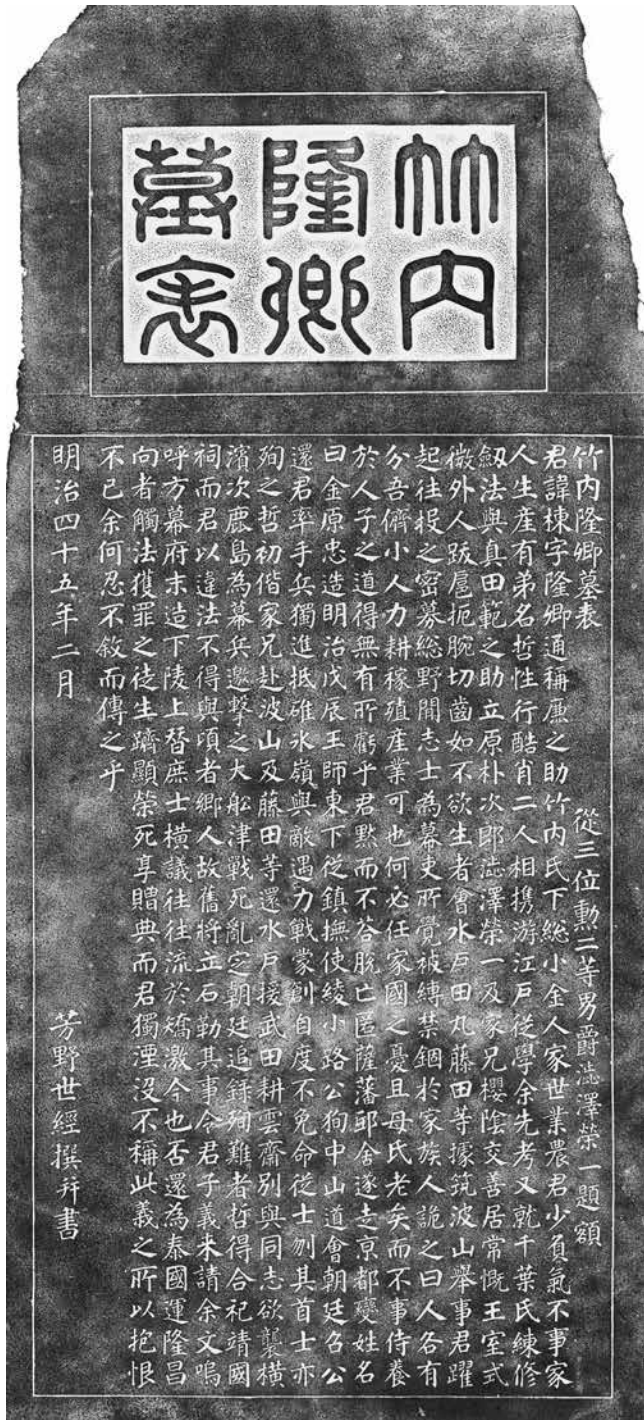
【翻刻】俯看巖下殷雷轟 小輪度峡亦有情 却幸峡中投一宿 舟船明日是巴城  
度徑越石賞溪轟 來往身如麋鹿情 醉去送成峡中宿 夢魂猶自遶山城 辛酉九月書 正堂

★43 (左) 山田準書幅・七言絶句「孔子聖誕二千五百年式典賦獻」(昭和24年〈1949〉)

山田準(1867～1952、号濟齋)83歳の書。山田は昭和18年(1943)3月で二松学舎専門学校長を辞して、郷里の備中高梁に帰隠し、以後は『方谷全集』の編纂刊行に打ち込んだ。山田も詩に堪能で、帰隠後も岡山に新たな詩友(阿藤伯海や木下周南など)を見出して、晩年まで作り続けている。

【翻刻】巍々是道與天尊 聖誕二千五百辰 去食去兵信難去 大哉孔子大哉言 孔子聖誕二千五百年式典賦獻 八十三叟濟齋準





44 (右) 芳野世経撰・渋沢栄一題額「竹内隆卿墓表」(明治45年(1912)2月)

竹内隆卿(廉之助)は下総小金出身の尊攘志士で、渋沢とは江戸の千葉道場で共に剣術を修めた仲である。竹内は天狗党に参加して捕縛され、後に赤報隊に加わり賊名を着て自刃した。その雪冤を望む子孫が渋沢に援助を求めたことから、渋沢はその復権に陰ながら尽力し、碑文に題字を揮毫し、東漸寺で行われた建碑除幕式にも出席した(大正2年(1913)2月21日)。長谷川伸『相良総三とその同志』参照。撰文者の芳野世経(1850～1927)は幕末の昌平黌儒者芳野金陵の嗣子で、東京市会議員・衆院議員などを歴任し、大塚先儒墓所保存や斯文会の役員も務めた。父金陵の家塾には尊攘志士が少なくなく、兄桜蔭も天狗党に加担した関係から、竹内隆卿についても聞知していた。

45 (左) 渋沢栄一書幅・一行「馬踏春泥半是花(馬は春泥を踏む 半ばは是花なり)」(掛軸・卷子0282)

渋沢栄一が好んで揮毫した詩句で、遺作が比較的多く残っている。中唐の詩人竇鞏の七言絶句「襄陽寒食寄宇文籍」(『全唐詩』)の結句である(煙水初銷見萬家 東風吹柳萬條斜 大堤欲上誰相伴 馬踏春泥半是花)。

## 参考資料

- ・三島中洲撰『中洲文稿』初集三卷（一八九八年）・第二集三卷（一八九八年）・第三集三卷（一九一一年）・第四集三卷（一九一七年）、二松学舎蔵版。  
<https://www.nishogakusha-kanbun.net/datebase2/0068~0071>
- ・『二松学舎会誌』一〜四十一輯、二松学舎、一八九六〜一九一九年。
- ・洪沢栄一著『徳川慶喜公伝』、龍門社、一九一八年。
- ・洪沢栄一著『実験論語処世談』実業之世界社、一九二二年。デジタル版、<https://eichi.shibusawa.or.jp/features/jikkenrongo>
- ・『斯文六十年』斯文会、一九二九年。
- ・『二松学舎六十年史要』二松学舎、一九三七年。
- ・『洪沢栄一伝記資料』龍門社編、本編五八巻、別巻一〇巻、一九四四〜七一年。デジタル版、<https://eichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main>
- ・『二松学報』一〜十一輯、二松学舎、一九二〇〜一九二七年。  
<https://www.nishogakusha-kanbun.net/datebase2/9010>
- ・『昔夢会筆記』洪沢栄一編・大久保利謙校、平凡社・東洋文庫、一九六七年。
- ・『安川敬一郎日記』1〜4、北九州市立自然史歴史博物館、二〇〇七〜二〇二二年。日比野利信解題。
- ・町泉寿郎「東敬治書翰（山田準宛て）にみる陽明学会の活動」『陽明学』二二〇号、二松学舎大学東アジア学術総合研究所、二〇〇八年。
- ・『洪沢栄一は漢学とどう関わったか』、『洪沢栄一と「フィランソロピー」』1）ミネルヴァ書房、二〇一七年。
- ・『帰一協会の挑戦と洪沢栄一』、『洪沢栄一と「フィランソロピー」』2）ミネルヴァ書房、二〇一八年。

## 編集 後記

二松学舎大学所蔵の洪沢栄一資料は、日本漢学に関する各種プロジェクトの進行も一助となって確実に増加してきた。『洪沢栄一伝記資料』の編纂時点で山田準家所蔵であった洪沢書簡は一九九〇年代に本学に移行している。三島中洲宛ての洪沢書簡は従来、本学に殆ど所蔵されていなかったが、近年になって三島中洲の母方の実家小野家から寄贈を受けた資料に、中洲が生前に割譲した洪沢書簡が含まれていた。また、斯文会からは書幅類の譲渡を受けた。パンデミックによって原資料を手にする機会は確実に減少したが、研究者にとってはこうしたバズルを一つ一つ組み上げる作業は楽しいものである。その一方で「参考文献」に見られる通り、電子データの公開が進捗して、新たな資料環境が生まれている。洪沢への関心が高まっている今、多くの人に資料を見ていただくことができるよう努めたいと考えている。

（町 泉寿郎）

### 三島中洲と近代 ―其七―

#### 洪沢栄一と近代漢学

発行日 令和三年五月一日

編集者 大学資料展示室運営委員会

発行者 二松学舎大学附属図書館

〒一〇二―八三三六

東京都千代田区三番町六一一六

印刷 株式会社 サンセイ

